財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第33集

# 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（11）

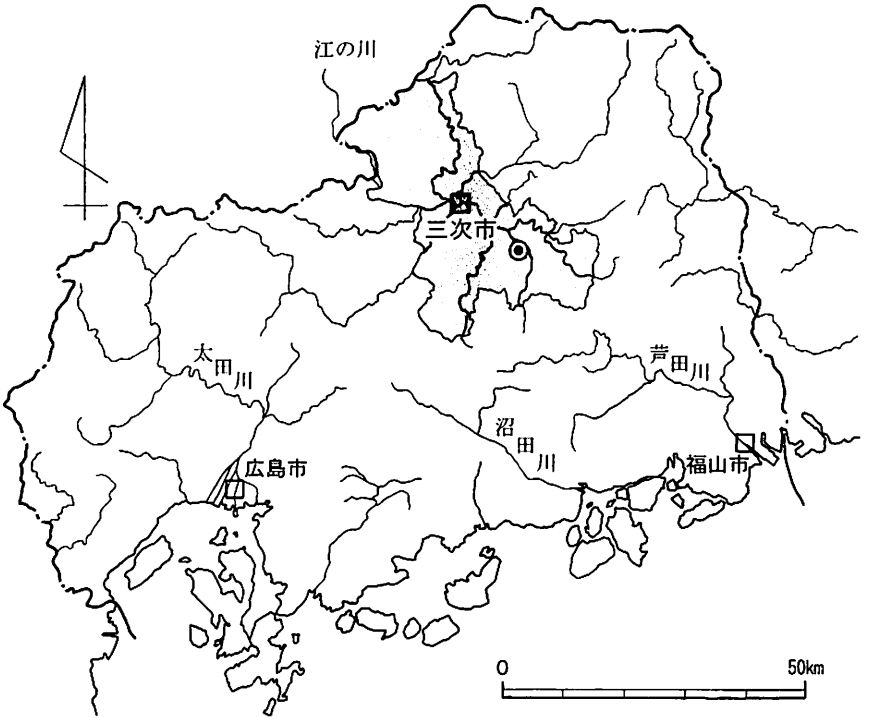
## 大番奥池第１～３・７号古墳

２０１０

財団法人　広島県教育事業団

# 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（11）

## 大番奥池第１～３・７号古墳




三次市位置図（◉は古墳群を示す。）

２０１０

財団法人　広島県教育事業団

a　大番奥池古墳群遠景（空中写真，東から）

b　第２号古墳全景（空中写真，南から）

a　第３号古墳全景（空中写真，南から）

b　出土遺物（左；第２号古墳ＳＫ２出土須恵器14・16，右；第３号古墳ＳＫ１出土須恵器20・21）

# 例　言

1　本書は，平成18（2006）年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る大番奥池第１～３・７号古墳（三次市吉舎町敷地字中山546ほか所在）の発掘調査報告である。

2　発掘調査及び整理作業・報告書作成は，国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。

3　発掘調査は，梅本健治，辻満久が担当した。

4　出土遺物の整理・復元は梅本と賃金職員の木村和美が，実測・図面の整理・写真撮影は梅本が中心となって行った。

5　本書は，梅本が執筆・編集した。

6　図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。

7　本書に使用した北方位はすべて平面直角座標第Ⅲ座標系北である。

8　第２図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000の地形図（吉舎）を使用した。

9　当初は第３号古墳の東側にある第４号古墳の一部が調査範囲に含まれる可能性があったが，調査の結果，第４号古墳に関係する遺構は検出できなかったので，調査の対象から外した。また，第７号古墳は当初，第３号古墳の攪乱坑の排土の堆積と認識していたが，調査の結果，小型の円墳であることが明らかになったので，新出の古墳として報告することとなった。

10　遺構の略号はＳＫのみで，古墳の埋葬施設を示す。

11　埋葬施設の副葬品の位置の説明における左右は被葬者から見て，である。

# 目　　次

Ⅰ　はじめに …… (1)

Ⅱ　位置と環境 …… (5)

Ⅲ　調査の概要 …… (10)

Ⅳ　遺構と遺物 …… (12)
　1　大番奥池第1号古墳 …… (12)
　2　大番奥池第2号古墳 …… (14)
　3　大番奥池第3号古墳 …… (18)
　4　大番奥池第7号古墳 …… (24)

Ⅴ　ま　と　め …… (37)

# 巻頭図版目次

巻頭図版　1　a　大番奥池古墳群遠景（空中写真，東から）
　　b　第2号古墳全景（空中写真，南から）
巻頭図版　2　a　第3号古墳全景（空中写真，南から）
　　b　出土遺物

# 挿図目次

第1図　中国横断自動車道尾道松江線路線図 …… (3)
第2図　周辺遺跡分布図（1:25,000） …… (7)
第3図　大番奥池古墳群周辺地形図（1:3,000） …… (11)
第4図　大番奥池第1～4・7号古墳調査前地形測量図（1:200） ……折込み
第5図　大番奥池第1～3・7号古墳墳丘測量図（1:200） ……折込み
第6図　大番奥池第1・2号古墳墳丘土層断面実測図（1:60） ……折込み
第7図　大番奥池第1号古墳出土遺物実測図（1:2，1:3） …… (13)
第8図　大番奥池第2号古墳ＳＫ1実測図（1:30） …… (14)

第９図　大番奥池第２号古墳ＳＫ２実測図（1:30）　……折込み
第10図　大番奥池第２号古墳出土遺物実測図（1:2，1:3）　……（17）
第11図　大番奥池第３・７号古墳墳丘土層断面実測図（1:60）　……折込み
第12図　大番奥池第３号古墳ＳＫ１・２実測図（1:30）　……（19）
第13図　大番奥池第３号古墳ＳＫ３・４，第７号古墳ＳＫ１実測図（1:30）　……（21）
第14図　大番奥池第３号古墳出土遺物実測図（1:2，1:3，1:4）　……（23）
第15図　大番奥池第７号古墳出土遺物実測図（1:2，1:3）　……（24）

# 表目次

第１表　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る報告書一覧　……（２）
第２表　大番奥池第１～３・７号古墳埋葬施設一覧　……（10）
第３表　大番奥池第１～３・７号古墳出土遺物一覧　……（25）
第４表　広島県内の主な墳頂部複数埋葬古墳　……（27）
第５表　広島県内の主な須恵器副葬・供献古墳　……（31）
第６表　広島県内の主な鉄鏃副葬古墳　……（33）

# 図版目次

図版１　a　古墳群遠景（空中写真，東から）
b　古墳群全景（空中写真，東から）
図版２　a　第１号古墳全景（空中写真，北から）
b　第２号古墳全景（空中写真，南から）
図版３　a　第３・７号古墳全景（空中写真，南から）
b　第１号古墳全景（調査前，西から）
c　第１号古墳墳丘（北西から）
図版４　a　第１号古墳墳丘土層（東西方向東半，北から）
b　同上（東西方向西半，北から）
c　同上（南北方向北半，西から）
図版５　a　第１号古墳墳丘土層（南北方向南半，西から）
b　第２号古墳全景（調査前，北から）
c　第２号古墳墳丘（南西から）
図版６　a　第２号古墳墳丘土層（東西方向東半，南から）
b　同上（東西方向西半，南から）
c　同上（南北方向南半，東から）

図版７　a　第２号古墳墳丘土層
（南北方向北半，東から）
b　第２号古墳周溝土層
（ＳＷ区，南東から）
c　第２号古墳ＳＫ１・２（北から）
図版８　a　第２号古墳ＳＫ１（北から）
b　第２号古墳ＳＫ２（北から）
c　第３号古墳全景（調査前，
南から）
図版９　a　第３号古墳墳丘（南西から）
b　第３号古墳墳丘土層
（東西方向東半，北から）
c　同上（東西方向西半，北から）
図版10　a　第３号古墳墳丘土層
（南北方向北半，西から）
b　同上（南北方向南半，西から）
c　第３号古墳ＳＫ１（北から）
図版11　a　第３号古墳ＳＫ２（北から）
b　同上ＳＫ３（北から）
c　同上ＳＫ４（南から）
図版12　a　第３号古墳ＳＫ１～４
（南西から）
b　第７号古墳墳丘土層
（東西方向，南から）
c　同上ＳＫ１（北から）
図版13　a　第２号古墳ＳＫ１鉄鎌12
出土状況（南から）
b　同上鉄鏃９～11出土状況
（南から）
c　同上ＳＫ２須恵器14出土状況
（南西から）
d　第２号古墳ＳＫ２作業風景
（西から）
e　第３号古墳ＳＫ１須恵器
出土状況（北から）
f　同上ＳＫ２須恵器出土状況
（北から）
g　同上ＳＫ３刀子出土状況
（東から）
h　同上ＳＫ４鉄器出土状況
（南東から）
図版14　出土遺物（１）
図版15　出土遺物（２）

# Ⅰ　はじめに

大番奥池第１～３・７号古墳の発掘調査は中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係るものである。本事業は，本州四国連絡道路尾道今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって，山陰，山陽及び四国地方を南北に結ぶ地域連帯構想を推進し，本圏域の産業，経済及び文化の発展と沿線地域の生活向上に寄与しようとするものである。

日本道路公団中国支社（以下，「道路公団」という。）は，平成13（2001）年２月，当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて，広島県教育委員会（以下，「県教委」という。）と協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い，平成14（2002）年９月事業地内に試掘調査が必要な箇所が存在する旨を回答した。県教委は平成17（2004）年11月に当該箇所の試掘調査を実施し，大番奥池第１～４号古墳の存在を確認した旨を同年12月19日に道路公団に回答した。この遺跡の取扱いについて県教委と道路公団は協議を重ねたが，設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。なお，中国横断自動車道尾道松江線建設事業は，平成17（2005）年10月１日の日本道路公団の解散に伴って西日本高速道路株式会社（以下，「西日本高速」という。）に引き継がれ，平成18（2006）年度からは国土交通省に承継された。そのため，西日本高速は，平成18（2006）年２月９日付けで三次市教育委員会（以下，「市教委」という。）あてに「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し，市教委は同年２月16日付けで西日本高速あてに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。国土交通省はこれを受けて，同年３月２日付けで財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下，「教育事業団」という。）に大番奥池第１～４号古墳（1,428㎡）の調査依頼を行なった。国土交通省と教育事業団は同年４月３日付けで委託契約を結び，教育事業団は同年４月17日から８月４日までの３か月半発掘調査を行った。なお，７月15日には三次市教育委員会と共催で遺跡見学会を開催し，60名の参加があった。

本報告書は，以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

発掘調査にあたっては，国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所，西日本高速道路株式会社中国支社広島工事事務所，三次市教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

**第１表**　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

| 報告書 | 遺跡名 | | 地区名 | 調査期間 | 所在地 | 時期 | 内容 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| （1） | 牛の皮城跡（北郭群） | 第１次 | 畝状竪堀群 | 平成15年１月20日～３月14日 | 尾道市御調町大町字二の丸 | 中世 | 城跡 |
| | | 第２次 | １～４郭 | 平成15年７月７日～10月31日 | | | |
| | | 第３次 | 西竪堀 | 平成15年11月10日～11月28日 | | | |
| | 曽川２号遺跡 | | | 平成15年１月20日～３月７日 | 尾道市御調町大町字西川 | 古代末～中世 | 集落跡 |
| （2） | 曽川１号遺跡 | A地区 | 旧・平成14年度調査区 | 平成14年10月21日～平成15年１月17日 | 尾道市御調町大町字曽川 | 弥生時代～中世 | 集落跡 |
| | | B地区 | 旧・Ｐ２第一調査区 | 平成15年４月７日～５月23日 | | | |
| | | C地区 | 旧・Ｐ２第二調査区 | | | | |
| | | D地区 | 旧・Ｐ１ | 平成16年１月６日～２月５日 | | | |
| （3） | 池ノ奥古墳 | | | 平成16年８月23日～10月28日 | 世羅郡世羅町宇津戸字天神 | 古墳時代後期 | 古墳 |
| （4） | 城根遺跡 | | | 平成15年１月27日～３月７日 | 尾道市御調町大町字城根 | 古墳時代か | 箱式石棺 |
| | 牛の皮城跡（北郭群） | 第４次 | ５郭 | 平成18年１月30日～２月24日 | 尾道市御調町大町字二の丸 | 中世 | 城跡 |
| | 曽川１号遺跡 | E地区 | 旧・Ｐ４ | 平成15年12月１日～12月19日 | 尾道市御調町大町字米田 | 縄文時代後期～中世 | 遺物包含層 |
| （5） | 曽川１号遺跡 | G地区 | 旧・Ｐ３ | 平成16年６月７日～８月６日 | 尾道市御調町大町字曽川・米田 | 弥生時代～中世 | 集落跡 |
| | | H地区 | 旧・Ｐ３側道 | | | | |
| | | I地区 | 旧・Ｐ４側道 | | | | |
| | | J地区 | 旧・Ｐ２ | 平成17年１月11日～３月４日 | | | |
| （6） | 曽川１号遺跡 | K地区 | | 平成17年４月11日～７月１日 | 尾道市御調町大町字曽川・米田 | 弥生時代～中世 | 集落跡 |
| （7） | 札場古墳 | | | 平成17年11月21日～平成18年１月27日 | 三次市後山町字札場 | 古墳時代後期 | 古墳 |
| | 大平遺跡 | | | 平成19年6月25日～10月５日 | 三次市後山町字大平 | 弥生時代後期～古代 | 集落跡 |
| | 後山大平古墳 | | | | | 古墳時代後期 | 古墳 |
| （8） | 北野山遺跡 | | | 平成18年７月３日～８月４日 | 三次市吉舎町敷地 | 平安時代 | 仏教関連の施設跡 |
| （9） | 向江田中山遺跡 | | | 平成18年４月17日～６月23日 | 三次市向江田町中山 | 飛鳥時代 | 集落跡 |
| (10) | 権現第１～３号古墳 | | | 平成17年７月11日～11月11日 | 三次市向江田町権現 | 古墳時代中期 | 古墳 |
| **(11) 本書** | **大番奥池第１～３・７号古墳** | | | **平成18年４月17日～８月４日** | **三次市吉舎町敷地** | **古墳時代後期** | **古墳** |

(報告書)

(1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曽川2号遺跡　中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書（1）』 2005年

(2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（2）曽川1号遺跡（A～D地区)』 2006年

(3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（3）池ノ奥古墳』 2007年

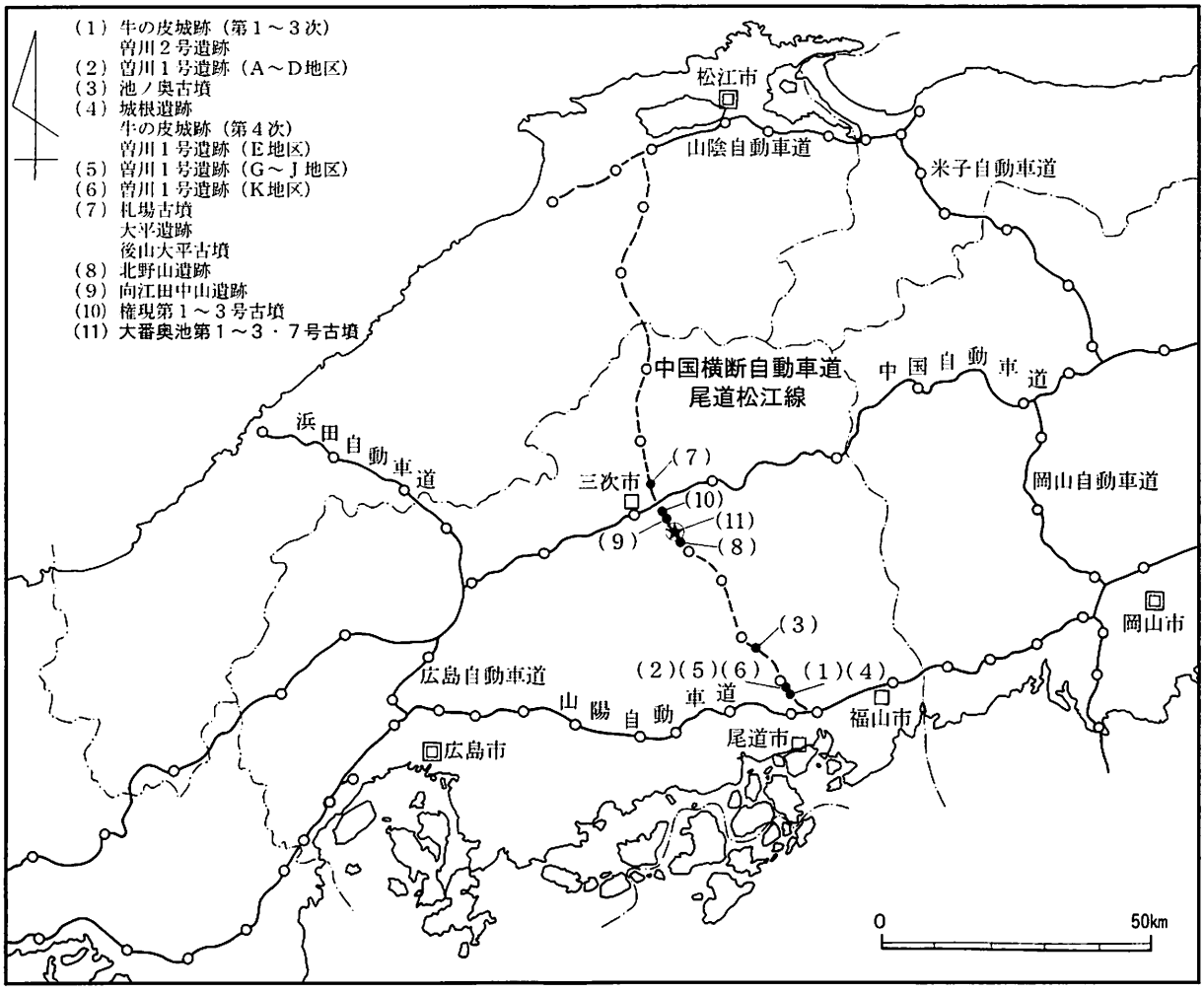
(4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4）城根遺跡　曽川1号遺跡（E地区）　牛の皮城跡（第4次)』 2008年

(5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（5）曽川1号遺跡（G～J地区)』 2008年

(6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（6）曽川1号遺跡（K地区)』 2008年

(7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（7）札場古墳　大平遺跡　後山大平古墳』 2009年

(8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（8）北野山遺跡』 2009年




**第1図**　中国横断自動車道尾道松江線路線図（(1)～(11)は報告書番号を示す。）

（9）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（9）向江田中山遺跡』 2010年
(10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）権現第１～３号古墳』 2010年

# Ⅱ　位置と環境

大番奥池第１～３・７号古墳は広島県北部の三次市吉舎町に所在する。三次市は49km×31kmと北西－南東方向に長い市で，旧双三郡吉舎町は平成16（2004）年４月に三次市と合併した。三次市南東部に位置する吉舎町は12km四方の町域で，その中央を南から北に江の川支流馬洗川が流下し，町域の北東部を流れる上下川を三次市三良坂町の西端で合わせて西に流れ，三次市街を抜けて本流となりやがて日本海に注ぐ。町域の大半は西の撫臼山（標高522.5m），南東の水呑山（標高557.2m）を最高所にほぼ標高250～500mほどの丘陵地帯で，馬洗川・上下川沿いに幅200～500mのごく狭く細長い谷底平野がみられる（標高190～300m）。町域は全体に標高が北西に低く，南あるいは東に高くなる。地形的には広義の三次盆地を形成する小盆地のひとつで，北は中国脊梁山地の一部を形成する備北山地に，南から東は吉備高原面の世羅台地及び甲奴高原と接する。三次市吉舎町は古来備後北部と南部を結ぶ交通の要衝で，帆立貝形古墳の県史跡三玉大塚古墳などの古墳を中心とする数多くの文化財が残されている。ここでは，大番奥池第１～３・７号古墳が存在する三次市吉舎町周辺を中心にその歴史的環境についてみていくことにしたい。

**旧石器・縄文時代**　町域南端の徳市地区の馬洗川本流と黒渕川が合流する地点の南岸の徳市遺跡で，二側縁加工の小型のナイフ形石器２点（安山岩・流紋岩製）が採集されている(1)。三次盆地では下本谷遺跡(2)をはじめ，江の川各支流の河岸段丘上に堆積する備北層群から近年旧石器の出土が相次いでおり(3)，これらとの比較検討が試みられようとしている。縄文時代の遺跡としては明確なものはない。

**弥生時代**　この時代についても殆ど様子はわかっていない。徳市遺跡及び大番奥池古墳群北方の馬洗川南岸の丘陵上に広がる敷地本郷遺跡から弥生土器や土師器が出土し，弥生時代～古墳時代の集落跡の存在が考えられる。

**古墳時代**　この時代の遺跡としては古墳がある。

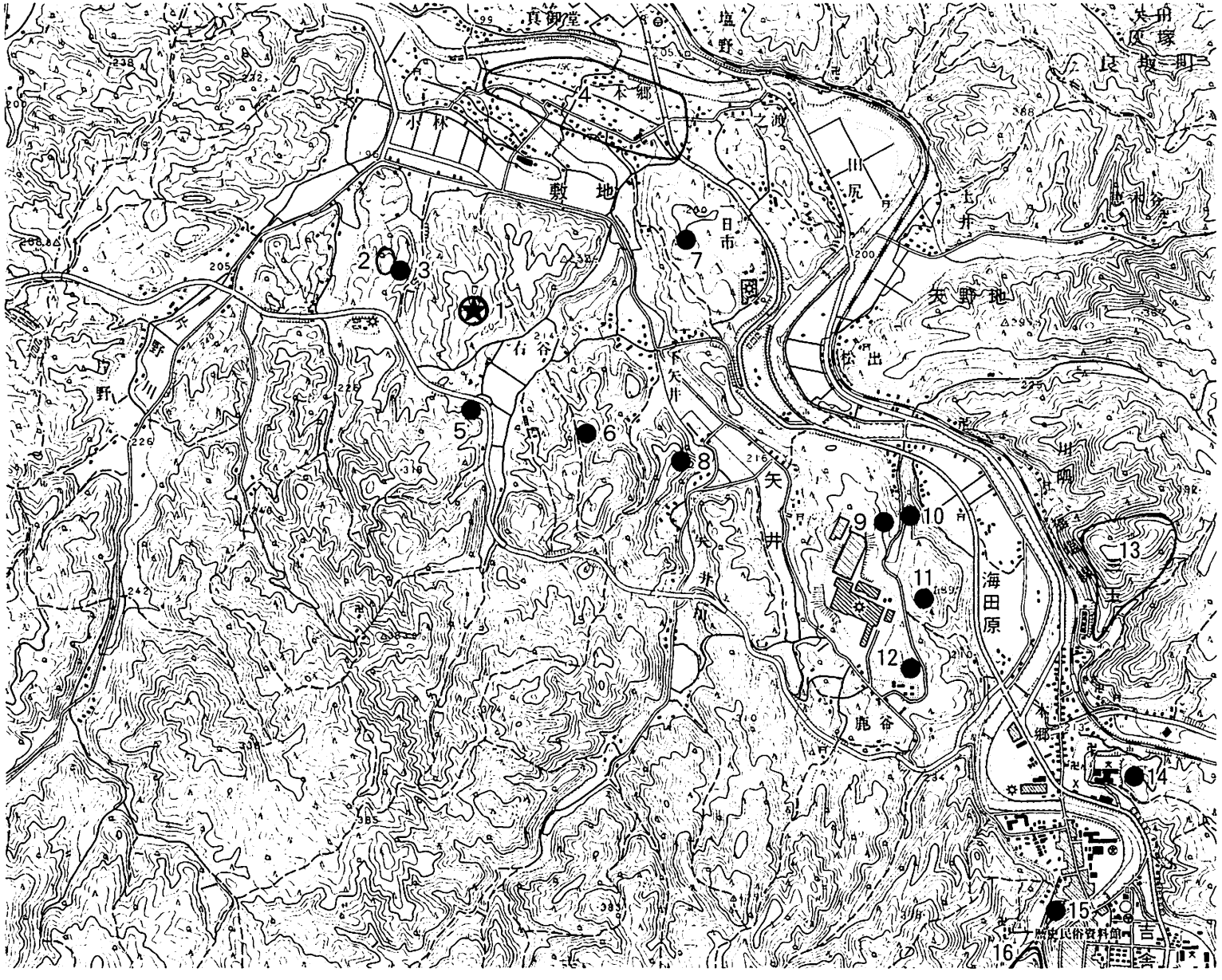
町域北西部の馬洗川沿いの敷地・矢井・海田原・矢野地地区や北東部の上下川流域の知和・上安田・安田地区などの標高200～300mの小起伏丘陵に多くの古墳が営まれている。その多くは直径数～10数mの円墳で，いずれも竪穴系埋葬施設である可能性が高い。そのなかに，全長20～30mほどの前方後円墳を数基程度含み，盟主墳の系譜に連なる古墳とみられる。特に，県史跡三玉大塚古墳(4)（三玉第１号古墳，三玉）は全長42mと町内最大規模をもつ帆立貝形古墳で，明治年間に短甲・筒形銅器・仿製鏡（珠文鏡・変形文鏡）をはじめ多くの鉄製品や装身具などが竪穴式石室からみつかっている。昭和55（1980）～昭和57（1982）年度に整備に伴って墳丘を中心とした調査が行われた結果，円筒埴輪・形象埴輪が出土し，三段の葺石が廻ることが判明した。５世紀後半の築造と考えられている。このほか，調査は行われていないが，全長28.5mの帆立貝形古墳

の八幡山第１号古墳（敷地）や海田原第20号古墳（全長40m，矢井），同第29号古墳（全長33m，矢井）などの前方後円墳がある。調査が行われた古墳としては，下矢井南(しもやいみなみ)第３～５号古墳(5)（矢井），寺津(てらつ)第１～３号古墳(6)（知和），片野(かたの)中山第９～12号古墳(7)（敷地），殿平(とのひら)古墳(8)（海田原），燎東(かがりひがし)古墳(9)（矢井）などがある。下矢井南第３～５号古墳は比高50mの丘陵上に位置する古墳群で，径18mと最大規模の円墳である第４号古墳では東西に並列する南北に長軸をもつ粘土槨（割竹形木棺）３基と土坑（割竹形木棺）１基の計４基の埋葬施設を検出し，鉄斧・鉄剣などの鉄器，竪櫛と類例の少ない筒形石製品が出土し，４世紀末～５世紀初頭の築造とみられている。寺津第１～３号古墳では，比高40～50mの丘陵端部の径9.8～12.5mの円墳２基と丘陵上の全長35～40mの前方後方墳１基の調査が行われた。前者の第１・２号古墳はいずれも木棺墓を埋葬施設とし，墳丘・周溝内から破砕された大甕など多くの須恵器が出土し，埋葬施設からも杯蓋・杯身のセットをはじめとする須恵器や玉類（勾玉・管玉）・刀子などが出土した。６世紀前葉～中葉の築造と考えられる。第３号古墳は県内でも類例の少ない前方後方墳で，現状保存されたため後方部の詳細は不明だが，前方部では粘土槨・箱式石棺・石蓋土坑といった埋葬施設が検出されている。５世紀後半～６世紀初頭の築造と考えられている。片野中山第９～12号古墳は，大番奥池古墳群が立地する丘陵の西隣の比高30mの低丘陵上に築造された径８～10mの円墳群で，土坑を埋葬施設としている。埋葬施設から鉄鏃や刀子，周溝内から須恵器などが出土し，５世紀末～６世紀前半に古墳が造られたと考えられる。殿平古墳は比高47mの丘陵端部に築かれた箱式石棺を埋葬施設とする径7.5mの背面カットの溝をもつ古墳である。遺物は出土していないが，埋葬施設の構造などから５世紀代の築造と考えられる。燎東古墳は，大番奥池古墳群の南300mの比高20mの丘陵端部に立地する径８mの円墳で，墳頂部で並列する木棺墓２基を検出し，鉄刀・刀子片と須恵器などが出土した。６世紀前半の築造とみられる。

吉舎町内では横穴式石室を埋葬施設とする古墳はそれほど多くない。町域の縁辺部に近いあたりの谷奥や丘陵上，山麓などに散在的・孤立的な立地をみせるものが多い。調査されたものとしては，長畑山(ながはたやま)古墳(10)（海田原）がある。径10.5m×12mの楕円形の墳丘に南に開口する石室を築いている。石室内から鉄鏃や須恵器，玉類，耳環が出土しており，６世紀末～７世紀中ごろに構築されたものと考えられる。

**古代**　吉舎町は大半が古代の三谿（谷）郡に含まれるが，南端の徳市は世羅郡鞆張郷，東方の知和・安田・上安田は甲努（奴）郡田総郷に属す。「和名類聚抄」によれば，三谿（谷）郡は三谿（谷）・松部・江田・額田・刑部の五郷から成り，吉舎町は松部（「私部」の誤記と考えられている）郷にあたり，皇后のために設けられた部民（私有民）である「私部（きさいべ）」に関わると考えられている。また，律令制下では三谿（谷）郡をはじめ備後国北部の諸郡は庸・調として鉄や鍬を国に納めたことが延喜式や平城京跡出土木簡などに記載されており，古くから当地域では鉄が産出したことが分かる。

古代の遺跡としては，西隣の三次郡で検出された県史跡下本谷遺跡(11)（西酒屋町）に相当する郡衙跡は三谿（谷）郡域では見つかっていないが，三良坂町と旧三次市との境界付近の志幸町幸利




1 **大番奥池第１～３・７号古墳**
2 片野中山第９～12号古墳
3 右谷遺跡
4 敷地本郷遺跡
5 燎東古墳
6 北野山遺跡
7 八幡山第１号古墳
8 下矢井南第３～５号古墳
9 長畑山古墳
10 殿平古墳
11 海田原第29号古墳
12 海田原第20号古墳
13 平松山城跡
14 三玉大塚古墳
15 尾崎山墳墓
16 南天山城跡

**第２図**　周辺遺跡分布図（1:25,000）

地区の馬洗川南岸の丘陵上に想定されている。

古代の遺跡としては，右谷遺跡(12)（敷地）・北野山遺跡(13)（敷地）がある。右谷遺跡は，片野中山古墳群が立地する丘陵の東斜面にある古墳時代末～奈良時代の集落跡で，方形住居跡・掘立柱建物跡のほかに須恵器・甕を杯身で蓋をした蔵骨器が出土した。北野山遺跡は大番奥池古墳群の東側の比高60mの丘陵上に立地する遺跡で，掘立柱建物跡２棟や柱穴列を検出し，杯蓋・杯や鉄鉢形の須恵器，須恵器・杯の内底面を使用した転用硯，鉄滓や鉄釘などが出土した。９世紀後半～10世紀初頭の仏教関連施設跡と考えられている。

このほか，平安時代末～鎌倉時代初頭の寺院跡の上安田廃寺跡（上安田）や11，12世紀の土師質土器が出土した県史跡吉寺廃寺跡（桧）などがある。

**中世**　鎌倉幕府の御家人である武蔵国広沢氏が三谷郡ほぼ全域を所領化したのは12世紀末～13世紀前半で，13世紀後半には武蔵国から三谷郡に移住したと考えられる。『とはずがたり』の記述によれば，鎌倉時代末期の14世紀初頭には三谷郡和知郷・江田郷周辺に居住し，和智・江田両氏を分出していたことが確認できる。このうち和智氏は南北朝時代に入ると拠点を和知郷から南の平松山城（三玉），14世紀後半にはその南の南天山城（吉舎）に移している。1333（元弘３）年の後醍醐天皇挙兵に馳せ参じ，その後室町時代にかけて尊氏方（幕府方）と直義・直冬方（南朝方）の間で離合を繰り返す。所領の「三谷西条」（三谷郡西半の和知郷・江田郷あたり）の地をめぐり幕府と対立するものの，やがて和睦し幕府方に転じる。その後，15世紀末の応仁・文明の乱などしばらくは備後北部（内郡）の国人衆の一として守護山名氏に属して芸備地域や播磨地域などを転戦するが，芸備地域に大内氏・尼子氏が侵攻してくると，ほかの備後国人衆と同じくそれらの間で離合を繰り返すようになる。そして，1527（大永７）年の尼子氏と大内・毛利氏が激突した和智細沢山合戦で，和智氏は尼子氏から大内氏方に転じる。しかし，その後富田月山城の攻略に失敗し，勢力を急速に衰退させた大内氏や尼子氏に代わって毛利氏が芸備地域における盟主化への道を開き，やがて中国一円の領主となると，和智氏はその家臣団に組み込まれる。

中世の遺跡としては，平松山城跡・南天山城跡などの山城跡がある。平松山城跡は馬洗川東岸の比高160mの山塊に築かれた３つの郭群からなる。東西に長い80m×30mの１郭の南北には土塁があり，その北下方には東辺に土塁をもつ２郭と東の尾根続きには竪堀群がみられる。１郭の西に続く３郭は75m×55mの規模をもつ中心的な郭で，井戸跡と思われる窪地がある。貞治４（1365）年に和智氏が築城したと伝える。この平松山城跡の南方1.3kmの馬洗川西岸にある南天山城跡は，比高130mの南から北に細長く延びる丘陵尾根上に郭が連続的に築かれた山城跡で，和智氏の本拠である。南の最高所に位置する１郭は背後に高さ４mの土塁をもち，１郭の西下方には堀切を挟んで井戸跡が残る小郭がある。１郭から北に郭が連なり，２郭とその北下方の谷部の小郭にも井戸跡がみられる。軒丸・軒平瓦や懸仏，鉄滓，土錘などが採集されているが，瓦はいずれも小振りのものであることから，仏像を安置する仏堂のようなものが存在したと考えられている。

**註**

（1）三枝健二「吉舎町徳市出土のナイフ形石器」『みよし風土記の丘』8　みよし風土記の丘友の会　1982年

（2）広島県教育委員会『下本谷遺跡発掘調査概報』 1980年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第２次発掘調査概報』 1981年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第４次発掘調査概報』 1983年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第５次発掘調査概報』 1984年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第６次発掘調査概報』 1985年
三次旧石器文化研究会『下本谷遺跡の基礎的研究』 2007年

（3）最近の県北の旧石器事情については，
戸田正勝・三枝健二「広島県北東部における後期旧石器時代初頭の石器文化について」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第７集　広島県立歴史民俗資料館　2009年
に詳しい。また，平成18（2006）年度以降，中国横断自動車道尾道松江線建設に伴って，財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が三次市・和知白鳥遺跡，同・段遺跡，庄原市・向泉川平１号遺跡など旧石器時代遺跡の調査を行い，まとまった良好な旧石器資料が出土している。

（4）広島県双三郡吉舎町教育委員会『三玉大塚－調査と整備－』 1983年

（5）平成19（2007）年度に財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。

（6）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺津古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』（Ⅰ） 1994年

（7）註（5）に同じ。

（8）平成20（2008）年度に財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。

（9）吉舎町教育委員会『燎東古墳』 1995年

(10) 註（8）に同じ。

(11) 下本谷遺跡発掘調査団『下本谷遺跡－推定三次郡衙跡の発掘調査報告－』 1975年
広島県教育委員会『下本谷遺跡発掘調査概報』 1980年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第２次発掘調査概報』 1981年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第３次発掘調査概報』 1982年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第４次発掘調査概報』 1983年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第５次発掘調査概報』 1984年
広島県教育委員会『下本谷遺跡第６次発掘調査概報』 1985年

(12) 註（5）に同じ。

(13) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（8）－北野山遺跡－』 2009年

**参考文献**


・広島県双三郡　三次市史料総覧編集委員会『広島県双三郡　三次市史料総覧』第五篇　広島県双三郡　三次市史料総覧刊行会　1974年
・広島県『広島県史』地誌編　1977年
・広島県『広島県史』原始　古代　通史Ⅰ　1980年
・広島県『広島県史』中世　通史Ⅱ　1984年
・吉舎町教育委員会『吉舎町史』上巻　1988年
・三次市『三次市史』Ⅰ　2004年
・三次市『三次市史』Ⅱ　2004年

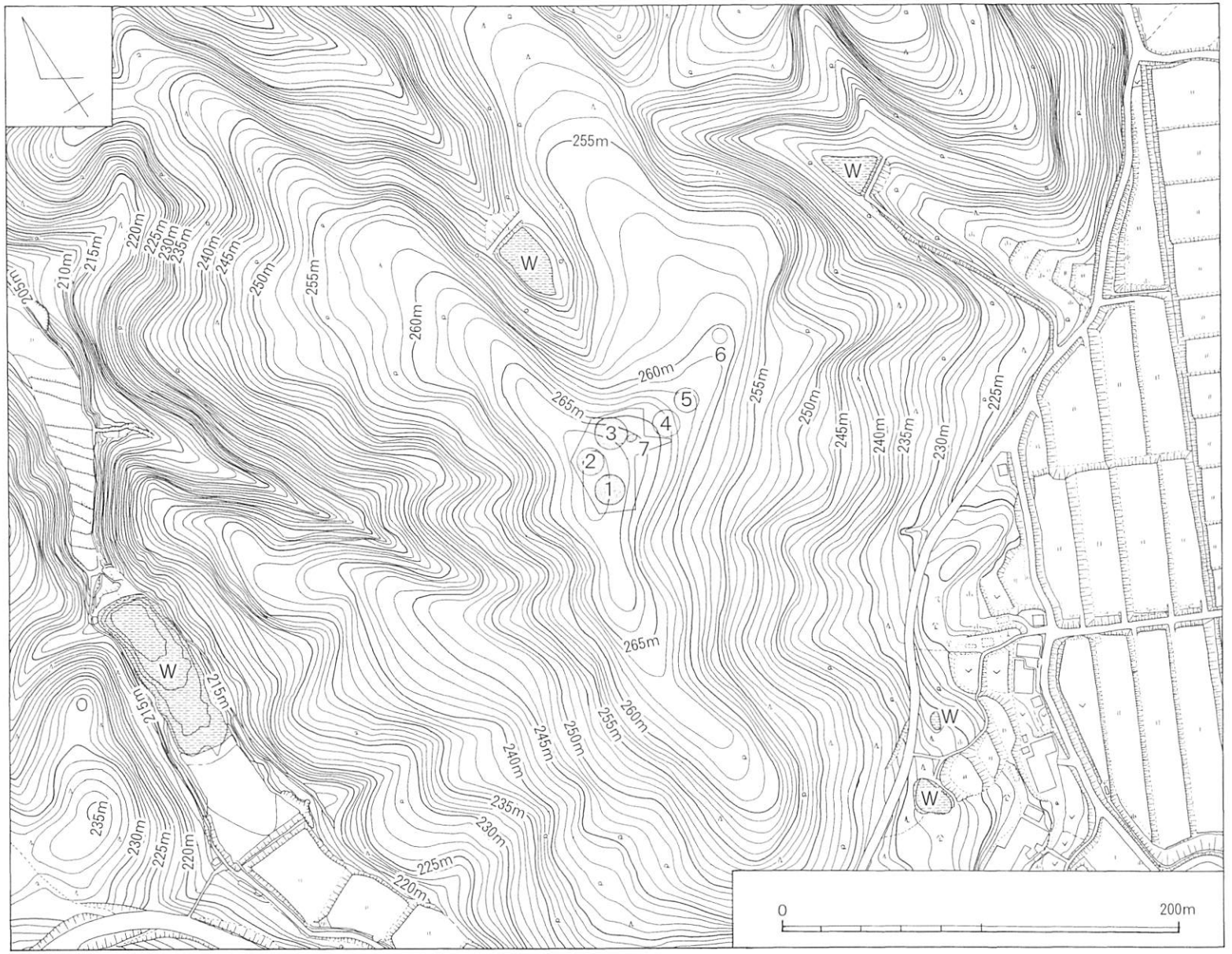
# Ⅲ　調査の概要

大番奥池第１～３・７号古墳は三次市吉舎町敷地に所在する木棺墓・土坑墓を埋葬施設とする古墳である。三次市南東部の，南東から北西方向に流れる江の川水系馬洗川南岸に位置する。古墳群は，ほぼ南北に細長く延びる丘陵尾根の頂部を中心に存在する計７基の円墳で構成され，今回はその南西側の４基が調査対象となった。西側には幅200mほどの狭小な谷平野が北から入り込んでおり，この平野部からの比高は約50mである（尾根頂部の標高268m）。

調査は，各古墳の墳丘に十字に土層観察用の畦を設定し，人力で腐葉土・表土を除去しながら行った。南端に位置する第１号古墳は径11m，高さ1.4mの低墳丘に周溝が廻る円墳であるが，攪乱などにより埋葬施設を検出することはできなかった。墳丘盛土から摘鎌・管玉が出土した。第１号古墳の北４mにある第２号古墳は径7.7m，高さ1.3mほどの低墳丘に周溝が廻る円墳で，墳頂部で南北に並列するほぼ東西軸の木棺墓２基を検出した。埋葬施設から須恵器（杯蓋・杯身）や鉄器（鉄鎌・鉄鏃・刀子）が出土した。この第２号古墳の北東側に接するように築かれた第３号古墳は，径10.5m，高さ1.96mの墳丘に周溝が廻る円墳で，墳頂部で木棺墓３基・土坑墓１基の計４基の埋葬施設を検出した。これらの埋葬施設は攪乱坑により大きく損なわれたものもあるが，須恵器（杯蓋・杯身）や鉄器（鉄刀・鉄鏃・刀子）が出土した。また，周溝内からも鉄鏃が出土している。第３号古墳の南東側に接して2.9m×4.6mの楕円形をした低墳丘の第７号古墳がある。周溝の存在は明確でないが，墳頂には方形の土坑墓があり，内部から鉇・鉄鏃が，墳丘からは鉄鎌・鉄製紡錘車が出土した。

**第２表**　大番奥池第１～３・７号古墳埋葬施設一覧（単位；cm）

| 古墳No. | 埋葬施設No. | 内容 | 主軸方位 | | 尾根線と | 頭位 | 墓坑平面形 | 墓坑規模 | | | 木棺規模 | | 出土遺物 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | 長さ | 幅 | 深さ | 長さ | 幅 | |
| 第２号古墳 | ＳＫ１ | 木棺墓 | N74° W | 西北西－東南東 | 直交 | 東 | 長方形 | 241 | 121 | 32 | 200 | 85 | 鉄鏃３・鉄鎌１＋・刀子１ |
| | ＳＫ２ | 木棺墓 | N77° W | 西北西－東南東 | 直交 | 東 | 長方形 | 272 | 116 | 66 | 224 | 81 | 須恵器（杯蓋１・杯身３）・鉄鎌１ |
| 第３号古墳 | ＳＫ１ | 木棺墓 | N66° W | 西北西－東南東 | 斜交 | 西 | 長方形 | 213 | 91 | 31 | 156 | 69 | 須恵器（杯蓋１・杯身１） |
| | ＳＫ２ | 木棺墓 | N48° W | 北西－南東 | 斜交 | 北西 | 長方形 | 153 | 65 | 31 | ？ | ？ | 須恵器（杯蓋１・杯身１） |
| | ＳＫ３ | 木棺墓 | N90° W | 東西 | 平行 | | 方形 | 132＋ | 125 | 49 | 65 | 63 | 刀子１ |
| | ＳＫ４ | 土坑墓 | N48° E | 北東－南西 | 平行 | | 長方形 | 82＋ | 95 | 27 | － | － | 鉄刀１・鉄鏃４ |
| 第７号古墳 | ＳＫ１ | 土坑墓 | N６° W | 南北 | 直交 | | 長方形 | 120 | 103 | 25 | － | － | 鉄鏃２＋・鉇？１ |




**第３図**　大番奥池古墳群周辺地形図（1:3,000）

# Ⅳ　遺構と遺物

## １．大番奥池第１号古墳

（１）立地と調査前の状況（第３・４図，図版１ａ・１ｂ・３ｂ）

第１号古墳は大番奥池古墳群の南端に位置する古墳で，南北に長い丘陵尾根線頂部に立地する（標高268m）。調査前の観察では，径10.5m，高さ0.6～1.2mの円形の墳丘の裾の西半を中心に幅1.6～２m，深さ10～20cm程度のごく浅い周溝が廻ると思われた。古墳が幅20～30mの丘陵頂部から東側緩斜面（傾斜角度約10°）に変換するあたりに立地しており，この結果，墳丘が東側からより高くみえる。また，周溝が東側では明確でないことから考えて，第１号古墳は東側を前面とする円墳であると考えられた。なお，墳丘東側斜面には後世の攪乱坑が存在する。調査前の状況は山林である。

（２）墳丘（第５・６図，図版２ａ・３ｃ・４ａ～４ｃ・５ａ）

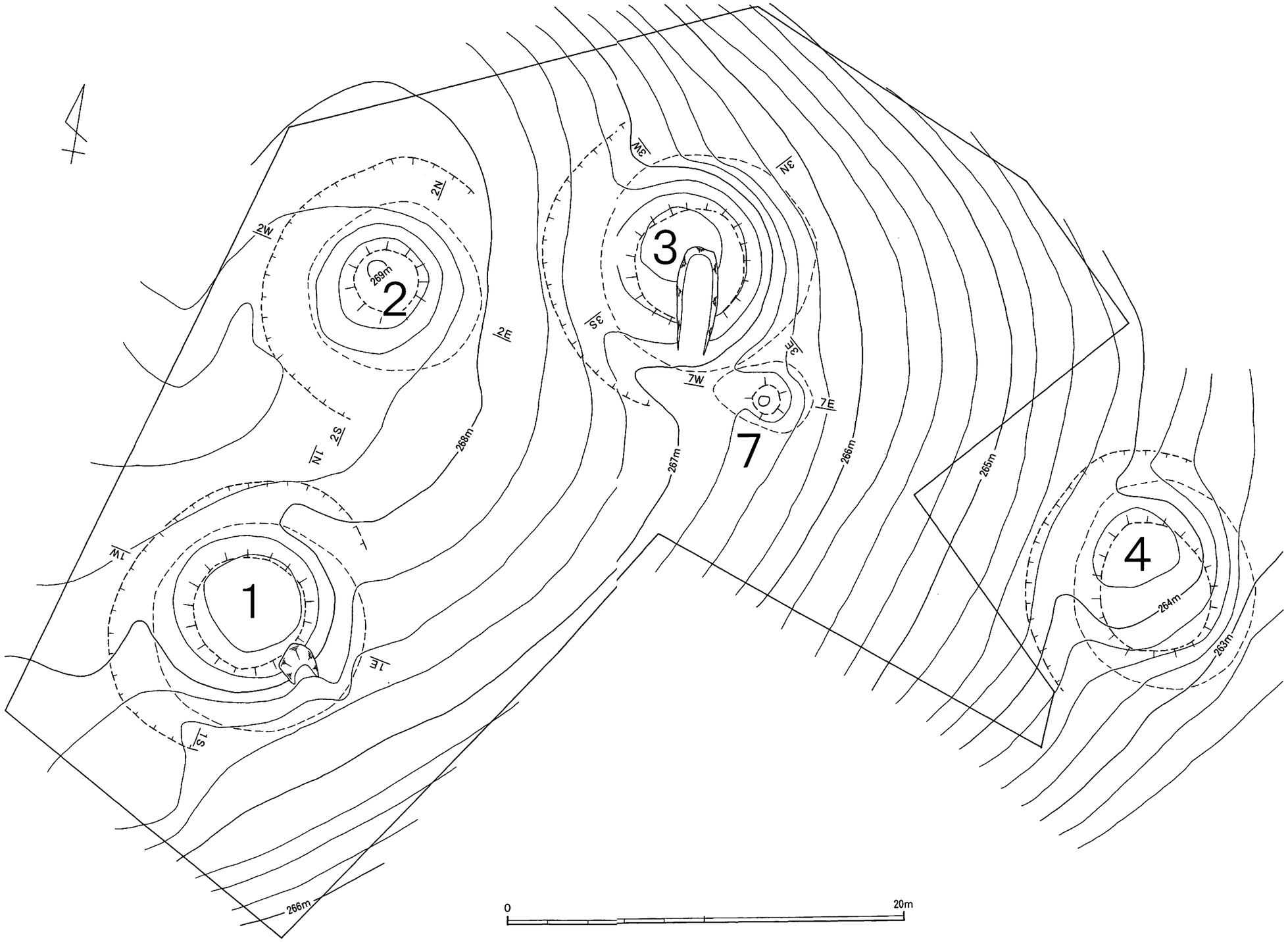
厚さ数cmの表土（淡黄褐色土）を除去すると，南北11m，東西10.6m，高さ0.88～1.40mの大きさの円形の墳丘とその裾を取り巻く，幅1.1～1.8m，深さ14～50cmの浅い周溝を検出した。周溝は北～西～南の墳丘西半２／３の範囲に馬蹄形に廻り，東側１／３の墳丘裾には周溝は存在しない。周溝底で最も標高が高いのは墳丘北西側（標高267.906m）で，最も低い東側墳裾（標高267.25m）と65cmの高低差がある。ほぼ東西・南北方向に設定した畦の土層を観察する限りでは，北から南，西から東に向かって緩やかに下傾する旧表土（８層＝淡黄褐色粘質土）の存在から，本古墳はほぼ北西から南東方向へとごく緩やかに下る旧地形に僅かな整地を行ったあと，厚さ50～70cmほど（現状）の盛土により構築したと考えられる。墳丘盛土には２～７層の淡橙褐色土・黄褐色土・黄褐色粘質土・明黄褐色粘質土などの黄褐色系の粘質土を用いている。

（３）埋葬施設

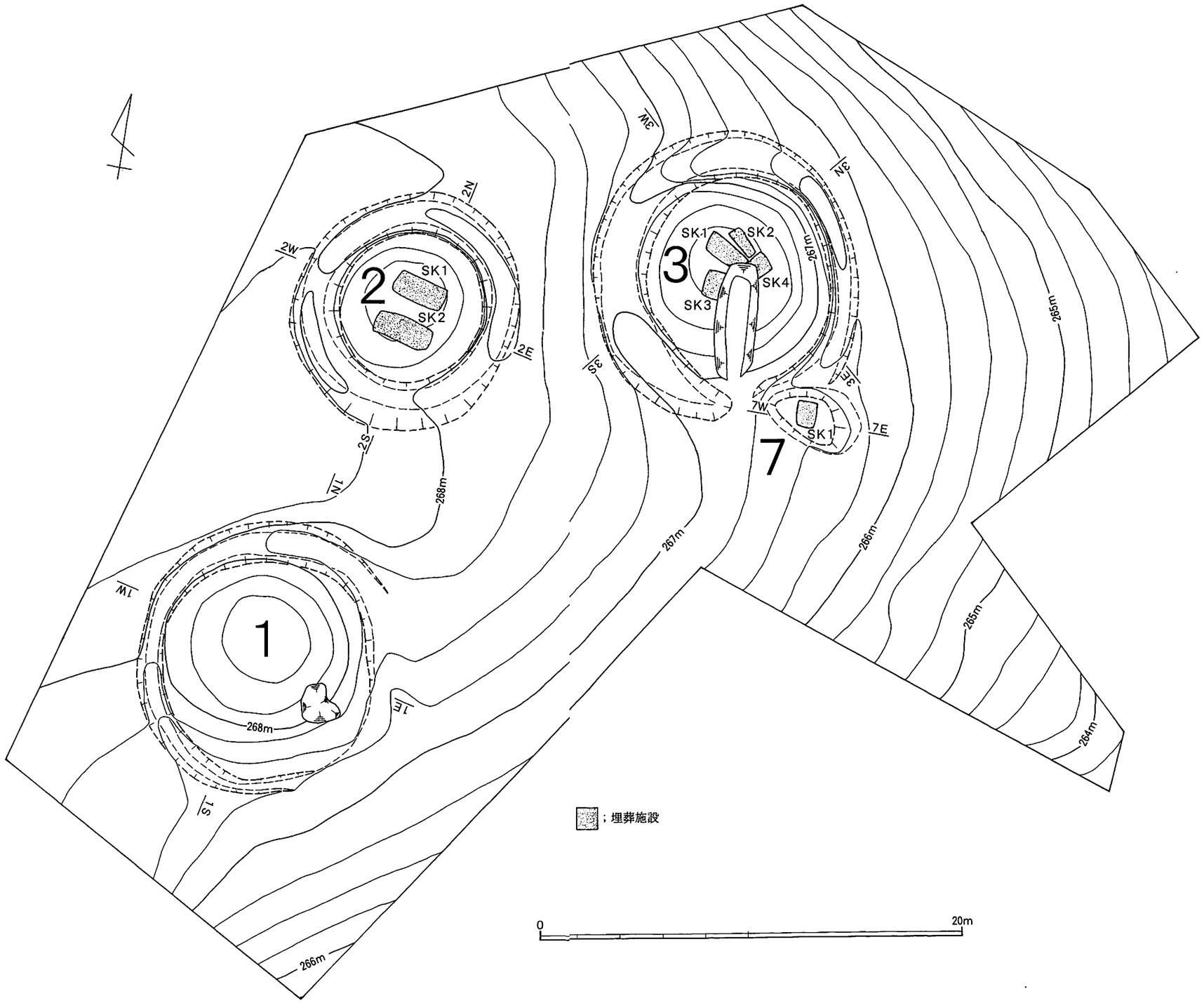
埋葬施設は検出されなかったが，墳丘中央の土層観察用畦が交差する部分の墳頂から数～10cm程度掘り下げた位置の１m程度の範囲から摘鎌１点，碧玉製管玉５点が出土しており，この付近に埋葬施設が存在した可能性があるが，大きく木根による攪乱を受けており，詳細は不明である。

（４）出土遺物（第７図，図版14）

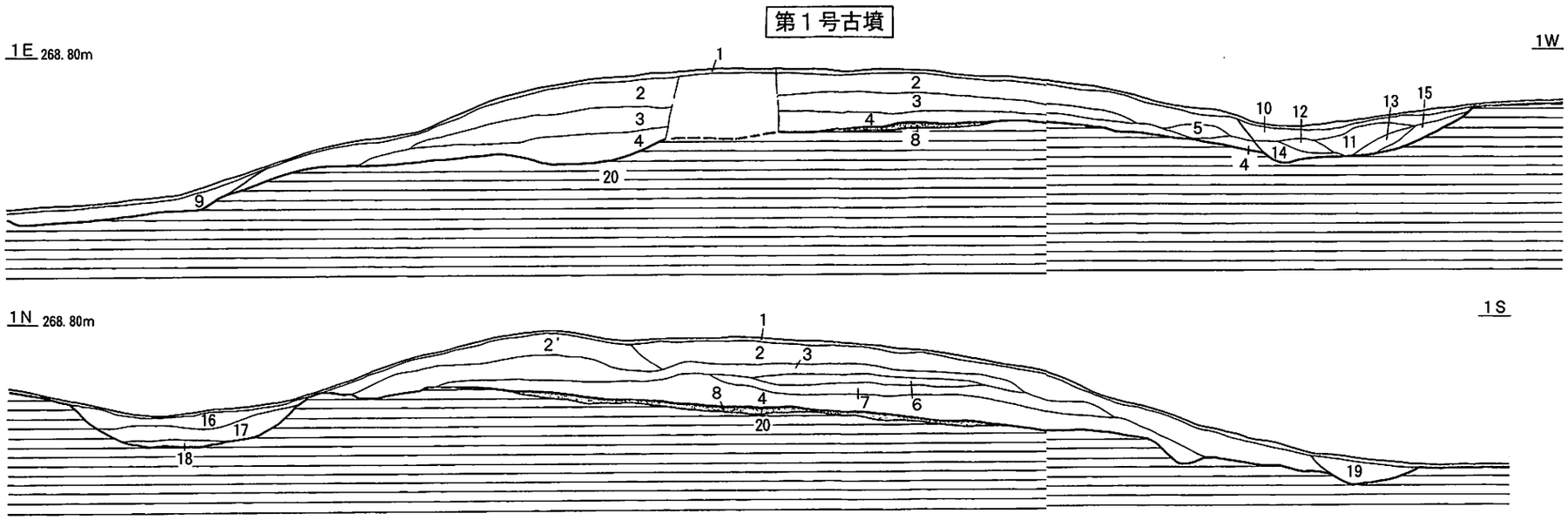
墳頂部中央で摘鎌１点（３），管玉５点（４～８），ＳＷ区周溝内から須恵器・杯蓋片１点（１），ＳＷ区周溝外から須恵器・杯身１点（２）が出土した。２は第１号古墳に伴うかどうか明確ではないが，その出土位置や１と時期的に近い形態的特徴などから墳丘外に削平・攪乱など何らかの理由によって出されたものと考えられ，ここでは本古墳に伴う遺物として述べることにする。




**第４図**　大番奥池第１～４　７号古墳調査前地形測量図（1:200）




**第５図**　大番奥池第１～３・７号古墳墳丘測量図（1:200）




第１号古墳（1E−1W・1N−1S）

1．表土（淡黄褐色土）
墳丘盛土
2．淡橙褐色土
2’淡黄褐色土
3．淡黄褐色土
4．黄褐色土
5．明黄褐色粘質土
6．黄褐色粘質土
7．黄褐色粘質土
旧表土
8．淡黄褐色粘質土
周溝埋土
9．淡黄褐色粘質土
10．暗黄褐色粘質土
11．淡黄褐色粘質土
12．淡褐色粘質土
13．明黄褐色粘質土
14．淡黄褐色粘質土
15．暗黄褐色粘質土
16．黄褐色粘質土
17．暗黄褐色粘質土
18．明黄褐色粘質土
19．淡黄褐色粘質土
地山
20．淡黄褐色粘質土

第２号古墳土層（2W−2E・2S−2N）

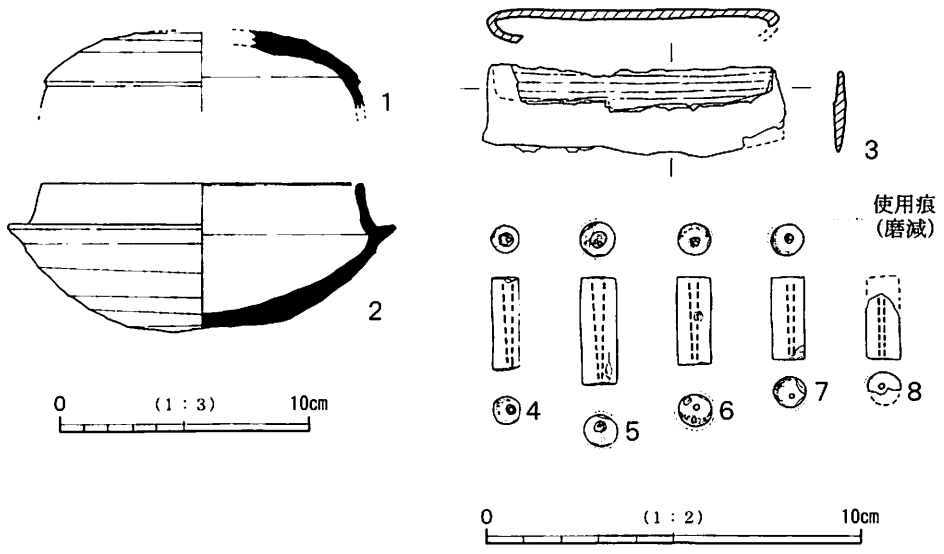
1．表土（淡黄褐色土）
墳丘盛土
2．淡黄褐色粘質土
3．黄褐色粘質土
4．明黄褐色粘質土
5．淡黄褐色粘質土
旧表土
6．淡黄褐色土
周溝埋土
7．淡黄褐色土
8．淡黄褐色粘質土
9．淡黄褐色土
10．淡褐色粘質土
11．淡灰褐色粘質土
12．淡暗黄褐色粘質土
13．黄褐色粘質土
14．淡暗黄褐色粘質土
15．淡褐色粘質土
16．淡黄褐色粘質土
17．淡黄褐色粘質土
地山
18．黄褐色粘質土

**第６図**　大番奥池第１・２号古墳墳丘土層断面実測（1:60）

須恵器は杯蓋・杯身各１点がある。杯蓋１は天井部を主とする小破片で，図面上の法量や傾きに若干の誤差が存在する可能性がある。天井部と口縁部の境に鈍い稜をもち，その下にはごく浅い凹線がみられる。天井部は平坦面からこの稜部に向けて下傾しており，丸みが強い。天井部外面は稜までの２／３の範囲に回転ヘラケズリが施され，そのほかの部位は内外面ともに回転ナデである。色調は灰色である。杯身２は体部は完存するが，口縁は１／３周程度を欠損している。丸みの強い体部から短く突出した受部の端部は先細り気味である。この受部から立ち上がり部がやや内傾気味に直立し，その端部は丸く納める。受部と立ち上がり部の境はあまり明確でなく，立ち上がり部は比較的高い。調整は，体部外面の２／３～３／４の範囲まで回転ヘラケズリがみられ，そのほかの部位は内外面とも基本的に回転ナデを施している。ただ，内底面中央はナデつけを行っている。口径12.4cm，器高5.8cmである。

３は長さ８cm，幅2.1cm，厚さ0.3cmの摘鎌である。両側縁と刃縁に沿って袋状にしており，内部には刃縁に並行する木目がみられる。

管玉５点は，いずれも暗緑色を呈する光沢のある硬質の石材で，碧玉製と考えられる。８のみ欠損品だが，ほかはいずれも完形品である。長さ2.2～2.8cm，径0.7～1.0cm，孔径0.1～0.4cm，重さ2.19～4.19ｇである。５が最も大型で，４が細身，６・７はほぼ同規模で平均的な大きさ・形状である。穿孔はいずれも上→下方向への１方向と考えられる。孔径は上孔が大きく，下孔が小さく，その差は２㎜程度である。これらの管玉には，両端面に擦痕を顕著に伴う摩滅がみられること，縁辺に刃毀れ的な摩滅がみられること，側面にも部分的ではあるが欠損がみられること（５～７），孔の縁辺に紐擦れかと思われる小さな摩滅がみられること（４・６）など，使用状況を窺わせる痕跡が顕著にみられる。




**第７図**　大番奥池第１号古墳出土遺物実測図（1:2，1:3）

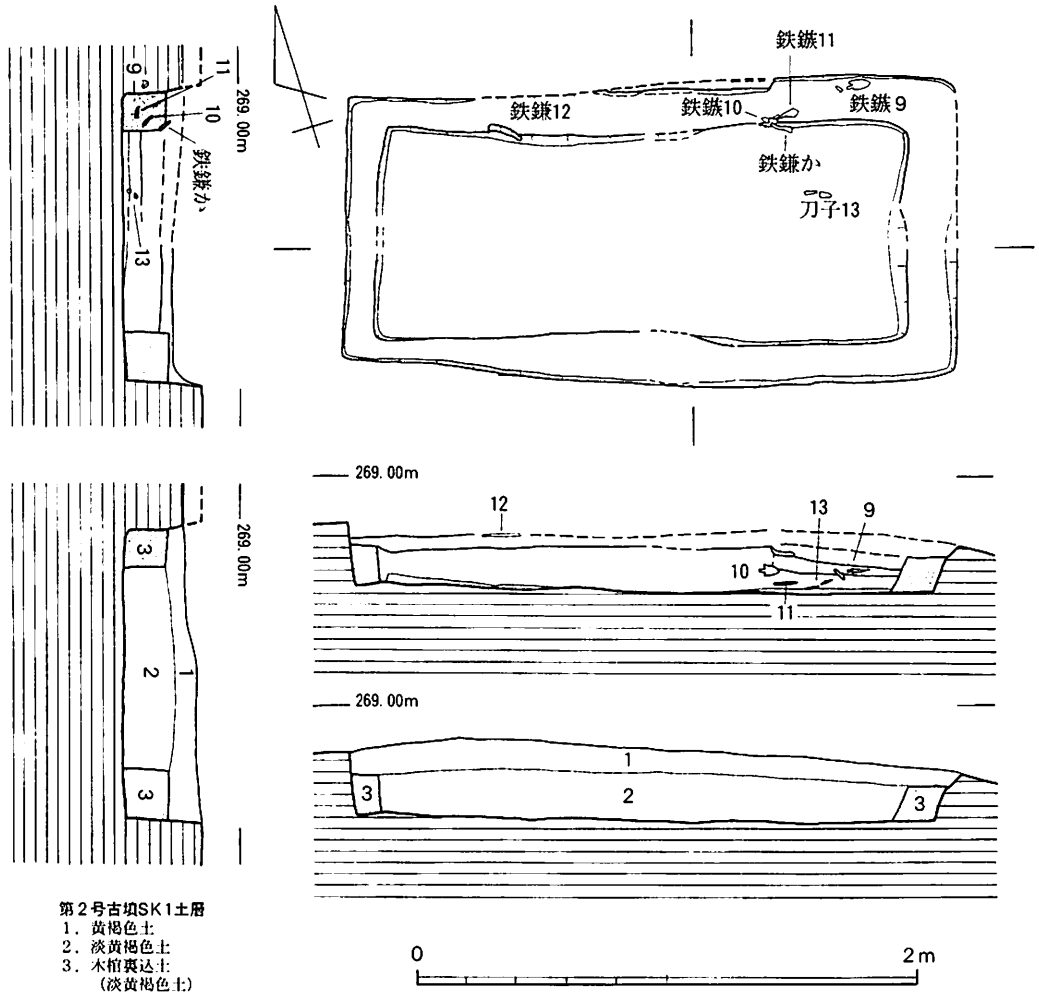
## 2．大番奥池第２号古墳

（１）立地と調査前の状況（第３・４図，図版１ａ・１ｂ・５ｂ）

第２号古墳は第１号古墳の北４ｍの尾根頂部に立地する円墳で，調査前の観察では，径が東西8.6m，南北8.3m，高さ0.79～1.17mのやや不整円形の墳丘の周囲（西半）に幅1.8～2.6mのごく浅い周溝が廻る状況がみられた。墳丘は西～南にかけて低く，北～東にかけて高い。古墳が尾根頂部の平坦部からやや北方向や東方向に下りかけたあたりに立地していることから，本古墳は北あるいは東側から墳丘がより高くみえるように造られたとみられる。即ち，北～東方向を前面とする円墳で，調査前の観察では周溝は全周せず，北～西～南の主に墳丘西側の裾を馬蹄形に廻るものと予想された。調査前の状況は山林である。なお，第２号古墳の墳頂は第１号古墳のそれに較べて0.37m高く，墳裾も同程度標高差があることから，第２号古墳は第１号古墳に較べて若干高い位置に構築されたことが分かる。

（２）墳丘（第５・６図，図版２ｂ・５ｃ・６ａ～７ｂ）

厚さ数cmの表土（淡黄褐色土）を除去すると，南北7.7m，東西7.3m，高さ0.96～1.3mの規模をもつ円形の墳丘とその裾を全周する幅1.5～2.3m，深さ24～70cmの周溝を検出した。周溝底面




**第８図**　大番奥池第２号古墳ＳＫ１実測図（1:30）

は墳丘南側（標高268.06m）から墳丘西側（標高267.98m）にかけて標高が高く，最も低い墳丘北東側の周溝底面（標高267.6m）との高低差は38～46cmである。本古墳は尾根頂部の平坦面から北東側に傾斜角度6°で緩やかに下傾する緩斜面の傾斜変換点に立地する。北東3.6mには第3号古墳が近接して造られており，この第3号古墳が立地するあたりから斜面はやや急になる。

ほぼ東西・南北方向に設定した畦の土層を観察する限りでは，東西方向西半と南北方向北半の旧表土（6層＝淡褐色粘質土）の残存状況から，旧地表面の南西側を僅かに削平して基盤面を形成した上に厚さ60～70cm程度（現状）の盛土を行って古墳を構築したものと考えられる。墳丘盛土は2～5層の淡黄褐色粘質土・黄褐色粘質土・明黄褐色粘質土などの黄褐色系の粘質土である。

（3）埋葬施設

墳頂部中央で南北に並列するほぼ東西方向に主軸をもつ木棺墓2基を検出した。墳頂の高い位置にある北側のＳＫ1は墳頂から18cm下位で，また墳頂のやや低い位置にある南側のＳＫ2は墳頂から30cmほど下位で墓坑上端を検出した。墓坑の平面形はいずれもやや不明確なもので，本来の墓坑掘り込み面は多少前後する可能性がある。2基とも墓坑内に箱形木棺を納め，裏込めを行ったものである。墓坑底面の標高はＳＫ1が268.54m，ＳＫ2は268.14mとＳＫ2が40cmも低い。墳丘中央に整然と並葬されており，両者の埋葬はほぼ同時で，計画的なものだったと考えられる。ただ，主軸方位や墓の構造は近似するものの，副葬内容は異なる。北側のＳＫ1は小型武器（鉄鏃）＋農工具（鉄鎌・刀子）のみで土器類をまったくもたないのに対して，南側のＳＫ2は須恵器（杯蓋・杯身）＋農具（鉄鎌）といった器を主体とした副葬内容である。これらの副葬品の大半は棺外（棺上・棺側）に置かれており，棺内に副葬された可能性のあるものはＳＫ1の刀子のみである。

①ＳＫ1（第8図，図版7c・8a・13a・13b）

墳頂部北側に位置する木棺墓で，墓坑の主軸方位は西北西－東南東方向を指し（N74°W），尾根線に直交する。墓坑の平面形はほぼ長方形で，長さ241cm，幅121cm，深さ32cmである。墓坑内に長さ200cm，幅85cmほどの長方形の箱形木棺が納められていたとみられる。北側辺棺外と東小口寄りの棺内から副葬品が出土した。鉄製の武器と農工具で，土器は出土していない。北側辺東半の棺外からは鉄鏃3点（9～11）と鉄鎌状製品（曲刃・未報告），同西半から鉄鎌（曲刃）1点（12）が，東小口寄りの棺内底面からは折れた刀子1点（13）が出土した。鉄鏃・鉄鎌はいずれも切先を頭位の東小口側に向け，長軸を木棺の主軸に沿わせており，木棺側板と墓坑の間（裏込め部分）に入れ込まれたものと考えられる。刀子は切先を足位の西小口側に向けていた。鉄鎌と鉄鎌状製品は木棺上面付近で出土したのに対して，鉄鏃は中位～底面付近で出土していることから考えて，鉄鎌は木棺を墓坑に安置して裏込土を入れ込んだあとに棺の上面レベルに置かれたが，鉄鏃は裏込土を入れる途中で入れ込まれた可能性が高い。また，刀子は被葬者に副えて棺内に置かれた可能性が高く，ＳＫ1に伴う遺物は刀子（棺内），鉄鏃（棺外側辺中位～下位）そして鉄鎌（棺外側辺上面）と3段階の副葬状況を窺うことができる。木棺の幅は東小口・西小口ともほぼ同じであるが，棺底面は西小口側が僅かに高い。しかし，墓坑幅は東小口側が広く，また遺物の

出土状況からも東小口側が頭位と考えられる。

**出土遺物**（第10図，図版14） いずれも鉄器で，鉄鏃（９～11）・鉄鎌（12）・刀子（13）がある。このほか，図示できなかったが，鉄鎌状製品１点がある。

鉄鏃は腸抉三角形鏃２点（９・10）と類五角形の三角形鏃１点（11）である。９は全長（現存）13.2cm，鏃身部長7.0cm，頸部長4.5cm，茎部長（現存）3.6cmである。頸部関は角関である。茎部は断面横長の長方形の鉄芯に縦走する木質，その上に横走する木質がみられる。頸部関の直下４～９㎜付近には横方向に巻かれた樹皮状のものが残存している。10は全長（現存）8.8cm，鏃身部長5.5cm，同幅3.1cm，頸部長5.5cmで，茎部は大半を失っている。頸部関は角関で，頸部には木質がみられるが，錆び脹れの可能性もある。11は全長（現存）9.1cm，鏃身部長（現存）4.2cm，同幅3.3cm，頸部長4.0cmの短い五角形の鏃身をもつもので，鏃身関部が浅い逆刺状をなす。茎部は下半を失っている。頸部関は角関で，茎部には縦走する木質が良く残っている。

12は切先及び背部を一部欠くが，ほぼ原状を留める細身で小型の曲刃の鉄鎌である。長さ（現存）13.7cm，幅1.8～2.7cmで，向かって右側にある折り返しは74°，着柄角度は103°と柄に対して鈍角である。13は長さ10.5cmの刀子で，刃部長７cm，同幅1.2cm，茎部長3.5cm，同幅0.7～1.2cmである。茎部には部分的に横走する木質が認められる。関は刃部側にあるが，その形状は明確でない。

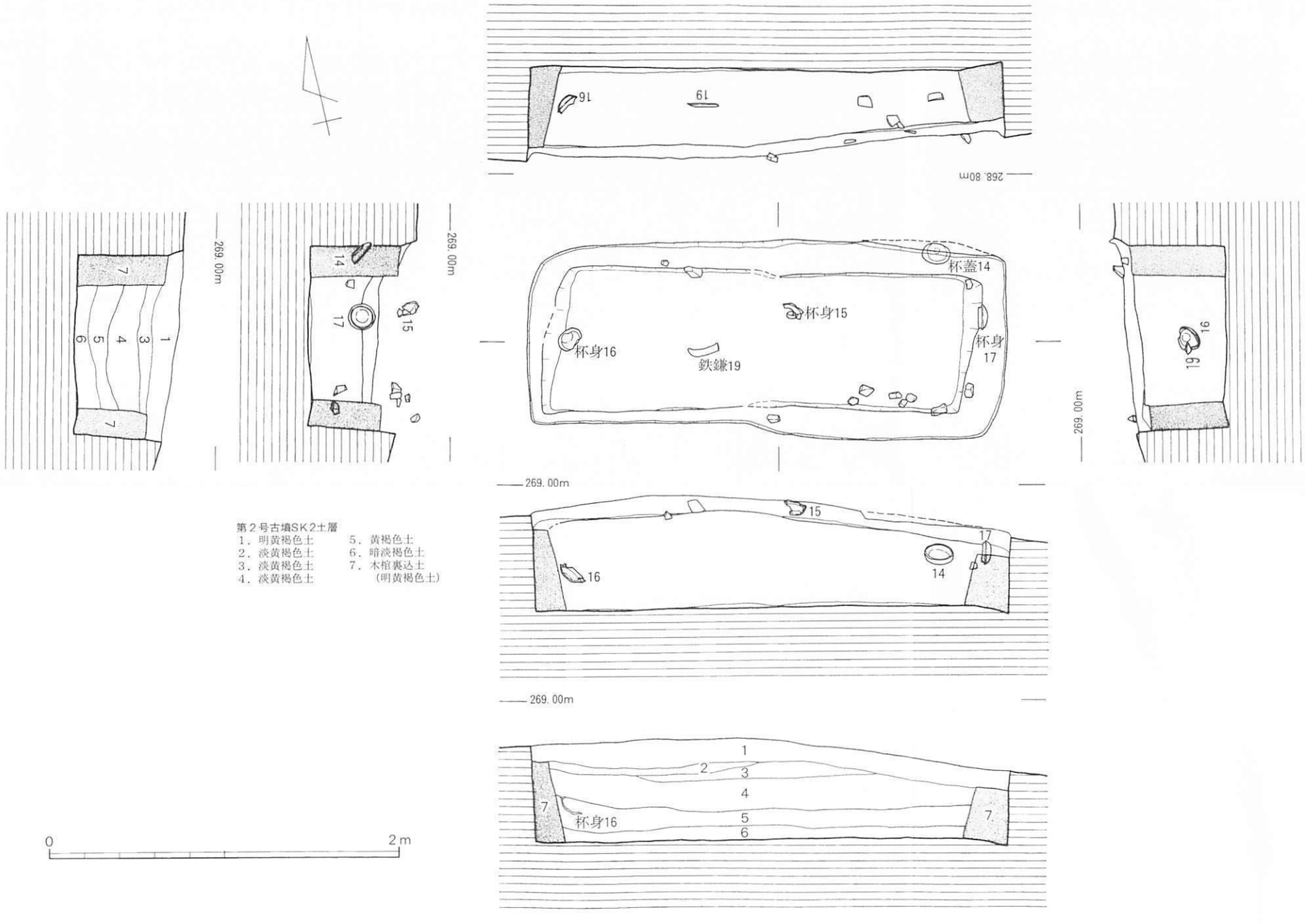
②ＳＫ２（第９図，図版７ｃ・８ｂ・13ｃ・13ｄ）

ＳＫ２はＳＫ１の南側0.7ｍの近距離に沿うように並葬された木棺墓で，その主軸方位はほぼ西北西－東南東方向（Ｎ77°Ｗ）を指す。長さ272cm，幅116cm，深さ66cmと深い平面長方形の墓坑の中央に，長さ224cm，幅81cmの長方形の箱形木棺を納めている。木棺と墓坑の間には締まった裏込土（７層，明黄褐色土）がみられる。北辺中央と南辺東半の木棺側板上付近には数～10cm大の小礫が散在しているが，これらは木棺蓋板上に置かれた可能性がある。ＳＫ２に伴う副葬品は須恵器（杯蓋・杯身）と鉄鎌である。須恵器はいずれも棺外，鉄鎌も棺底面から20cm上位から出土していることから，棺上に置かれたものが棺の腐朽に伴って棺内に落ち込んだ可能性が高い。杯身15は棺蓋上中央付近に置かれており，割れが激しい。杯身16は西小口，杯身17は東小口，唯一の杯蓋14は東小口寄りの北側辺棺外のいずれも上半付近に横に立てた状態で副葬されたとみられる。棺底面は若干東小口側が高く，幅は西小口側がやや広いがいずれも殆ど差がない。頭位については明確ではないが，墓坑幅がやや広い東小口側と考えられる。

**出土遺物**（第10図，図版14） 須恵器と鉄鎌がある。須恵器は杯蓋１点（14）と杯身３点（15～17）である。

杯蓋は天井部の丸みが強い大型のもので，天井部と口縁部の境に形骸化したやや鈍い稜とその下位に接して浅い凹線がみられる。天井部外面にはこの稜の上1.7cm付近まで回転ヘラケズリがなされ，そのほかの外面から内面にかけては回転ナデを施す。なお，天井部内面中央は未調整である。色調は暗灰色で，口径14.2～14.6cm，器高5.6cmである。

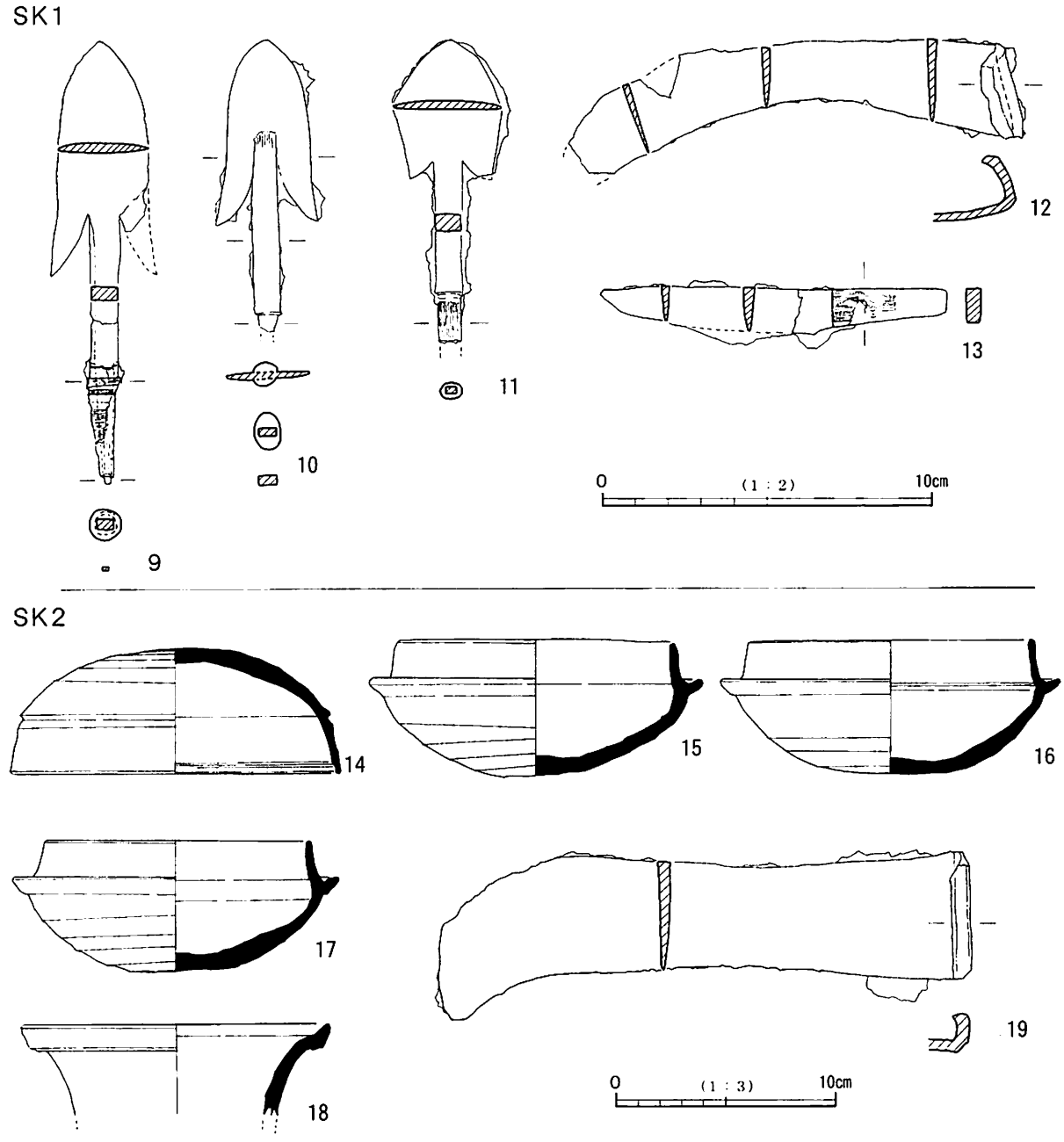
杯身はいずれも酷似した器形で，丸みの強く深い底部から外上方に内湾気味に立ち上がったあ




**第９図**　大番奥池第２号古墳ＳＫ２実測図（1:30）

と，直角に近く折れて外方に突出する受部の端部をやや尖り気味に納める。水平に近い受部と若干内傾気味にほぼ直立する長い立ち上がり部との境はやや不明確である。立ち上がり部の端部はほぼ丸く納めている。口径11.8～12.4cm，器高5.9～6.1cmとほぼ同じ大きさである。調整は，外面の受部直下１～３cm程度まで回転ヘラケズリ，そのほかはほぼ回転ナデである。17は底面中央が平坦で回転ヘラ切りを行っている。また，16・17の内底面中央は一定方向のナデあるいは未調整とみられる。

鉄鎌は長さ16.1cm，基部幅3.8cmの曲刃鎌で，完形である。折り返し角度・着柄角度ともにほぼ直角である。




**第10図**　大番奥池第２号古墳出土遺物実測図（1:2，1:3）

（4）周溝出土の遺物（第10図）

18は復元口径13.7cmの須恵器・壺の口縁部片で，北西側の周溝上面で出土した。外反する口頸部の端部を肥厚させて尖り気味に納める。調整は，頸部外面はやや斜行する櫛描直線文ののちに回転ナデを施す。口縁外面から内面にかけては回転ナデである。

### 3．大番奥池第3号古墳

（1）立地と調査前の状況（第3・4図，図版1a・1b・8c）

第3号古墳は第2号古墳の東4m弱に近接して造られている。尾根頂部から緩やかに傾斜する東斜面の上端付近に立地する。古墳が立地するあたりの斜面は，古墳の西側は傾斜角度6～8°と比較的緩やかだが，東側は10°とやや急になる。この付近の標高は266～268mである。調査前の観察では，西側の墳丘高は低く，東側は高く，かなり高低差があるようにみえた。東西11m，南北10.7m，高さ0.6～1.2mの墳丘の西側裾を幅2.5～3m，深さ10cm程度の浅い周溝が半周程度廻るとみられた。墳丘中央から南側にかけて長さ5m，幅2mほどの深い攪乱坑が存在する。調査前の状況は山林である。

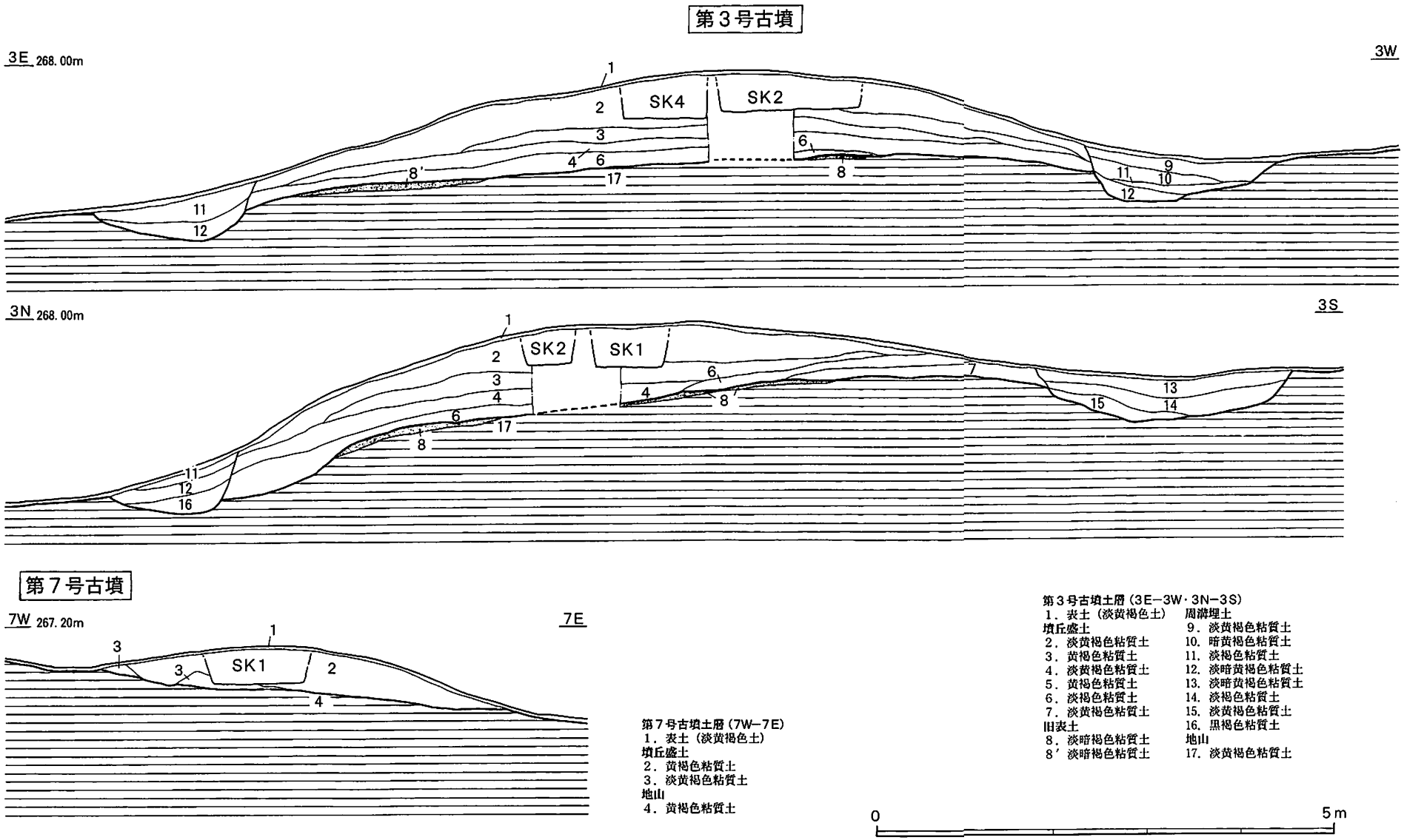
（2）墳丘（第5・11図，図版9a～10b）

厚さ数cmの表土（淡黄褐色土）を除去すると，南北10.5m，東西9.3m，高さ1.02～1.96mのやや南北に長い円形の墳丘が現れ，墳丘の裾に幅1.3～2.8m，深さ0.18～0.65mの周溝が廻る。周溝はほぼ全周するが，南端が1m程度途切れている。周溝底面は墳丘西側が標高267.078mと最も高く，最も低い墳丘北～北西側と1m以上の高低差がみられる。

ほぼ東西・南北方向に設定した畦の土層を観察する限りでは，南から北，西から東へと緩やかに下傾する旧表土（8・8′層＝淡暗褐色粘質土）の存在から，南西から北東方向へと緩やかに下る旧地形上を僅かに整地したあと，厚さ80～90cm程度（現状）の盛土を行って古墳を構築したと考えられる。墳丘盛土は，2～7層の淡黄褐色粘質土・黄褐色粘質土・淡褐色粘質土などの黄褐色系統の粘質土を用いている。

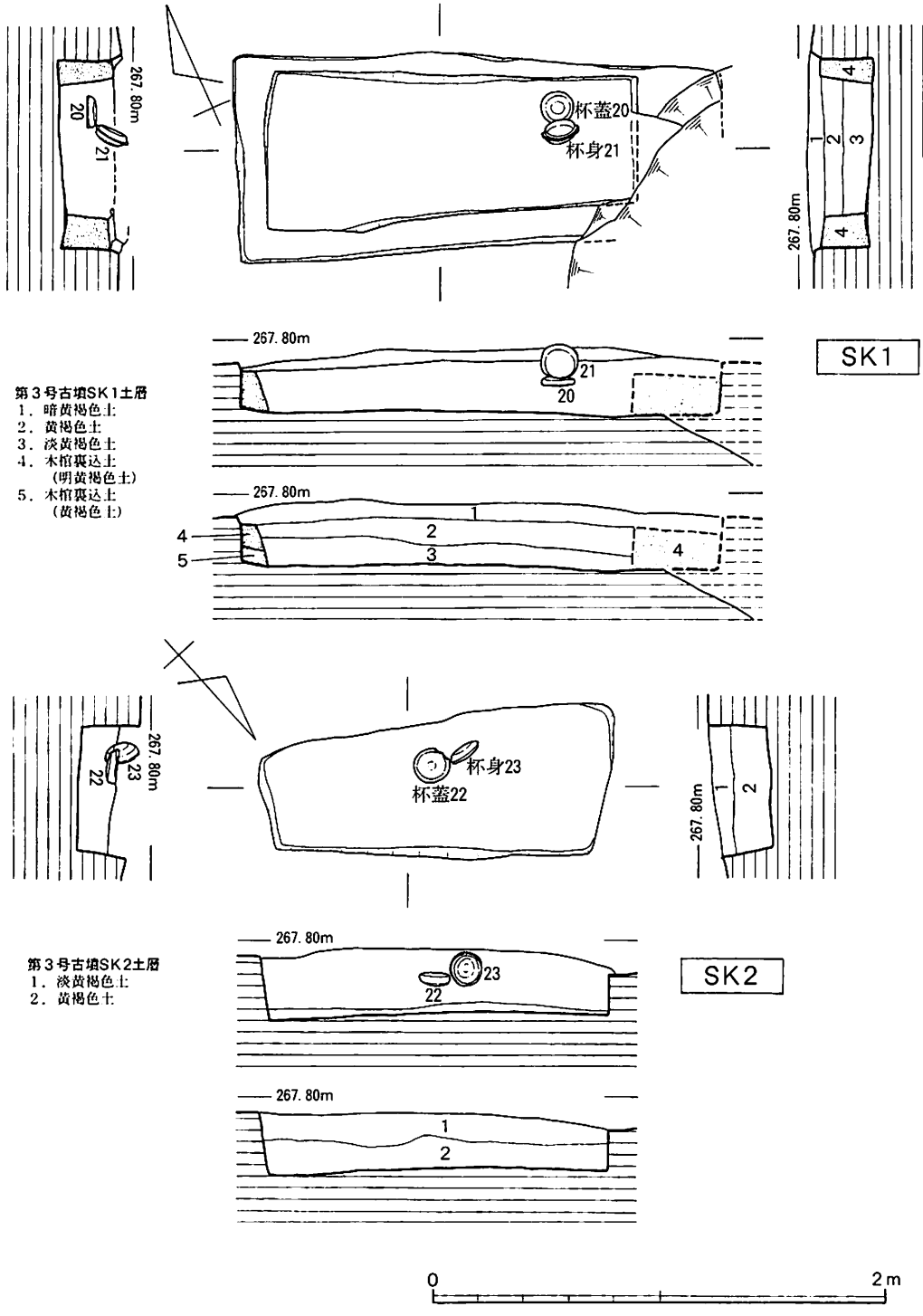
（3）埋葬施設

墳頂部で4基の埋葬施設を検出した。木棺墓3基と土坑墓1基で，大きな攪乱坑によって破壊を受けている。これらの埋葬施設は第2号古墳のものに比べて，明確な重複こそ現状ではみられないものの，配置状況はやや雑然としており，埋葬時期にある程度の時間差が考えられるとともに，被葬者間に階層差が存在した可能性が高い。木棺墓は長方形ないしは方形の墓坑内に木棺を納めて裏込めを施したものである。各墓坑はその上端面の検出が難しく，墳頂部（標高267.90m）から10～10数cm盛土を掘り下げたあたり（標高267.73～267.77m）で墓坑上端をやや不明確ながら検出することができた。墓坑の深さはSK3（深さ49cm）を除いていずれも30cm内外と浅く，墓坑底面の標高も267.27～267.49mと比較的揃っている。墓坑の平面形が長方形の木棺墓2基（SK1・2）は墓坑上面に須恵器の蓋杯のセット1組を置き，正方形に近い平面形をした木棺墓SK3は棺内から刀子のみ出土しており，いずれも副葬内容は第2号古墳の埋葬施設に比べる




**第11図**　大番奥池第３・７号古墳墳丘土層断面実測図（1:60）

と貧弱である。これに対して，土坑墓ＳＫ４は攪乱坑によって大きく壊されているものの，鉄刀や複数の鉄鏃が出土しており，副葬内容は豊かである。須恵器のみ副葬するものと小型鉄製工具のみを副葬するもの，そして武器のみを集中的に副葬するものなど，副葬内容と状況は様々で，統一性がない点が注意される。




**第12図**　大番奥池第３号古墳ＳＫ１・２実測図（1:30）

①ＳＫ１（第12図，図版10ｃ・12ａ・13ｅ）

墳頂部中央に位置する木棺墓で，墓坑の主軸はほぼ西北西-東南東方向（N66° W）を指す。墓坑の平面形はやや東小口が狭くなる長方形で，長さ213cm，幅（西小口）91cm，深さ31cmである。東小口は攪乱坑によって一部壊されている。墓坑の中央に長さ156cm，幅55～69cmの長方形の箱形木棺を納めたとみられる。木棺東小口から30cm西に寄った位置の上半に横に立った状態の須恵器・杯身１点（21）とその北側に接するように伏せて置かれた杯蓋１点（20）が出土した。本来は木棺蓋板上に置かれたものが，木棺の腐朽に伴ってなかに半ば落ち込んだものとみられる。墓坑底面は西小口側が若干高く，幅は東小口よりも西小口のほうが広い。これらのことからＳＫ１の頭位は西小口側と考えられる。

**出土遺物**（第14図，図版15） 須恵器（杯蓋・杯身）各１点がある。

杯蓋（20）は扁平な器形で，口縁に一部欠損があるがほぼ完形である。凹凸があるがほぼ平坦な天井部から開き気味に短い口縁が垂下し，端部は丸く納める。天井部と口縁の境の屈曲部外面には形骸化した稜のごく僅かな名残とその直下にごく浅い凹線１条が施される。天井部外面には稜の１cm程度近くまで回転ヘラケズリが行われている。口縁外面から内面全体にかけて回転ナデで，天井部内面中央には一定方向のナデがみられる。口縁内面の端部近くはごく緩やかな段状を呈する。色調は明灰色で，口径14.3cm，器高3.2～3.9cmである。杯身（21）も扁平な器形で，口縁に部分的に欠損があるもののほぼ完形品である。丸みのある体部から外上方に延びて外方に突出する受部からやや不明確な境界を経て若干内傾気味に立ち上がり，口縁端部は丸く納める。受部は水平に近く，端部は丸い。受部から２cm程度のあたりまで体部外面に回転ヘラケズリを行い，体部上半～口縁部の内外面の調整は回転ナデ，体部中位の内面は未調整で，内底面は一定方向のナデを施している。色調は灰色で，口径12.2～13.1cm，器高4.6cmである。

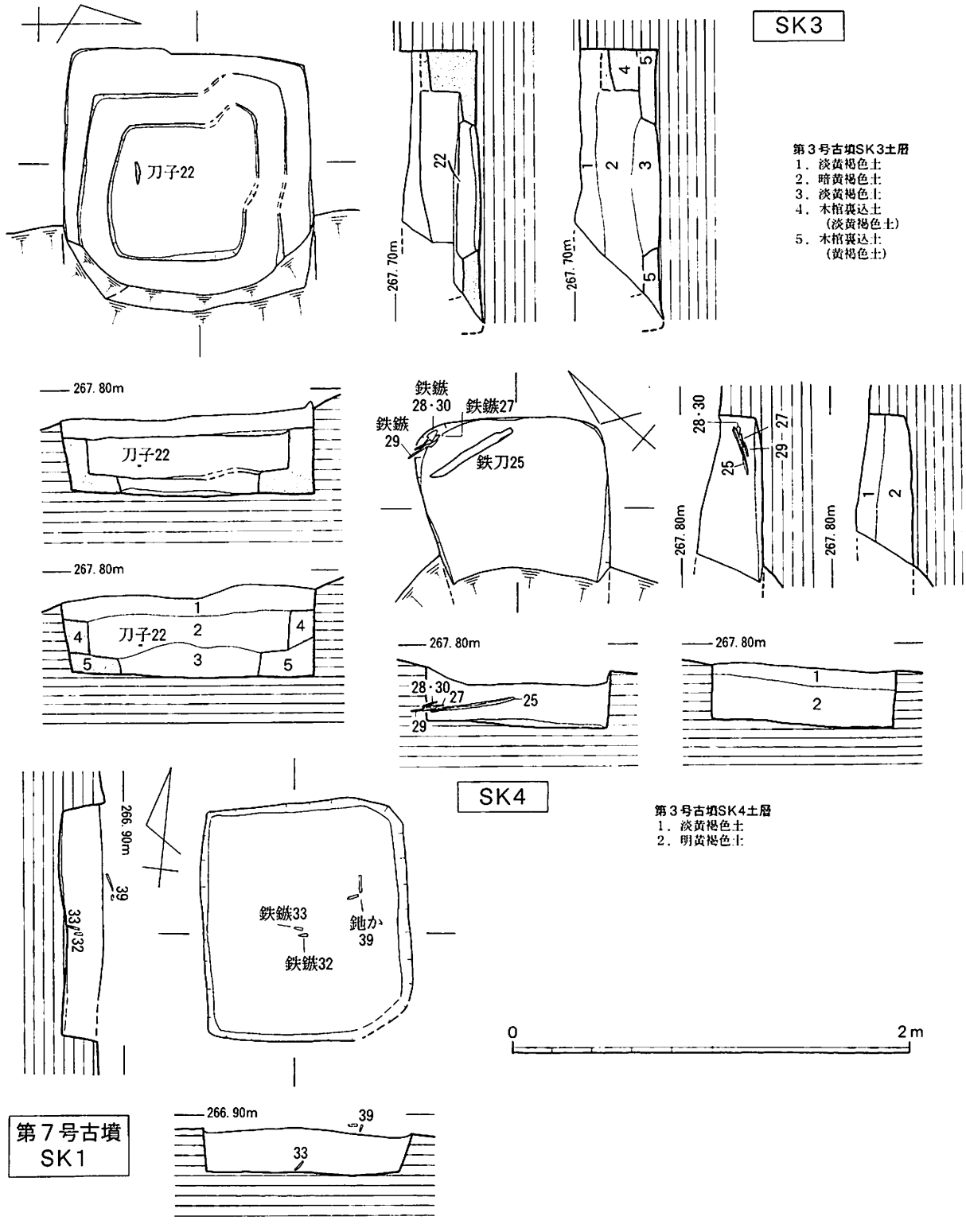
②ＳＫ２（第12図，図版11ａ・12ａ・13ｆ）

墳頂部北東側にＳＫ１とほぼ主軸を揃えて接するように造られている木棺墓で，墓坑の主軸はほぼ北西－南東方向（N48° W）を指す。北西側小口の幅が広く，南東側小口の幅が狭い長台形状の平面長方形の墓坑に木棺を納めたと考えられる。木棺痕跡は明確にしえなかったが，墓坑の大きさは長さ153cm，幅（北西側小口）65cm，同（南東側小口）40cm，深さ31cmである。墓坑ほぼ中央の，底面から12cm上位で須恵器・杯蓋は仰向けの状態で，杯身は横に立てた状態で相接するように出土した。これらの須恵器は墓坑内中位付近にあることから，本来は棺上に置かれていたが，棺の腐朽に伴って棺内に半ば落ち込んだものとみられる。坑底の幅が広く，底面が若干高い北西側が頭位と考えられる。

**出土遺物**（第14図，図版15） 須恵器（杯蓋・杯身）各１点がある。

杯蓋・杯身共にＳＫ１出土のものに形態・調整が酷似する。杯蓋（22）は凹凸があるもののほぼ水平な天井部から強く屈曲して，口縁が開き気味に垂下する。口縁部は端部で外側に短く折れ，端部は丸く納める。口縁端部の内面には緩やかな段がみられる。天井部と口縁部の境の屈曲部の外面には形骸化した僅かな稜とその下位に浅い凹線がみられる。天井部外面は稜から２cm近くま

で回転ヘラケズリを施し，そのほかの部位は口縁部内外面を主体に回転ナデ，天井部内面中央付近は一定方向のナデ，そのほかはごく軽い回転ナデかあるいは未調整である可能性がある。口縁の１／６周程度に欠損がみられるものの，ほぼ完形である。暗灰色の色調をなし，口径15.0cm，




**第13図**　大番奥池第３号古墳ＳＫ３・4，第７号古墳ＳＫ１実測図（1:30）

器高2.7～4.1cmである。杯身（23）は21に較べると底部の丸みが強く，立ち上がり部が長い。受部は端部を尖り気味に納め，立ち上がり部との境は明確である。立ち上がりは内上方に直線的に延び，端部を丸く納める。口縁端面は内傾し，そこにごく細い沈線を施している。調整は，体部外面は底部から受部の２cm近くまで回転ヘラケズリを施し，そのほかは内面にかけて回転ナデである。色調は暗灰色で，口径12.7～13.0cm，器高4.7cmである。口縁部や受部に若干の欠損がみられるが，ほぼ完形である。

③ＳＫ３（第13図，図版11ｂ・12ａ・13ｇ）

ＳＫ３はＳＫ１の南0.4mに位置する方形の木棺墓で，東端を攪乱坑によって壊されている。主軸は東西方向（N90° W）を指す。墓坑の大きさは東西（現存）132cm，南北125cm，深さ49cmで，その中央が二段構造になっており，下段中央に65cm×63cmの大きさのほぼ正方形の木棺が納められていたと考えられる。南辺寄りの底面から８cm上方で刀子が出土した。切先は東に向けており，本来的には木棺の蓋の上に置かれていたと考えられる。

**出土遺物**（第14図，図版15） 刀子１点（24）がある。全長11.5cm，刃部長8.4cm，刃部幅1.7cm，茎部長3.2cmで，両関（角関）とみられる。関寄りの茎部の表面には横走する木質が残存する。

④ＳＫ４（第13図，図版11ｃ・12ａ・13ｈ）

墳頂部中央やや東寄りに位置する土坑墓で，西側に接するようにＳＫ１・２が存在する。墓坑の主軸はほぼ北東－南西方向（N48° E）を指し，南西側を攪乱坑によって壊されていた。墓坑の平面形はほぼ長方形ないしは方形とみられるが明確ではない。墓坑の大きさは，北東－南西方向（現存）82cm，北西－南東方向95cm，深さ27cmである。墓坑北隅の底面から数～10cm程度上方で鉄刀１点と鉄鏃４点がいずれもほぼ東西方向に並んで一塊で出土した。鉄刀の切先は西，鉄鏃の切先はいずれも東を向いていた。これらはその出土状況から，本来的には墓坑上面に置かれていたものが，墓坑内部に落ち込んだものと考えられる。このことから，本墓坑には蓋で覆われていたかあるいは木棺が納められていた可能性がある。

**出土遺物**（第14図，図版15） 鉄刀１，鉄鏃４がある。このほか図示していないが，鉄刀の近くから須恵器の小破片が出土した。

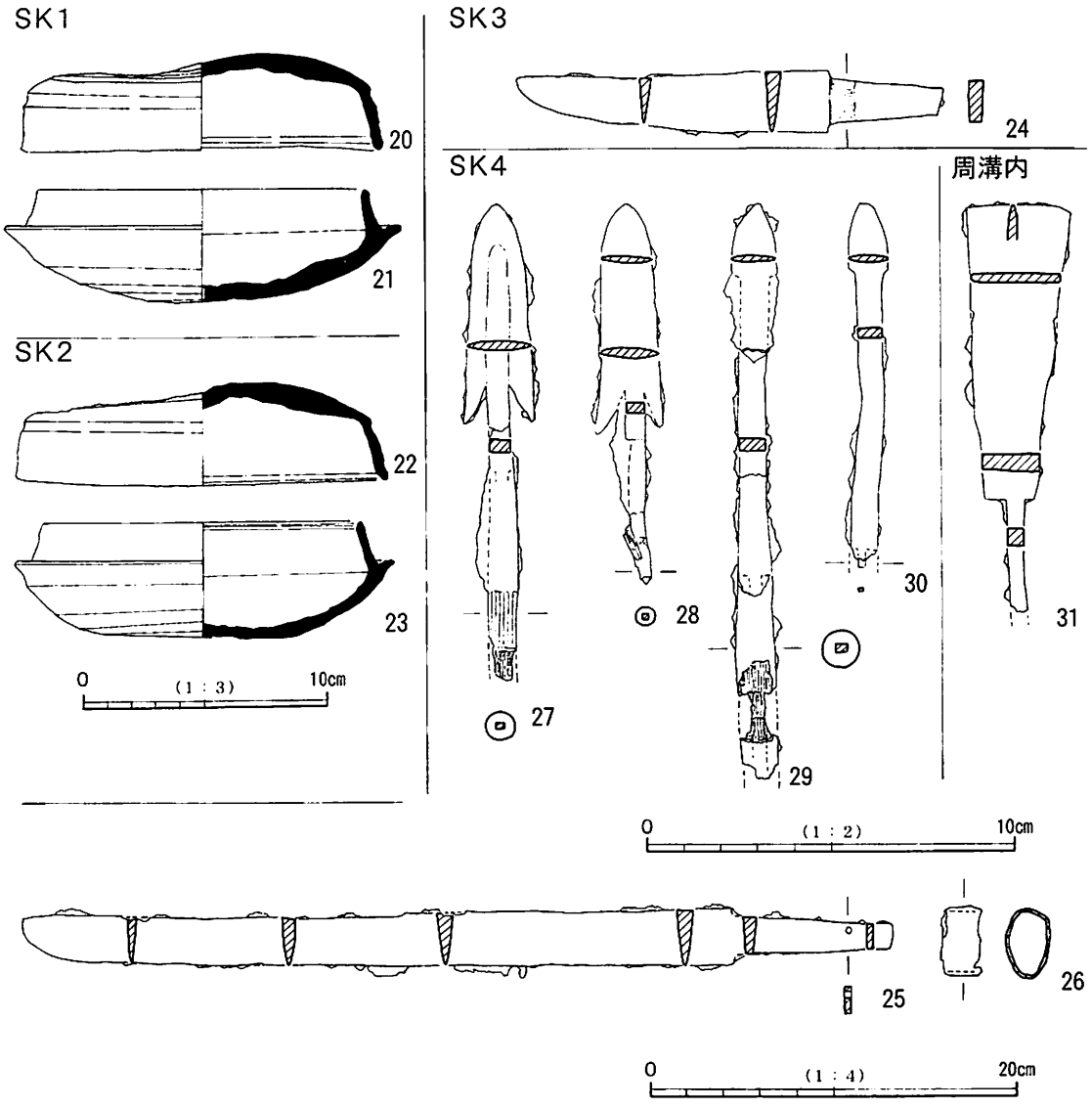
鉄刀（25）は全長47.2cm，刃部長38.6cm，刃部幅3.2cm，茎部長8.5cm，茎部幅2.1cmで，角関の両関である。茎尻から2.2cmのところに径３mmほどの目釘孔がある。26はこの鉄刀に伴う刀装金具のひとつとみられるが，詳細は不明である。長さ２cm，幅3.7cm，厚さ2.4cmで，断面形は倒卵形である。内面には横走する木質がよく残ることから，柄（つか）に伴う金具の可能性が高い。例えば，鐔に近い縁金具かあるいは柄尻の鵐目（しとどめ）金具が考えられる。

鉄鏃４点は腸抉三角形鏃２点（27・28）と長頸鏃の鏃身部が三角形のもの２点（29・30）がある。27は全長（現存）12.8cm，鏃身部長5.9cm，同幅2.0cm，頸部長2.4cm，茎部長（現存）5.6cmである。頸部にはごく部分的に桜の樹皮状のものの痕跡がみられ，茎部には縦走する木質が顕著に残る。28は茎部が多少折れているが，ほぼ完形品である。全長（現存）10.2cm，鏃身部長6.2cm，同幅1.9cm，頸部長3.4cm，茎部長（現存）1.9cmである。茎部には部分的に縦走する木質が残る。

29・30は三角形の鏃身部の関が角関のもので，29は全長15.5cm，鏃身部長2.0cm，同幅1.2cm，頸部長8.0cm，茎部長（現存）5.5cmである。茎部には縦走する木質が顕著に残る。30は全長（現存）9.8cm，鏃身部長1.9cm，同幅1.1cm，頸部長7.4cm，茎部長（現存）0.5cmである。鏃身部の関は撫(なで)関(まち)気味，頸部は角関と考えられる。

（4）周溝出土の遺物（第14図，図版15）

31はＳＥ区周溝内で出土した鉄鏃（方頭鏃）で，茎部を一部欠失している。大きさは，全長（現存）11.1cm，鏃身部長8.0cm，同幅1.3～2.8cm，茎部長（現存）3.1cmである。鏃身部の関は角関である。




**第14図**　大番奥池第３号古墳出土遺物実測図（1:2，1:3，1:4）

## 4．大番奥池第７号古墳

（１）立地と調査前の状況（第３・４図，図版１ａ・１ｂ・８ｃ）

第７号古墳は第３号古墳の南東側に接する平面不整楕円形の小古墳で，当初は第３号古墳の攪乱坑から出された排土の堆積で，古墳の可能性は少ないと考えていた。しかし，表土を除去する段階で鉄鎌片（40）が出土したことから精査したところ埋葬施設を検出し，内部から鉄鏃片などが出土し古墳であると断定した。

第７号古墳は尾根頂部から緩やかに東方向に下傾する斜面に立地する（標高267m）。調査前の状況では，東西５m，南北3.5m，高さ0.23～0.74mの墳丘をもち，周溝は存在しない可能性が高いと思われた。墳形は東西に長い不整楕円形で，墳丘は西が低く，東が高い。調査前の状況は山林である。

（２）墳丘（第５・11図，図版９ａ・12ｂ）

厚さ数cmの表土（１層＝淡黄褐色土）を除去すると，東西4.6m，南北2.9m，高さ0.24～0.76mの大きさの不整楕円形の墳丘が現れた。周溝はない。

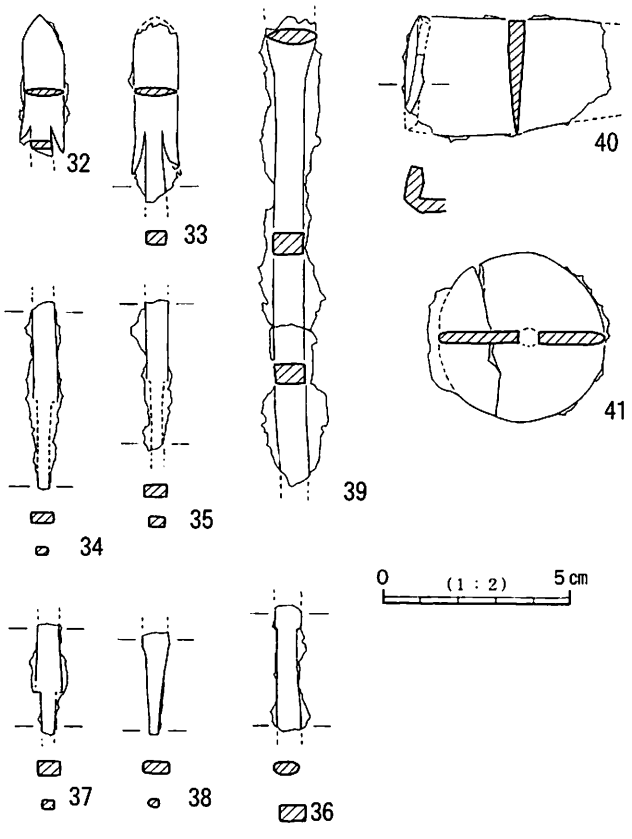
等高線に直交するほぼ東西方向の土層を観察する限りでは，西から東に緩やかに下る旧地形上に２・３層（黄褐色粘質土・淡黄褐色粘質土）の黄褐色系の粘質土を40cm程度盛って古墳は構築されている。

（３）埋葬施設（第13図，図版12ｃ）

墳頂部中央で，南北120cm，東西103cm，深さ25cmの平面形長方形の土坑墓を検出した。主軸はほぼ南北方向（Ｎ６° Ｗ）を指す。坑内中央の底面付近から鉄鏃の鏃身部片２点（32・33），東辺寄りの墓坑上面付近から鉇状の鉄器片（39）が，そのほか坑内覆土から頸部・茎部を主体とする鉄鏃片５点（34～38）が出土した。

**出土遺物**（第15図，図版15）　鉄鏃片７点と鉇状の鉄器片がある。

鉄鏃片はいずれも長頸鏃の鏃身部及び頸・茎部の破片で，完形のものはない。32・33は腸抉三角形の長頸鏃の鏃身部で，やや細身の32は全長（現存）3.7cm，鏃身部長3.6cm，同幅1.1cmである。33は先端に欠損がみられるが，全長（現存）4.7cm，鏃身




**第15図**　大番奥池第７号古墳出土遺物実測図（1:2，1:3）

部長（現存）4.0cm，同幅1.3cmである。34～38は全長（現存）2.7～5.0cmの頸部・茎部片で，いずれも鏃身部を欠いている。ただ，これらはいずれも墓坑内中央付近で出土しているので，鏃身部片の32・33と接合する可能性は高い。34・35・37はいずれも頸部の関が角関で，36は鏃身部の関が角関の可能性が高い。

39は茎部を主とする鉇の破片と考えられるもので，全長（現存）12.4cmである。上端に一部刃部が残る。

（4）墳丘出土の遺物（第15図，図版15）

鉄鎌片と鉄製紡錘車各1点がある。

40は向かって左側に着柄のための折り返しをもつ曲刃鎌で，長さ（現存）5.5cm，幅3.2cmである。折り返し角度は85°，着柄角度は97°である。墳頂部で出土した。

41は墳丘北側裾で出土した鉄製紡錘車で，径4.5cmである。中央に円孔があると思われるが明確でない。

**第3表**　大番奥池第1～3・7号古墳出土遺物一覧

（1）須恵器（＊；復元値）

| 報告No. | 器　種 | 古墳名 | 出土位置 | 法　量（cm） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 口　径 | 受部径 | 器　高 |
| 1 | 杯蓋 | 第1号古墳 | SW区周溝内 | － | － | － |
| 2 | 杯身 | 第1号古墳 | SW区周溝外 | 12.4 | － | 5.8 |
| 14 | 杯蓋 | 第2号古墳 | SK2 | 14.6 | － | 5.6 |
| 15 | 杯身 | 第2号古墳 | SK2 | 12.2 | 15.0 | 6.1 |
| 16 | 杯身 | 第2号古墳 | SK2 | 12.4 | 15.2 | 6.0 |
| 17 | 杯身 | 第2号古墳 | SK2 | 11.8 | 14.4 | 5.9 |
| 18 | 壺 | 第2号古墳 | NW区周溝上面 | ＊13.7 | － | － |
| 20 | 杯蓋 | 第3号古墳 | SK1 | 14.3 | － | 3.9 |
| 21 | 杯身 | 第3号古墳 | SK1 | 13.1 | 15.7 | 4.6 |
| 22 | 杯蓋 | 第3号古墳 | SK2 | 15.0 | － | 4.1 |
| 23 | 杯身 | 第3号古墳 | SK2 | 13.0 | 15.1 | 4.7 |

（2）鉄器（括弧；現存値）

| 報告No. | 器種 | 古墳名 | 出土位置 | 法量（cm） | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 全長 | 鏃身部長さ | 鏃身部幅 | 頸部長さ | 頸部幅 | 茎部長さ | 茎部幅 |
| 3 | 摘鎌 | 第1号古墳 | 墳丘盛土 | 長さ8.0　刃幅2.1　厚さ0.3 | | | | | | |
| 9 | 鉄鏃 | 第2号古墳 | SK1 | (13.2) | 7.0 | (2.7) | 4.5 | 0.9 | (3.6) | 0.6 |
| 10 | 鉄鏃 | 第2号古墳 | SK1 | (8.8) | 5.5 | 3.1 | 5.5 | 0.8 | (0.5) | 0.5 |
| 11 | 鉄鏃 | 第2号古墳 | SK1 | (9.1) | (4.2) | 3.3 | 4.0 | 0.8 | (1.5) | 0.7 |
| 12 | 鉄鎌 | 第2号古墳 | SK1 | 長さ(13.7)　幅2.7　背厚0.4 | | | | | | |
| 13 | 刀子 | 第2号古墳 | SK1 | 長さ10.5　刃部長7.0　刃部幅1.4　刃部背厚0.4　茎部長3.2　茎部幅1.2 | | | | | | |
| 19 | 鉄鎌 | 第2号古墳 | SK2 | 長さ16.1　幅3.8　背厚0.4 | | | | | | |
| 24 | 刀子 | 第3号古墳 | SK3 | 長さ11.5　刃部長8.4　刃部幅1.7　刃部背厚0.5　茎部長3.2　茎部幅1.1 | | | | | | |
| 25 | 鉄刀 | 第3号古墳 | SK4 | 長さ47.2　刃部長38.6　刃部幅3.2　刃部背厚1.0　茎部長8.5　茎部幅2.1 | | | | | | |
| 26 | 柄縁金具か | 第3号古墳 | SK4 | － | | | | | | |
| 27 | 鉄鏃 | 第3号古墳 | SK4 | (12.8) | 5.9 | 2.0 | 2.4 | 0.6 | (5.6) | 0.8 |
| 28 | 鉄鏃 | 第3号古墳 | SK4 | (10.2) | 6.2 | 1.9 | 3.4 | 0.5 | (1.9) | (0.4) |
| 29 | 鉄鏃 | 第3号古墳 | SK4 | (15.5) | 2.0 | 1.2 | 8.0 | 0.9 | (5.5) | 1.1 |
| 30 | 鉄鏃 | 第3号古墳 | SK4 | (9.8) | 1.9 | 1.1 | 7.4 | 0.7 | (0.5) | 0.2 |
| 31 | 鉄鏃 | 第3号古墳 | SE区周溝内 | (11.1) | 8.0 | 2.8 | － | － | (3.1) | 0.5 |
| 32 | 鉄鏃（鏃身） | 第7号古墳 | SK1 | (3.7) | 3.6 | 1.1 | (0.8) | 0.5 | － | － |
| 33 | 鉄鏃（鏃身） | 第7号古墳 | SK1 | (4.7) | (4.0) | (1.3) | (1.9) | 0.6 | － | － |
| 34 | 鉄鏃（頸・茎） | 第7号古墳 | SK1 | － | | | | | | |
| 35 | 鉄鏃（頸・茎） | 第7号古墳 | SK1 | － | | | | | | |
| 36 | 鉄鏃（頸） | 第7号古墳 | SK1 | － | | | | | | |
| 37 | 鉄鏃（頸・茎） | 第7号古墳 | SK1 | － | | | | | | |
| 38 | 鉄鏃（頸・茎） | 第7号古墳 | SK1 | － | | | | | | |
| 39 | 鉋か | 第7号古墳 | SK1 | 長さ(12.4)　刃部幅1.3　茎部幅0.8 | | | | | | |
| 40 | 鉄鎌 | 第7号古墳 | 墳丘 | 長さ(5.5)　幅3.2　背厚0.4 | | | | | | |
| 41 | 紡錘車 | 第7号古墳 | 墳丘 | 径4.5　厚さ0.3 | | | | | | |

（3）玉類（括弧；現存値）

| 報告No. | 器種 | 古墳名 | 出土位置 | 法量（cm・g） | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | 長さ | 径 | 孔径 | 重さ |
| 4 | 管玉 | 第1号古墳 | 墳丘盛土 | 2.5 | 0.7 | 0.4 | 2.19 |
| 5 | 管玉 | 第1号古墳 | 墳丘盛土 | 2.8 | 1.0 | 0.4 | 4.19 |
| 6 | 管玉 | 第1号古墳 | 墳丘盛土 | 2.3 | 0.9 | 0.3 | 3.22 |
| 7 | 管玉 | 第1号古墳 | 墳丘盛土 | 2.2 | 0.9 | 0.2 | 2.88 |
| 8 | 管玉 | 第1号古墳 | 墳丘盛土 | (1.8) | 0.9 | 0.2 | (1.11) |

## 第４表　広島県内の主な墳頂部複数埋葬古墳

| No. | 文献＊ | 所在地 | | 古墳名 | 立地 | 標高(m) | 比高 | 墳形 | 墳丘規模(直径，m) | 時期 | 埋葬施設＊＊ 基数 | 従属 | 内容 | 名称 | 配列 | 副葬品 土器 | 鉄器 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 本書 | 三次市 | 吉舎町 | 大番奥池２ | 丘頂 | 268m | 50m | 円 | 7.7×7.5 | ６ｃ前半 | 2 | | 土坑（木棺） | ＳＫ１ | A | | 鉄鏃３・鉄鎌(曰)１～２，刀子１ | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | ＳＫ２ | | 須恵器（杯蓋１・杯身３） | 鉄鏃（曲）１ | |
| 2 | 本書 | 三次市 | 吉舎町 | 大番奥池３ | 丘陵傾斜変換点 | 267m | 50m | 円 | 10.5×9.3 | | 4 | | 土坑（木棺） | ＳＫ１ | C | 須恵器（杯蓋１・杯身１） | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | ＳＫ２ | | 須恵器（杯蓋１・杯身１） | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | ＳＫ３ | | | 刀子１ | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | ＳＫ４ | | | 鉄刀１・鉄鏃４ | |
| 3 | 1 | 三次市 | 吉舎町 | 燎東 | 丘陵端部 | 242m | 20m | 円 | ９×８ | ６ｃ前半 | 2 | × | 土坑（木棺） | ＳＫ１ | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | ○ | 土坑（木棺） | ＳＫ２ | | 須恵器（杯蓋１・杯身３） | 鉄刀片１・刀子１ | |
| 4 | | 三次市 | 吉舎町 | 片野中山12 | 丘頂 | 235m | 30m | 円 | 10×9.7 | ５ｃ末～６ｃ前半 | 2 | | 土坑（木棺） | 第１埋葬施設 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | 第２埋葬施設 | | | | |
| 5 | | 三次市 | 吉舎町 | 下矢井南４ | 丘頂 | 273m | 50m | 円 | 18 | ４ｃ末～５ｃ初 | 4 | | 粘土槨（割竹形木棺） | ＳＫ１ | A | | 刀子２ | 竪櫛１ |
| | | | | | | | | | | | | | 粘土槨（割竹形木棺） | ＳＫ２ | | | 鉄剣２・刀子１ | |
| | | | | | | | | | | | | | 粘土槨（割竹形木棺） | ＳＫ３ | | | 鉄剣１・鉄鏃１・鉄斧２・刀子１ | 竪櫛１ |
| | | | | | | | | | | | | × | 土坑（割竹形木棺） | ＳＫ４ | | | | 竪櫛１ |
| 6 | 2 | 三次市 | 向江田町 | 権現２ | 丘頂 | 209m | 20m | 円 | 20 | ５ｃ | 5 | ○ | 箱式石棺 | ＳＫ１ | C | | 鉄鏃（直）１ | 管玉・臼玉 |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ＳＫ２ | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ＳＫ３ | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ＳＫ４ | | | 刀子１ | 勾玉・管玉 |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ＳＫ５ | | | | |
| 7 | 3 | 三次市 | 向江田町 | 権現３ | 丘頂 | 208m | 20m | 円か | 10～12 | | 2 | | 箱式石棺 | ＳＫ１ | A | | 刀子１ | 勾玉・滑石玉・臼玉 |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ＳＫ２ | | | | 勾玉・管玉・臼玉・有孔楕円形玉 |
| 8 | 4 | 三次市 | 向江田町 | 下山手５ | 丘頂 | 223m | | 長方 | 22×16 | ５ｃ | 3 | | 箱式石棺 | ＳＫ１ | C | | 鉇１ | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ＳＫ２ | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ＳＫ３ | | | | |
| 9 | | 三次市 | 向江田町 | 箱山４ | 丘頂 | 211m | 10m | 楕円 | 10×8.4 | ５ｃ | 3 | ○ | 箱式石棺 | ＳＫ１ | C | | | ガラス小玉４ |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ＳＫ２ | | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 石蓋土坑 | ＳＫ３ | | | | |
| 10 | | 三次市 | 向江田町 | 箱山５ | 丘頂 | 208m | 10m | 方 | 14×13.7 | ５ｃ | 3 | ○ | 箱式石棺 | ＳＫ１ | B | | 鉇１・不明鉄器１ | 竪櫛１ |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ＳＫ２ | | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 石蓋土坑 | ＳＫ６ | | | | |
| 11 | | 三次市 | 向江田町 | 箱山６ | 丘頂 | 206m | 10m | 方 | 9.3 | ５ｃ | 3 | ○ | 土坑（木棺） | ＳＫ１ | C | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ＳＫ２ | | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ＳＫ３ | | | | |
| 12 | 5 | 三次市 | 向江田町 | 野稲南11 | 丘頂 | 210m | | 円 | 10×8＋ | ６ｃ前半 | 2 | | 土坑 | １号主体部 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 土坑 | ２号主体部 | | | | |
| 13 | | 三次市 | 向江田町 | 宮の本21 | 丘頂 | 245m | 50m | 円 | 14.4×13.6 | ５ｃ | 2 | | 箱式石棺 | ＳＫ１ | A | | 鉄斧１・鉄鎌(直)１・鉄鏃１ | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ＳＫ２ | | | | |
| 14 | | 三次市 | 向江田町 | 宮の本22 | 丘頂 | 244m | 50m | 円 | 10.8×9.6 | ５ｃ | 2 | | 箱式石棺 | ＳＫ１ | A | | 刀子１ | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ＳＫ２ | | | | |
| 15 | | 三次市 | 向江田町 | 宮の本23 | 丘頂 | 243m | 50m | 円 | 10.6×8.8 | ５ｃ | 3 | × | 箱式石棺 | ＳＫ１ | C | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ＳＫ２ | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ＳＫ３ | | | | |
| 16 | | 三次市 | 向江田町 | 宮の本24 | 丘頂 | 247m | 50m | 円 | 30.8×29.6 | ５ｃ | 3 | | 竪穴式石室 | ＳＫ１ | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ＳＫ２ | | | | 小型鏡（珠文鏡） |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ＳＫ３ | | | (複乱－鉄鏃・刀子片か) | |
| 17 | 6 | 三次市 | 十日市南 | 花園19 | 丘頂 | 193m | | 円 | 15 | ５ｃ～６ｃ前半 | 3 | | 箱式石棺 | 第１主体 | A′ | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | 第２主体 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | 第３主体 | | | | |
| 18 | 7 | 三次市 | 南畑敷町 | 緑岩 | 丘陵端部 | 205m | | 円 | 20 | ６ｃ前半 | 3 | | 竪穴式石室 | 第１主体部 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 竪穴式石室 | 第２主体部 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 土坑 | | | | | |
| 19 | 8 | 三次市 | 南畑敷町 | 掛原下７ | 丘頂 | 226m | | 円 | 10 | ５ｃ末～６ｃ初 | 2 | | 箱式石棺 | ＳＫ１ | A | | 鉄鏃２・刀子１ | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ＳＫ２ | | | | |
| 20 | 9 | 三次市 | 西酒屋町 | 酒屋高塚 | 丘頂 | 224m | | 帆立貝 | 全長46 | ５ｃ後半 | 2 | | 竪穴式石室 | 第１号主体 | A | | 鉄鏃4＋・鉄斧１・鉄鏃１・刀子 | 画文帯神獣鏡・砥石 |
| | | | | | | | | | | | | | 竪穴式石室 | 第２号主体 | | | 鉄剣１ | 勾玉・ガラス小玉・臼玉 |
| 21 | 10 | 三次市 | 西酒屋町 | 大坂６ | 丘陵端部 | 238m | 2～5m | 円 | 9 | ５ｃ後半～６ｃ前葉 | 2 | × | 竪穴式石室（円筒埴輪片床） | 第１主体部 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | 第２主体部 | | 須恵器（杯蓋７・杯身７・坩蓋１・坩１・提瓶１） | | |
| 22 | 11 | 三次市 | 西酒屋町 | 寄貞８ | 丘頂 | 230m | | 円 | 12 | | 2 | | 竪穴式石室 | １号主体 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | ２号主体 | | | | |

| No. | 文献* | 所在地 | | 古墳名 | 立地 | 標高(m) | 比高 | 墳形 | 墳丘規模(直径, m) | 時期 | 埋葬施設** | | | | | 副葬品 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | 基数 | 従属 | 内容 | 名称 | 配列 | 土器 | 鉄器 | その他 |
| 23 | 12 | 三次市 | 四拾貫町 | 四拾貫小原1 | 丘頂 | | | 円 | 26×24 | 5c後半 | 3 | | 土坑（木棺） | A主体 | A | 土師器（高杯・壺）・須恵器 | 鉄斧1・鉄製鋤先？1 | 珠文鏡1 |
| | | | | | | | | | | 5c前半 | | | 粘土槨（割竹形木棺） | B主体 | | | 鉄刀1・刀子1 | 勾玉・小玉・算盤玉 |
| | | | | | | | | | | | | | 粘土槨（割竹形木棺） | C主体 | | | 鉄剣1・鉄鏃3・鉄鎌1・鉄斧1 | |
| 24 | 13 | 三次市 | 四拾貫町 | 上四拾貫10 | 丘陵端部 | 213m | | 円 | 13 | | 2 | | 竪穴式石室 | A主体 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | B主体 | | | 鉄刀1・鉄鏃2 | |
| 25 | 14 | 三次市 | 小田幸町 | 五反田2 | 丘頂 | 211m | 20m | 円 | 7×6.5 | 5c後半 | 2 | | 土坑（木棺） | 第1主体部 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | 第2主体部 | | | | |
| 26 | 15 | 三次市 | 青河町 | 鞍ヶ谷北1 | 丘陵端部 | 191m | | 円 | 12 | | 2 | | 土坑（木棺） | A主体 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | B主体 | | | | |
| 27 | 15 | 三次市 | 青河町 | 鞍ヶ谷北2 | 丘陵端部 | 191m | | 円 | 8 | | 2 | | 箱式石棺 | A主体 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | B主体 | | | | |
| 28 | 16 | 三次市 | 三良坂町 | 植松1 | 丘陵端部 | 265m | 20m | 円 | 14 | 6c前半 | 2 | | 粘土槨（箱式木棺） | A主体 | C | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | B主体 | | 須恵器（杯蓋1・杯身1・甕1） | 刀子1 | 土製小玉84 |
| 29 | 17 | 三次市 | 三良坂町 | 杉谷9 | 丘頂 | 270m | 25m | 円 | 16×14.5 | 5c | 2 | | 箱式石棺 | SK1 | A′ | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | SK2 | | | | |
| 30 | | 三次市 | 甲奴町 | 茶臼 | 丘頂 | 414m | 40m | 長方 | 12×10 | 5c中頃 | 3 | | 箱式石棺 | SK1 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | SK2 | | | | ガラス小玉15 |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | SK3 | | | | |
| 31 | 18 | 庄原市 | 平和町 | 西ケ迫11 | 丘頂 | 255m | 40m | 円 | 7.5×6.8 | 5c後半 | 2 | | 箱式石棺 | A主体部 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 石蓋土坑 | B主体部 | | | | |
| 32 | 19 | 庄原市 | 本村町 | 月貞寺29 | 丘頂 | 348m | 50m | 円 | 11×8.2 | | 3 | | 土坑（木棺） | A主体 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | B主体 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | C主体 | | | | |
| 33 | 19 | 庄原市 | 本村町 | 月貞寺30 | 丘陵端部 | 349m | 50m | 円 | 11.9×11.3 | 6c前半 | 2 | | 竪穴式石室（礫床） | A主体 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 竪穴式石室（礫床） | B主体 | | | 刀子1 | |
| 34 | | 庄原市 | 口和町 | 稲千場3 | 丘陵斜面 | 317m | | 円 | 7 | | 2 | | 土坑 | 1 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | 2 | | | | |
| 35 | | 庄原市 | 口和町 | 稲千場4 | 丘陵端部 | 323m | | 円 | 12 | 6c前半 | 3 | | 土坑 | 1 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | 2 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | 4 | | | | |
| 36 | 20 | 庄原市 | 東城町 | 中央山1 | 丘頂 | 365m | 60m | 円 | 11 | 5c後半 | 2 | | 石蓋土坑 | 第1主体 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 石蓋土坑 | 第2主体 | | | | |
| 37 | 21 | 庄原市 | 東城町 | 中央山3 | 丘頂 | 362m | 60m | 長方 | 5.5×4.5 | 5c後半 | 2 | | 土坑 | 北側土坑 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 土坑 | 南側土坑 | | | | |
| 38 | 22 | 庄原市 | 東城町 | 川東大仙山10 | 丘頂 | 500m | 100m | 円 | 8.5×8 | 6c前半 | 2 | | 土坑 | 第1主体 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 土坑 | 第2主体 | | | | |
| 39 | | 庄原市 | 高野町 | 岡東1 | 丘頂 | 576m | 50m | 円 | 16 | 5c | 2 | | 土坑（割竹形木棺） | SK1 | C | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 石蓋土坑 | SK2 | | | | |
| 40 | | 庄原市 | 高野町 | 岡東4 | 丘頂 | 574m | 50m | 円 | 9 | 5c | 2 | | 土坑 | SK1 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 土坑 | SK2 | | | | |
| 41 | 23 | 府中市 | 元町 | 山の神1 | 丘陵端部 | 86m | 26m | 円 | 12 | 4c | 3 | ○ | 箱式石棺 | 1号主体 | B | | | 内行花文鏡1・管玉・ガラス小玉 |
| | | | | | | | | | | | | ○ | 箱式石棺 | 2号主体 | | | 刀子2 | 重圏文鏡1・勾玉・管玉・小玉 |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | 3号主体 | | | | |
| 42 | 24 | 府中市 | 元町 | 山の神3 | 丘頂 | 99m | 40m | 方 | 8.2×7.7 | 4c後半 | 2 | | 箱式石棺 | 第1主体部 | C | | | 珠文鏡・ガラス小玉・管玉 |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | 第2主体部 | | | | |
| 43 | 24 | 府中市 | 元町 | 山の神4 | 丘頂 | 98m | 40m | 方 | 6.5×4.7 | 4c後半 | 2 | | 箱式石棺 | 第1主体部 | A | | 鉄鏃1 | |
| | | | | | | | | | | | | | 石蓋土坑 | 第2主体部 | | 土師器（甕） | | |
| 44 | 25 | 福山市 | 新市町 | 城山3 | 丘頂 | 112m | 30m | | | 古墳時代初頭 | 3 | | 土坑 | 第1主体 | B | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 石蓋土坑 | 第2主体 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 土坑 | 第3主体 | | | | |
| 45 | 26 | 福山市 | 新市町 | 城山4 | 丘頂 | 117m | 20m | | | 古墳時代初頭 | 3 | | 土坑（木棺） | 第1主体 | C | | 鉄鏃1・鉄斧1・鉇1・鉄鎌(頭)1 | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | 第2主体 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | 第3主体 | | | 鉄鏃・鉄釘 | |
| 46 | 27 | 福山市 | 駅家町 | 才谷2 | 丘頂 | 46m | 25m | 円 | 8.5×8 | | 2 | | 箱式石棺 | A主体 | A′ | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | B主体 | | | | |
| 47 | 27 | 福山市 | 駅家町 | 才谷3 | 丘頂 | 47m | 25m | 円 | 15.7×15 | | 2 | | 箱式石棺（礫床） | A主体 | A | | 鉄針1・刀子1 | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | B主体 | | | | |
| 48 | 27 | 福山市 | 駅家町 | 才谷4 | 丘頂 | 47m | 25m | 円 | 15.6×14.4 | 5c後半 | 4 | ○ | 粘土槨（割竹形木棺） | A主体 | B | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 石蓋土坑 | B主体 | | | 刀子1・鉄針1 | |
| | | | | | | | | | | | | × | 石蓋土坑 | C主体 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 石蓋土坑 | D主体 | | | | 勾玉1・棗玉1 |

| No. | 文献＊ | 所在地 | | 古墳名 | 立地 | 標高(m) | 比高 | 墳形 | 墳丘規模(直径, m) | 時期 | 埋葬施設＊＊ | | | | | 副葬品 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | 基数 | 従属 | 内容 | 名称 | 配列 | 土器 | 鉄器 | その他 |
| 49 | 28 | 福山市 | 駅家町 | 石鎚権現２ | 丘頂 | 74m | 40m | 円 | 15×12 | ５ｃ中頃 | 2 | | 木蓋土坑 | 第１主体部 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 木蓋土坑 | 第２主体部 | | | | |
| 50 | 29 | 福山市 | 駅家町 | 石鎚権現３ | 丘陵端部 | 67m | 35m | 方 | 8 | ５ｃ後半～６ｃ前半 | 2 | | 土坑（木棺） | 第１号主体 | A | | 不明鉄器１ | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | 第２号主体 | | | 鉄鏃１ | |
| 51 | 30 | 福山市 | 駅家町 | 石鎚権現８ | 丘頂 | 70m | 35m | 円 | 14×13.5 | ４ｃ末～５ｃ前半 | 2 | ○ | 箱式石棺（礫床） | 第１主体部 | A | | 刀子１ | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | 第２主体部 | | | | |
| 52 | 31 | 福山市 | 駅家町 | 石鎚権現９ | 丘頂 | 66m | 30m | 長方 | 8×3 | | 2 | | 土坑 | 第１主体部 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | 第２主体部 | | | | |
| 53 | 32 | 福山市 | 駅家町 | 長迫２ | 丘頂 | 60m | | 長方 | 33×24 | ４ｃ後半 | 4 | × | 土坑（木棺） | １号主体部 | B | | 鉄鏃２ | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | ２号主体部 | | 土師－土師器（甕・皿・壺） | 鉇２ | |
| | | | | | | | | | | | | ○ | 竪穴式石室（木棺） | ３号主体部 | | 土師－土師器（壺・器台） | 鉄槍１ | |
| | | | | | | | | | | | | × | 土坑 | ４号主体部 | | | 鉇１ | |
| 54 | 33 | 福山市 | 駅家町 | 法成寺本谷 | 丘陵端部 | 69m | 45m | 円 | 11×9 | ４ｃ | 2 | | 土坑 | ＳＫ１ | A | | 鉄剣１・鉄鏃３ | |
| | | | | | | | | | | | | × | 石蓋土坑 | ＳＫ２ | | | 刀子１ | |
| 55 | 34 | 福山市 | 駅家町 | 掛迫６ | 丘頂 | | | 前方後円 | 46.5 | ５ｃ後半 | 2 | | 竪穴式石室 | 中央石室 | A | | 鉄斧１ | 環龍鏡１ |
| | | | | | | | | | | | | | 竪穴式石室 | 南側石室 | | | | 三角縁神獣鏡１・勾玉・ガラス製小玉 |
| 56 | 35 | 福山市 | 神辺町 | 道上２ | 丘陵端部 | 96m | 80m | 楕円 | 8×6.5 | 中期前半 | 2 | | 土坑（割竹形木棺２） | 北側木棺 | A | | 刀子１ | |
| | | | | | | | | | | | | | | 南側木棺 | | | 鉄刀１ | |
| 57 | 36 | 福山市 | 加茂町 | 石鎚山１ | 丘陵端部 | 63m | | 円 | 19.4×19.2 | ４ｃ後半 | 2 | | 竪穴式石室（割竹形木棺） | 第１号主体部 | A′ | | 鉇２・刀子１・鉄鏃14 | 勾玉５・管玉42・斜縁二神二獣鏡１ |
| | | | | | | | | | | | | | 竪穴式石室（割竹形木棺） | 第２号主体部 | | | 鉄剣１・鉄鏃27・刀子１ | 銅鏃５・勾玉１ |
| 58 | 37 | 福山市 | 加茂町 | 石鎚山２ | 丘頂 | 62m | 30m | 円 | 16 | ４ｃ末～５ｃ前半 | 2 | | 土坑（木棺） | 第１号主体部 | A′ | | 鉇１・刀子１ | 内行花文鏡片２ |
| | | | | | | | | | | | | | 粘土槨(割竹形木棺) | 第２号主体部 | | | | |
| 59 | 38 | 福山市 | 加茂町 | 吹越８ | 丘頂 | 75m | 50m | 円 | 21×20 | ５ｃ前半 | 2 | | 箱式石棺 | 第１号主体部 | C | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 石蓋土坑 | 第２号主体部 | | | | 勾玉１・棗玉26 |
| 60 | 39 | 安芸高田市 | 八千代町 | 新宮２ | 丘頂 | 267m | 40m | 長方 | 15×8.5 | ４ｃ後半 | 2 | | 箱式石棺 | １号主体部 | A | | 鉄鉾１・鉇１ | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ２号主体部 | | | | 管玉３ |
| 61 | 40 | 北広島町 | 千代田 | 宮城１ | 丘頂 | 325m | 30m | 円 | 11×10 | ６ｃ初頭 | 2 | | 箱式石棺 | 第１主体部 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | 第２主体部 | | | | |
| 62 | 41 | 北広島町 | 千代田 | 塚迫１ | 丘頂 | 298m | 30m | 円 | 12.5×11.5 | ５～６ｃ | 2 | | 竪穴式石室（箱式石棺状） | 第１主体 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 竪穴式石室（箱式石棺状） | 第２主体 | | | | |
| 63 | 42 | 安芸太田町 | 中筒賀 | 横路小谷１ | 丘頂 | 323m | 40m | 円 | 19×18 | ５ｃ前半 | 3 | | 土坑（木棺） | 第１主体部 | A | | 刀子１ | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（割竹形木棺） | 第２主体部 | | 土師器（壺） | 鍬先１・刀子２・鉄鋤１ | 内行花文鏡１・石釧・勾玉ほか |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（割竹形木棺） | 第３主体部 | | 土師器（高杯） | 刀子１ | |
| 64 | 42 | 安芸太田町 | 中筒賀 | 横路小谷２ | 丘頂 | 322m | 40m | 方 | 8 | ５ｃ前半 | 2 | | 土坑 | 第１主体部 | A | | | 管玉２・ガラス小玉10 |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | 第２主体部 | | | | |
| 65 | 43 | 広島市 | 安佐南区 | 権地 | 丘頂 | 70m | 30m | | | ５ｃ | 2 | | 土坑（割竹形木棺） | Ａ主体 | C | | 鉄刀１・鉄鏃20・鉇２・鑿１・鉄鏃１・鉄斧１ | 砥石１ |
| | | | | | | | | | | | | | 竪穴式石室（箱式石棺状） | Ｂ主体 | | | | |
| 66 | 44 | 広島市 | 安佐北区 | 大明地２ | 丘頂 | 46m | 20m | 円 | 8 | ５ｃ前半 | 2 | | 土坑（木棺） | １号主体部 | A′ | | 鉄剣２・鉄鏃20・鉄鑓１・刀子２ | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | ２号主体部 | | | | |
| 67 | 45 | 広島市 | 安佐北区 | 中小田９ | 丘陵端部 | 94m | 40m | 円 | 5 | ５ｃ | 4 | | 箱式石棺 | １号石棺 | A′ | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ２号石棺 | | | | 勾玉・管玉・ガラス製小玉 |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ３号石棺 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | ４号石棺 | | | | |
| 68 | 46 | 広島市 | 安佐北区 | 虹山 | 丘頂 | 129m | 70m | 円（造出） | 全長24.6 | ５ｃ前半～中葉 | 2 | ○ | 土坑（割竹形木棺） | １号主体 | A | | 鉄剣１・鉄鏃８・鉄斧１・刀子１ | ガラス製小玉５ |
| | | | | | | | | | | | | × | 土坑（木棺） | ２号主体 | | | | |
| 69 | 47 | 広島市 | 安佐北区 | 諸木 | 丘頂 | 72m | 25m | 円 | 11 | ５ｃ中葉 | 2 | ○ | 土坑（木棺・礫床・木棺） | 第１主体部 | A′ | 土師器(椀)，須恵器(蓋１) | 鉄鉇１ | ガラス小玉 |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | 第２主体部 | | | | |
| 70 | 48 | 広島市 | 安佐北区 | 大久保 | 丘頂 | 55m | 20m | 円 | 12×9 | ５ｃ | 2 | | 竪穴式石室 | １号主体部 | A′ | | 鉄刀１ | 滑石製子持勾玉１ |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺・礫床） | ２号主体部 | | | 鉄鏃４ | 珠文鏡１ |
| 71 | 49 | 広島市 | 安佐北区 | 立石 | 丘頂 | 44m | | 長方 | 17×10 | ６ｃ前半 | 3 | | 箱式石棺 | 第１主体部 | A | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | 第２主体部 | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | 第３主体部 | | | | |
| 72 | 50 | 広島市 | 安佐北区 | 可部寺山５ | 丘頂 | 95m | | 長円 | 12.5×10.5 | ５ｃ前半 | 2 | ○ | 土坑（木棺） | ＳＫ１ | A | | 短冊形鉄斧１ | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | ＳＫ２ | | | | |
| 73 | 51 | 広島市 | 東区 | 須賀谷２ | 丘頂 | 86m | 80m | 不整長円 | 14×10 | ５ｃ後半 | 2 | | 土坑 | 第１主体部 | A | | | 勾玉１・管玉１・ガラス製小玉78 |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | 第２主体部 | | | 刀子１ | 管玉１ |

| No. | 文献＊ | 所在地 | | 古墳名 | 立地 | 標高(m) | 比高 | 墳形 | 墳丘規模(直径，m) | 時期 | 埋葬施設＊＊ | | | | | | 副葬品 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | | 基数 | 従属 | 内容 | 名称 | 配列 | | 土器 | 鉄器 | その他 |
| 74 | 52 | 広島市 | 佐伯区 | 月見城ＳＴ2 | 丘陵斜面 | 72m | 20m | 方 | 6 | 5ｃ後半～6ｃ初頭 | 4 | | 土坑（木棺） | a主体部 | A | | | | 内行花文鏡片1・勾玉1 |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | b主体部 | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | c主体部 | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | d主体部 | | | | | |
| 75 | 52 | 広島市 | 佐伯区 | 月見城ＳＴ3 | 丘陵傾斜変換点 | 74m | 20m | | | 5ｃ後半～6ｃ初頭 | 3 | | 土坑（木棺） | a主体部 | C | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | b主体部 | | | | 刀子1 | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | c主体部 | | | | | |
| 76 | 52 | 広島市 | 佐伯区 | 月見城ＳＴ5 | 丘陵斜面 | 62m | 20m | 円 | 3＋ | 5ｃ後半～6ｃ初頭 | 2 | | 土坑（木棺） | a主体部 | A | | | 鉄剣1 | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | b主体部 | | | | | |
| 77 | 52 | 広島市 | 佐伯区 | 月見城ＳＴ6 | 丘陵斜面 | 58m | 20m | 方 | 7 | 5ｃ後半～6ｃ初頭 | 3 | | 土坑（木棺） | a主体部 | A | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | b主体部 | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑 | c主体部 | | | | | |
| 78 | 52 | 広島市 | 佐伯区 | 月見城ＳＴ7 | 丘陵斜面 | 56m | 16m | 方 | 9 | 5ｃ後半～6ｃ初頭 | 2 | | 土坑（木棺） | a主体部 | A | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | b主体部 | | | | | |
| 79 | 53 | 広島市 | 佐伯区 | 城ノ下3 | 丘頂 | 79m | 35m | 円 | 14.5 | 5ｃ中葉 | 2 | | 土坑（木棺） | A主体部 | A | | | 鏃状製品 | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | B主体部 | | | | 鉄鏃1 | |
| 80 | 53 | 広島市 | 佐伯区 | 城ノ下6 | 丘頂 | 80m | 35m | 方 | 10 | 古墳時代初頭 | 2 | | 土坑（木棺） | A主体部 | A | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | B主体部 | | | | | |
| 81 | 54 | 海田町 | 東海田 | 上安井 | 丘頂 | 80m | 50m | 不整円 | 15×13.5 | 4ｃ前半 | 2 | ○ | 竪穴式石室（割竹形木棺） | 埋葬施設1 | A | | 土師器（壺1・甕1） | 鉄剣1・鉇1・鉄鏃2・鉄斧1・鉄鎌1・鋤先1 | 管玉1・ガラス製小玉1 |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | 埋葬施設2 | | | | 刀子1 | |
| 82 | 55 | 呉市 | 蒲刈町 | 峠 | 丘陵端部 | 44m | 20m | 円 | 8 | 5ｃ前半 | 3 | | 箱式石棺（礫床） | 第1号箱式石棺 | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | 第2号箱式石棺 | C | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | 第1号土坑 | | | | | |
| 83 | 56～61 | 東広島市 | 西条町 | 三ツ城1 | 丘頂 | 237m | 10m | 前方後円 | 全長91 | 5ｃ後半～6ｃ初 | 3 | ○ | 竪穴式石槨（箱式石棺） | 1号棺 | B | | | 鉄刀2 | 珠文鏡1・勾玉1・管玉16 |
| | | | | | | | | | | | | ○ | 竪穴式石槨（箱式石棺・礫床） | 2号棺 | | | | 鉄刀1・刀子2 | 竪櫛4・銅釧1・勾玉・丸玉・翡玉 |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | 3号棺 | | | | 鉄剣2・鉄鏃80・鉄鉾1 | 勾玉・丸玉・滑石玉 |
| 84 | 62 | 東広島市 | 西条町 | 大槙3 | 丘陵端部 | 233m | 18m | 方 | | 5ｃ前半 | 2 | ○ | 箱式石棺（敷石） | 1号石棺 | C | | | 鉄剣1・鉄鏃3・鉄鎌1・鋤先1・刀子1 | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | 2号石棺 | | | | | |
| 85 | 63 | 東広島市 | 西条町 | 八幡山大池 | 丘頂 | 254m | 40m | | | 5ｃ中葉～後半 | 3 | | 箱式石棺 | 第1号箱式石棺 | B | | | 不明鉄器2 | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | 第2号箱式石棺 | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | 第3号箱式石棺 | | | | | |
| 86 | 64 | 東広島市 | 高屋町 | 才が迫1 | 丘頂 | 250m | 25m | 方 | 11.2×9.5 | 4ｃ初頭 | 2 | | 竪穴式石室（木棺） | 第1主体部 | A | | | 鉄剣1 | 銅鏃1・勾玉2・管玉15 |
| | | | | | | | | | | | | | 竪穴式石室（木棺） | 第2主体部 | | | | 鉄剣1・鉄槍1・鉄斧1・鑿1・不明鉄器1 | |
| 87 | 65 | 東広島市 | 高屋町 | 槇ヶ坪1 | 丘頂 | 247m | 15m | 長方 | 15×7 | 4ｃ後半 | 2 | | 箱式石棺 | 第1主体部 | C | | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 土坑 | 第2主体部 | | | | | |
| 88 | 66 | 東広島市 | 高屋町 | 槇ヶ坪3 | 丘頂 | 248m | 15m | 円 | 8 | 6ｃ | 3 | | 箱式石棺 | 第1主体部 | B | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | 第2主体部 | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | × | 箱式石棺 | 第3主体部 | | | | | |
| 89 | 67 | 東広島市 | 高屋町 | 鍵向山1 | 丘頂 | 247m | 20m | 円 | 8 | 5ｃ後半～6ｃ前半 | 2 | × | 箱式石棺 | 第1号箱式石棺 | C | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | 第2号箱式石棺 | | | | | |
| 90 | 68 | 東広島市 | 志和町 | 蛇迫1 | 丘陵端部 | 260m | 30m | 円 | 10 | 4ｃ末 | 3 | ○ | 粘土槨（割竹形木棺） | 第1主体部 | A | | | 刀子1 | ガラス製小玉1 |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | 第2主体部 | | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | 第3主体部 | | | | | |
| 91 | 69 | 東広島市 | 志和町 | 蛇迫3 | 丘頂 | 264m | 30m | 円 | 12 | 5ｃ前半 | 2 | | 土坑（木棺） | 第1主体部 | A | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 土坑（木棺） | 第2主体部 | | | | | |
| 92 | 70 | 東広島市 | 豊栄町 | 山王5 | 丘陵傾斜変換点 | 435m | 60m | 円 | 6 | | 2 | | 土坑 | ＳＫ1 | A | | | 鉄斧2 | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ＳＫ2 | | | | | |
| 93 | 70 | 東広島市 | 豊栄町 | 山王6 | 丘頂 | 433m | 60m | 円 | 15 | | 2 | | 粘土槨（割竹形木棺） | ＳＫ1 | A | | | | |
| | | | | | | | | | | | | | 箱式石棺 | ＳＫ2 | | | | | |

＊　・空欄はいずれも以下の年度に（財）広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴って発掘調査を実施した。
平成18年度＝No.5・9～11，平成19年度＝No.13～16・34・35，平成20年度＝No.30・39・40。

＊＊・「従属」＝○；優位性の高い中心的な埋葬施設，×；従属性の高い埋葬施設，無印；優位性・従属性を断定できない埋葬施設。
・「配列」＝墳頂部における埋葬施設の並び方。A；整然と並列するもの，A′；ほぼ並列するものの，やや斜めに並ぶもの，B；中心的な埋葬施設は並列するが，従属的な一部の埋葬施設が並列しないもの，C；埋葬施設が並列しないもの。

**第５表**　広島県内の主な須恵器副葬・供献古墳（横穴式石室古墳は除く）

| No. | 文献＊ | 所在地 | | 古墳名 | 時期 | 埋葬施設 | | 出土須恵器（一部，土師器を含む） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 内容 | 名称 | 類型** | 出土位置・状況 | 器種・個体数 |
| 1 | 本書 | 三次市 | 吉舎町 | **大番奥池２** | ６ｃ前半 | 土坑（木棺） | ＳＫ２ | C | 棺外（側辺・小口上層） | 杯蓋１・杯身３ |
| 2 | 本書 | 三次市 | 吉舎町 | **大番奥池３** | ６ｃ前半 | 土坑（木棺） | ＳＫ１ | B | 棺蓋上（中央） | 杯蓋１・杯身１ |
| | | | | | | 土坑（木棺） | ＳＫ２ | B | 棺蓋上（中央） | 杯蓋１・杯身１ |
| 3 | 1 | 三次市 | 吉舎町 | **燈東** | ６ｃ前半 | 土坑（木棺） | ＳＫ２ | B | 墓坑上面（北西小口）整然 | 杯蓋１・杯身３ |
| 94 | 71 | 三次市 | 吉舎町 | **寺津１** | ６ｃ中葉 | 土坑（木棺） | | C | 棺外（北小口底面） | 杯蓋２・杯身２ |
| | | | | | | | | B | 墓坑上面（南寄り西側辺） | 杯蓋１・杯身１ |
| | | | | | | | | Ｅａ | 墳頂部 | 杯蓋１・杯身１・坩１ |
| | | | | | | | | Ｅｂ | | 大甕１ |
| 95 | 71 | 三次市 | 吉舎町 | **寺津２** | ６ｃ前葉 | 土坑（木棺） | | C | 棺外（南側辺底面・横立て） | 杯蓋２・杯身２・高杯蓋１ |
| | | | | | | | | | 棺外（西小口中層～底面） | 高杯１・有蓋高杯１・壺１ |
| | | | | | | | | Ｅａ | 墳頂部 | 杯蓋１・杯身４・高杯１・高杯蓋１・短頸壺４・壺蓋４ほか |
| | | | | | | | | Ｅｂ | | 大甕１ |
| 96 | 72 | 三次市 | 向江田町 | **野稲南10** | ６ｃ前半 | 小型竪穴式石室 | | Ｅａ | 墳頂 | 坩１ |
| | | | | | | | | Ｅａ | 墳丘裾 | 杯蓋１・杯身１・壺１ |
| 12 | 5 | 三次市 | 向江田町 | **野稲南11** | ６ｃ前半 | 土坑２基 | | Ｅａ | 墳頂 | 坩１ |
| | | | | | | | | Ｅａ | 墳丘裾 | 杯蓋２・杯身２・坩蓋１・坩１・壺１，ほかに杯蓋１ |
| 18 | 7 | 三次市 | 南畑敷町 | **緑岩** | ６ｃ前半 | 竪穴式石室２基・土坑１基 | | Ｆａ | 周溝内（85×80cmの浅い坑内） | 土器群Ｄ＝杯蓋12・杯身12のセット |
| | | | | | | | | Ｆｂ主 | 周溝内全体 | 杯蓋13・杯身16・高杯２～３・壺１・有蓋短頸壺４・甕２他 |
| 21 | 10 | 三次市 | 西酒屋町 | **大坂６** | ６ｃ中葉 | 土坑（木棺） | 第２主体部 | C | 棺外両小口底面 | 杯蓋７・杯身７・坩蓋１・坩１・提瓶１ |
| 97 | 73 | 三次市 | 東酒屋町 | **天狗松南６** | ６ｃ中葉 | 不明 | | Ｅａ | 墳頂部 | 杯身１ |
| 98 | 74 | 三次市 | 四拾貫町 | **四拾貫小原４** | ５ｃ前半 | 不明 | | Ｆａ | 周溝内 | 杯身２ |
| 99 | 75 | 三次市 | 四拾貫町 | **四拾貫小原17** | ５ｃ末 | 不明 | | Ｆａ | 周溝内 | 杯蓋３・杯身１・壺１・甕１ |
| 100 | 11 | 三次市 | 四拾貫町 | **上四拾貫５** | ５ｃ後半 | 不明 | | Ｅａ | 墳丘上 | 杯蓋１・杯身２ |
| 28 | 16 | 三次市 | 三良坂町 | **植松１** | ６ｃ前半 | 土坑 | Ｂ主体 | C | 坑底西小口 | 杯蓋１・杯身１・壺１ |
| 101 | 76 | 庄原市 | 市町 | **一の谷６** | ６ｃ中葉 | 土坑（木棺か） | | Ａ？ | 棺内？（坑底上10cm前後） | 杯蓋１・杯身１ |
| 35 | | 庄原市 | 口和町 | **稲干場４** | ６ｃ前半 | 土坑３基 | | F | 周溝内の土坑 | 杯蓋・杯身・壺 |
| 102 | 77 | 庄原市 | 東城町 | **犬塚３** | ６ｃ中葉 | 石蓋土坑 | | B | 蓋石下（上段墓坑内） | 杯蓋１・杯身１ |
| 103 | 78 | 庄原市 | 東城町 | **犬塚４** | ６ｃ中葉 | 土坑 | | C | 坑内底面（側壁際中央） | 杯蓋１・杯身１ |
| 104 | 79 | 庄原市 | 東城町 | **川東大仙山11** | ６ｃ前半 | 土坑 | | B | 土坑被覆粘土内 | 杯蓋１・杯身１ |
| 105 | 80 | 福山市 | 加茂町 | **吹越２** | ６ｃ前半 | 土坑（木棺） | | B | 棺外（両小口上面） | 杯蓋４・杯身３・高杯１ |
| 106 | 81 | 安芸高田市 | 美土里町 | **向井** | ６ｃ前半 | 竪穴式石室(箱式石棺状) | | Bか | 石室埋土面上か | 杯蓋３・杯身２ |
| 107 | 82 | 安芸高田市 | 美土里町 | **宮谷** | ６ｃ中葉 | 竪穴式石室(箱式石棺状) | | B | 石室北小口東側壁上面（蓋石横） | 杯身２・椀１ |
| 108 | 39 | 安芸高田市 | 八千代町 | **新宮７** | ５ｃ末～６ｃ初 | 不明 | | Ｅａ | 墳丘 | 杯蓋２ |
| | | | | | | | | Ｆａ | 周溝内 | 杯蓋１・甕１ |
| 109 | 83 | 北広島町 | 千代田 | **古保利44** | ６ｃ初頭 | 竪穴式石室(箱式石棺状) | | B | 石室外・西小口壁上（整然） | 杯蓋９・杯身９・高杯１・坩蓋１・坩１・壺１ |
| 110 | 84 | 広島市 | 安佐南区 | **寺山５** | ６ｃ前葉 | 土坑（木棺） | | Ｆｂ | 周溝内（２か所以上） | 17個体以上（杯蓋５・杯身４・壺１・提瓶１・大甕１など） |
| 111 | 85 | 広島市 | 安佐南区 | **池の内３** | ４ｃ末～５ｃ初 | 竪穴式石室（割竹形木棺） | Ａ主体 | B | 主体部上面（現存部上10cm） | 把手付短頸壺（加耶系陶質土器）１ |
| 69 | 47 | 広島市 | 安佐北区 | **鯖木** | ５ｃ中葉 | 土坑（木槨・礫床・木棺） | 第１主体部 | B | 掘方上面（木槨蓋上か） | 壺１ |
| 112 | 86 | 広島市 | 安佐北区 | **弘住４** | ６ｃ前半 | 箱式石棺 | | B | 南側石中央上面（蓋石との間） | 杯蓋１ |

| No. | 文献* | 所在地 | | 古墳名 | 時期 | 埋葬施設 | | 出土須恵器（一部，土師器を含む） | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 内容 | 名称 | 類型** | 出土位置・状況 | 器種・個体数 |
| 71 | 49 | 広島市 | 安佐北区 | 立石 | 6c前半 | 箱式石棺3基 | | G | 周溝外側の肩 | 杯蓋2 |
| 113 | 52 | 広島市 | 佐伯区 | 月見城ST8 | 5c後半 | 土坑 | | Fa | 周溝内の小土坑から一括 | 杯蓋3・杯身1・直口壺1 |
| 81 | 54 | 海田町 | 東海田 | 上安井 | 6c前半 | 土坑（木棺） | 埋葬施設3 | B | 棺外（棺上・西小口） | 杯蓋2（赤色顔料塗布1）・杯身1 |
| 114 | 66 | 東広島市 | 高屋町 | 槇ヶ坪4 | 6c後半 | 小型竪穴式石室 | | Fa | 周溝内（浮く） | 杯身1・甕2 |
| 115 | 66 | 東広島市 | 高屋町 | 槇ヶ坪6 | 6c前半 | 土坑（木棺） | | Fa | 周溝内（底面） | 杯蓋1・杯身1・甕1 |
| 116 | 87 | 東広島市 | 高屋町 | 鍵向山2 | 6c前半 | 箱式石棺 | | Eb | 墳丘裾に故意に破砕状態 | 杯蓋1・杯身2・壺1 |
| 117 | 88 | 東広島市 | 福富町 | 金口1 | 6c初～半ば | 箱式石棺 | | Fa | 周溝内 | 杯蓋1・杯身2 |
| 118 | 89 | 東広島市 | 福富町 | 金口2 | | 石蓋土坑 | | Fa | 周溝内 | 杯身1 |
| 119 | 90 | 東広島市 | 福富町 | 金口3 | | 箱式石棺 | | Fa | 周溝内 | 杯蓋1・杯身1 |
| 120 | 91 | 東広島市 | 福富町 | 金口4 | | 箱式石棺 | | Fa | 周溝内 | 杯蓋1ほか |
| 121 | 92 | 東広島市 | 福富町 | 金口7 | | 箱式石棺 | | Fbか | 周溝内 | 杯蓋1ほか |

＊　・空欄はいずれも以下の年度に（財）広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴って発掘調査を実施した。
平成18年度＝No.9～11，平成19年度＝No.5・13～16・34～35，平成20年度＝No.30・39・40。

＊＊・「類型」；棺内A，棺外（棺上面）B，棺外（側辺～小口裏込め部分，墓坑内）C，埋葬施設周辺（主に墓坑周辺）D，墳丘上面E，周溝内F，その他G。
（なお，E・Fにおいて，a＝完形・ほぼ完形状態で出土，b＝破砕状態で出土。）
A＝1，B＝14，C＝6，D＝0，Ea＝9，Eb＝3，Fa＝11，Fb＝3，F＝1，G＝1。
分析対象古墳計39基（計49事例，なお類型A～Dの事例の埋葬施設数は計20施設）。

**第６表**　広島県内の主な鉄鏃副葬古墳（横穴式石室古墳及び埋葬施設以外からの出土は除く）

| No. | 文献 | 所在地 | | 古墳名 | 時期 | 埋葬施設 | | 出土鉄鏃*** | | | | | | 束**** | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 内容** | 名称 | 類型 | 出土位置・状況 | 形式・個体数 | 頭位 | 切先 | 軸 | 数 | 本数 |
| 1 | 本書 | 三次市 | 吉舎町 | **大番奥池２** | ６ｃ前半 | 土坑（木棺） | ＳＫ１ | C | 棺外（北側辺上層） | 腸抉三角形２，三角形（類五角形）１ | 東 | ○ | 縦 | | |
| 2 | 本書 | 三次市 | 吉舎町 | **大番奥池３** | ６ｃ前半 | 土坑 | ＳＫ４ | G | 坑内底面（北隅） | 長頸・腸抉三角形２，長頸・三角形２ | | (東) | 横 | | |
| 122 | 本書 | 三次市 | 吉舎町 | **大番奥池７** | ６ｃ前半 | 土坑 | ＳＫ１ | G | 坑内底面（中央） | 長頸・腸抉三角形２，頸茎部片５ | | | | | |
| 13 | * | 三次市 | 向江田町 | **宮の本21** | ５ｃ | 箱式石棺（礫床） | ＳＫ１ | B | 棺外（蓋石東小口北側） | 圭頭・斧箭１ | 東 | | | | |
| 123 | 93 | 三次市 | 大田幸町 | **上定25** | ５ｃ末～６ｃ初 | 竪穴式石室 | | C | 石室内（底面・東小口寄り） | 長頸・片刃１，同・長三角形１，頸茎部片１ | 東 | ○ | 縦 | | |
| 124 | 94 | 三次市 | 畠敷町 | **太郎丸** | | 竪穴式石室（礫床） | | C | 石室内（東小口） | 柳葉形38 | | | | | |
| 20 | 9 | 三次市 | 西酒屋町 | **酒屋高塚** | ５ｃ後半 | 竪穴式石室 | 第１号主体 | G | 石室内（浮遊遺物） | 短茎・三角形（重抉）２，長頸・片小爪片逆刺１，茎部片１ | | | | | |
| 23 | 12 | 三次市 | 四拾貫町 | **四拾貫小原１** | ５ｃ前半 | 粘土槨（割竹形木棺） | Ｃ主体 | B | 棺外（棺上・北西小口寄り） | 短茎・長三角形（柳葉状・重抉）１，長頸・長三角形23 | | (北西) | 縦 | 2 | 10 |
| 125 | 13 | 三次市 | 四拾貫町 | **上四拾貫６** | ５ｃ後半 | 土坑（木棺） | | A | 棺内（西小口棺底） | 短茎・長三角形２，頸茎部片20 | 東 | △ | 縦・横 | | |
| 24 | 13 | 三次市 | 四拾貫町 | **上四拾貫10** | ６ｃ前半 | 箱式石棺 | Ｂ主体 | C | 棺外（北側辺・側石上） | 腸抉三角形１，短茎・長三角形（重抉・有孔）１ | 東 | △ | 縦・横 | | |
| 126 | 95 | 三次市 | 三良坂町 | **寺山１** | ６ｃ前半～中頃 | 土坑（木棺か） | | G | 東小口近く底面 | 長頸・片刃５，頸茎部片３ | | | 縦 | | |
| 127 | 96 | 庄原市 | 板橋町 | **大風呂** | ５ｃ末～６ｃ初 | 土坑（木棺） | | C | 棺外（底面・東側壁寄り中央） | 柳葉形２，片刃１，頸茎部片３ | 南 | | 縦・横 | | |
| 101 | 76 | 庄原市 | 市町 | **一の谷６** | ６ｃ中葉 | 土坑（木棺か） | | C | 棺外（南側壁際中央ほぼ底面） | 長頸・柳葉形２，長頸・三角形１，頸茎部片６ | | (東) | 縦・横 | | |
| 128 | 97 | 庄原市 | 東城町 | **大迫山１** | ４ｃ中葉 | 竪穴式石室（粘土床・木棺） | | C | 棺外（粘土床北側辺肩） | 圭頭（類銅鏃・定角式）28（矢筒２） | 北西 | | 縦 | ○ | |
| 129 | 98 | 庄原市 | 東城町 | **犬塚２** | ５ｃ末～６ｃ初 | 土坑（木棺） | | A | 棺内（底面中央）切先東小口 | 腸抉三角形２，三角形（斜行頸）１ | | (東) | 縦 | | |
| 130 | 99 | 府中市 | 栗柄町 | **寺山１** | ５ｃ | 箱式石棺＊女・成年 | | A | 棺内（東小口近く南側壁際・床面） | 長頸・三角形２ | 西 | △ | 縦 | | |
| 43 | 24 | 府中市 | 元町 | **山の神４** | ４ｃ後半 | 箱式石棺＊女・壮年 | 第１主体部 | A | 棺内（左上腕付近・床面） | 柳葉形１ | 東 | ○ | 縦 | | |
| 131 | 100 | 福山市 | 新市町 | **城山２** | 古墳時代初頭 | 土坑＊男人骨 | | G | 坑内（南小口10cm浮く） | 短茎・腸抉長三角形２ | | | 縦 | | |
| 45 | 26 | 福山市 | 新市町 | **城山４** | 古墳時代初頭 | 土坑（木棺）＊男・熟年 | 第１主体 | A | 棺内（北小口＝頭位棺底） | 三角形か１ | 北 | | 横か | | |
| 50 | 29 | 福山市 | 駅家町 | **石鎚権現３** | ５ｃ後半～６ｃ前半 | 土坑（木棺） | 第２号主体 | B | 棺外（棺蓋上か） | 茎部片１ | | | | | |
| 135 | 105 | 福山市 | 駅家町 | **石鎚権現５** | ５ｃ前半 | 礫槨（木棺） | | A | 棺内（床面２か所）－６点 | 柳葉形（斜行頸）６，方頭・鑿頭１ | 北 | | | | |
| | | | | | | | | C | 墓坑底面－１点 | | | | | | |
| 53 | 32 | 福山市 | 駅家町 | **長迫２** | ４ｃ後半 | 土坑（木棺） | １号主体部 | Cか | 棺外か（坑底・南側辺際） | 柳葉形２ | 東 | △ | 縦 | | |
| 54 | 33 | 福山市 | 駅家町 | **法成寺本谷** | ４ｃ | 土坑（木棺） | ＳＫ１ | C | 棺外（底面・北東小口寄り中央） | 腸抉三角形３ | 北東 | | | | |
| 57 | 36 | 福山市 | 加茂町 | **石鎚山１** | ４ｃ後半 | 竪穴式石室（割竹形木棺） | 第１号主体部 | D | 墓坑外北50cm | 圭頭（類銅鏃・定角式）14 | 北東 | ○３・△１・東10 | | | |
| | | | | | | 竪穴式石室（割竹形木棺） | 第２号主体部 | Aか | 棺内か（礫床上・西側辺寄り中央） | 圭頭（類銅鏃・定角式）20，方頭（類銅鏃・鑿頭）４，柳葉形３ | 北 | | 縦・横 | | |
| 105 | 80 | 福山市 | 加茂町 | **吹越２** | ６ｃ前半 | 土坑（木棺） | | B | 棺外（棺上・東小口寄り／西小口外） | 長頸・片小爪片逆刺（互小爪鑿箭式）13，腸抉長三角形１，長三角形（斜行頸）１ | 西 | △ | 縦 | | |
| 132 | 101 | 福山市 | 加茂町 | **吹越５** | ５ｃ前葉 | 土坑（木棺） | | Cか | 棺外か（坑底・南小口西側辺際） | 柳葉形５ | | (南) | 縦 | | |
| 133 | 102 | 福山市 | 神辺町 | **道上３** | 古墳時代前期古段階 | 土坑＊歯２体分 | | G | 坑底・東側辺中央 | 短茎・腸抉三角形１，無茎・三角形（有孔）１ | 北か | ○か | 縦 | | |
| 134 | 103・104 | 福山市 | 神辺町 | **亀山１** | ５ｃ前半 | 粘土槨（割竹形木棺） | | A | 棺内（西小口側・床面） | 150本程度（腸抉柳葉形・片刃・無茎腸抉五角形・柳葉形など） | 東 | △(○１) | 縦 | 1 | 150 |
| 106 | 81 | 安芸高田市 | 美土里町 | **向井** | ６ｃ前半 | 小型竪穴式石室（敷石） | | C | 石室内棺外（底面・両側壁際中央） | 腸抉三角形２，長頸・長三角形３ | 北 | | 縦 | | |
| 137 | 107 | 北広島町 | 千代田 | **金子２** | ５～６ｃ | 小型竪穴式石室（敷炭片） | | C | 石室内棺外（底面・北側壁際中央） | 腸抉三角形１，長頸・片刃を主に13，頸茎部片４＋ | | | 縦 | | |
| 138 | 108 | 北広島町 | 千代田 | **中出勝負峠１** | ５～６ｃ | 竪穴式石室（敷石）＊人骨２（男・熟年，？・壮年） | | C | 石室内底面（西小口寄り南側壁際） | 腸抉柳葉形３，腸抉三角形１，頸茎部片１ | 西 | | 縦 | | |
| 139 | 108 | 北広島町 | 千代田 | **中出勝負峠８** | ４ｃ | 土坑（木棺） | ＳＫ８－１ | A | 棺内床面（両側辺際中央） | 圭頭（類銅鏃・定角式）６，柳葉形５，茎部片１ | 北か | | 縦・横 | | |
| 140 | 109 | 広島市 | 東区 | **禅昌寺西** | ５ｃ前半 | 箱式石棺 | Ａ主体 | B | 棺外（棺上・北小口側石上面） | 無茎・腸抉三角形（類銅鏃）１ | 北 | (西) | 横 | | |
| | | | | | ５ｃ後半 | 土坑（木棺） | Ｃ主体 | C | 棺外（底面・東側辺際中央） | 長頸・三角形６，同・三角形(片逆刺)１，同・五角形３，同・片刃１，頸茎部片２ | 北 | | 縦 | | |

| No. | 文献 | 所在地 | | 古墳名 | 時期 | 埋葬施設 | | 出土鉄鏃*** | | | | | | 束**** | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | 内容** | 名称 | 類型 | 出土位置・状況 | 形式・個体数 | 頭位 | 切先 | 軸 | 数 | 本数 |
| 65 | 43 | 広島市 | 安佐南区 | 権地 | 5C | 箱式石棺 | B主体 | B | 棺外（西小口蓋石横3か所） | 長頸・片刃11，同・柳葉形7，無茎・腸抉三角形2 | 東 | △ | 縦 | 2 | 9～11 |
| 141 | 84 | 広島市 | 安佐南区 | 寺山3 | 5c後半 | 竪穴式石槨（敷石） | | B | 棺外槨内（棺上・西小口付近） | 長頸・片刃1，頸茎部片11＋ | 東 | | 縦・横 | | |
| 142 | 85 | 広島市 | 安佐南区 | 池の内5 | 5c末～6c初 | 不明（敷石） | | G | 不明 | 長頸・片刃5，頸茎部片3 | | | | ○? | |
| 66 | 44 | 広島市 | 安佐北区 | 大明地2 | 5c前半 | 土坑（木棺） | 1号主体部 | B | 棺外（棺上・東小口寄り南側辺際） | 長頸・柳葉形1，長頸・腸抉三角形／片刃19 | 東か | ○ | 縦 | 1 | 20 |
| 68 | 46 | 広島市 | 安佐北区 | 虹山 | 5c前半～中葉 | 土坑（割竹形木棺） | 1号主体 | A | 棺内（床面・南小口寄り中央） | 柳葉形1，圭頭・斧箭1，長頸・三角形1，頸茎部片5 | 北西 | △ | 横 | | |
| 70 | 48 | 広島市 | 安佐北区 | 大久保 | 5c後半 | 土坑（割竹形木棺・礫床） | 2号主体部 | A | 棺内（礫床上・東小口側） | 柳葉形2，頸茎部片2 | | | 縦 | | |
| 143 | 110 | 広島市 | 安佐北区 | 地蔵山堂1 | 5c中葉～後半 | 土坑（木棺） | | B | 棺外（棺上・北側辺際中央） | 短茎・腸抉三角形（重抉）1 | | （北） | 斜め | | |
| 144 | 110 | 広島市 | 安佐北区 | 地蔵山堂2 | 5c中葉 | 竪穴式石室（割竹形木棺か） | | C | 石室内棺外（西小口寄り北側辺肩） | 短茎・腸抉三角形1，長頸・片刃1，頸茎部片8 | | | | | |
| 145 | 111 | 広島市 | 安佐北区 | 山手1 | 5c | 土坑（礫床・木棺） | | C | 棺外（北側辺中央） | 雁股1 | | | | | |
| 146 | 111 | 広島市 | 安佐北区 | 山手3 | 古墳時代中期 | 土坑（木棺か） | | B | 棺外（中層・東側辺際中央） | 雁股2 | 南 | ○ | 縦 | | |
| 147 | 112 | 広島市 | 安佐北区 | 弘住3 | 5c後葉～6c前葉 | 竪穴式石室（礫床・木棺） | | A | 棺内（底面・南側壁寄り中央ほか） | 無茎・五角形（大型・透孔・重抉）1，柳葉形4，腸抉柳葉形(類銅鏃）26 | 東 | ○△ほか | 縦・横 | ○ | 14?×2 |
| 148 | 113 | 広島市 | 安佐北区 | 中小田2 | 5c後半 | 竪穴式石室（礫床・木棺） | | C | 石室内棺外（①北東隅，②北西隅，③南東隅・南西隅のやや北寄りの両側壁際） | ①主・②一部＝長頸・片刃片逆刺36，腸抉長三角形＋長三角形43，③＝無茎・腸抉長三角形4 | 北 | ○①②△③ | 縦 | ①○ | |
| 149 | 53 | 広島市 | 佐伯区 | 城ノ下1 | 5c中葉 | 土坑（割竹形木棺） | | B | 棺外（東小口寄り南側辺肩） | 長頸・片刃片逆刺1，長頸・片刃1＋ | 東 | △ | 縦 | | |
| | | | | | | | | | 棺外（棺上・西小口寄り） | 長頸・三角形を主に一部長頸・片刃など81＋ | | | | 3 | 23～30 |
| 79 | 53 | 広島市 | 佐伯区 | 城ノ下3 | 5c中葉 | 土坑（木棺） | B主体部 | B | 棺外（棺上・北東小口寄り） | 柳葉形1 | 南西 | | 斜め | | |
| 150 | 114 | 広島市 | 安芸区 | 成岡3 | 古墳時代初頭 | 土坑（木槨・割竹形木棺か） | 第1主体 | C | 棺外槨内（北西側辺中央） | 圭頭・斧箭1，柳葉形1 | | | | | |
| | | | | | | | | Bか | 棺外（棺上・南西小口寄り南東側辺） | 柳葉形（細身・「骨鏃形」半島由来）19 | | | | 2 | 19 |
| 81 | 54 | 海田町 | 東海田 | 上安井 | 4c前半 | 竪穴式石室（割竹形木棺） | 埋葬施設1 | C | 石室内棺外（北小口寄り西側壁際底面） | 柳葉形2 | 北 | ○ | 縦 | | |
| 151 | 115 | 東広島市 | 西条町 | 狐が城 | 6c後半 | 竪穴式石室 | | A | 棺内（床面中央） | 三角形1，圭頭1，方頭1，腸抉三角形1，長頸・長三角形3，同・柳葉形4，茎部片1 | | | 縦 | | |
| 152 | 116 | 東広島市 | 西条町 | 古市 | 6c後半 | 竪穴式石室 | | C | 棺外石室内（北西隅・床面） | 三角形1，三角形（斜行頸）2，腸抉三角形2，圭頭・斧箭1，茎部片1 | 西か | ○ | 縦 | | |
| 83 | 56～61 | 東広島市 | 西条町 | 三ツ城1 | 5c後半～6c初 | 箱式石棺（敷石） | 3号棺 | A | 棺内（南西半・敷石上） | 短茎・三角形（重抉）1 | | ○(北西) | 縦 | | |
| | | | | | | | | C | 棺外（墓坑底面埋納坑内） | 短茎・三角形（重抉）9，短茎・五角形1，長頸・柳葉形69 | 南西 | △(南東) | | 4 | 15～20 |
| 84 | 62 | 東広島市 | 西条町 | 大槇3 | 5c前半 | 箱式石棺（敷石） | 1号石棺 | A | 棺内（床面・東小口寄り） | 柳葉形3 | 西 | ○か | 縦 | | |
| 85 | 63 | 東広島市 | 西条町 | 八幡山大池 | 5c中葉～後半 | 箱式石棺 | 第1号箱式石棺 | B | 棺外（北側石上面・東小口蓋石下） | 長頸・片刃1 | 東 | | 縦 | | |
| 153 | 117 | 東広島市 | 高屋町 | 豆ヶ崎 | 6c前半～中葉 | 竪穴式石室（箱式石棺状） | | B | 室外（墓坑上面・天井石下面） | 三角形2 | | 南西 | 縦 | | |
| 154 | 118 | 東広島市 | 高屋町 | 森倡10 | 6c初～前半 | 竪穴式石室（箱式石棺状） | | C | 棺外石室内（北側壁際中央・床面） | 長頸・長三角形1，同・腸抉三角形1 | 東 | ○ | 縦 | | |

＊　・平成19年度に（財）広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴って発掘調査を実施した。

＊＊　・「埋葬施設・内容」の＊以下は出土人骨の性別・推定年齢を示す。
出土人骨の年齢＝小児；6～15才，成年；16～20才，壮年；20～39才，熟年；40～59才
（谷畑美帆・鈴木隆雄『考古学のための古人骨調査マニュアル』学生社　2004年，による。）

＊＊＊　・「類型」＝棺内A，棺外（棺上面）B，棺外（側辺～小口裏込め部分，墓坑内）C，埋葬施設周辺（主に墓坑周辺）D，その他・不明G。
A＝15，B＝15，C＝23，D＝1，G＝7。分析対象古墳計56基（埋葬施設計58施設・計61事例）。
・「形式」＝鉄鏃の分類・形式等については主に次の論文を参考にした。なお，無茎・短茎・長頸・圭頭鏃群は形式と鏃身形を併記し，そのほかの一般的な有茎鏃群に含まれる鉄鏃については，原則として鏃身形のみを記した（数値は出土点数）。
（杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第八　吉川弘文館　1988年）
・「頭位」＝埋葬施設の頭位。
・「切先」＝出土鉄鏃の切先の指す方向。○；頭位，△；足位。
・「軸」＝鉄鏃軸線が埋葬施設長軸に沿うもの＝縦，直交するもの＝横。

＊＊＊＊　・「束」＝束状態で出土した鉄鏃の束の数及び1束あたりの鉄鏃の本数。○は本数が不明のもの。

**文献**


1　吉舎町教育委員会『燎東古墳』 1995年
2　財団法人広島県教育事業団「権現第２号古墳」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(10) 2010年
3　財団法人広島県教育事業団「権現第３号古墳」『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(10) 2010年
4　三次市教育委員会「下山手第４号古墳」『下山手第４・５号古墳』 1994年
5　三次市教育委員会「第11号古墳」『野稲南第８～11号古墳』 2004年
6　花園古墳群発掘調査団『花園古墳群』 1976年
7　広島県教育委員会「緑岩古墳」『緑岩古墳』 1983年
8　三次市教育委員会『掛原下第７号古墳』 2002年
9　広島県教育委員会『酒屋高塚古墳』 1983年
10　大坂遺跡発掘調査団『大坂遺跡』 1985年
11　三次市「寄貞古墳群」『三次市史』Ⅱ遺跡・山城編　2004年
12　四拾貫小原発掘調査団「第１号古墳」『四拾貫小原』 1969年
13　広島県教育委員会「上四拾貫古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(１) 1978年
14　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『五反田第１・２号古墳発掘調査報告書』 1985年
15　広島県教育委員会「鞍ヶ谷北古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(２) 1979年
16　河瀬正利・向田裕始「双三郡三良坂町植松第１号古墳発掘調査報告」『芸備』第３集　芸備友の会　1975年
17　三良坂町教育委員会『杉谷第９号古墳』 1999年
18　広島県教育委員会　(財) 広島県埋蔵文化財調査センター「西ケ迫第11号古墳」『西ケ迫古墳群』 1983年
19　広島県教育委員会「月貞寺古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(１) 1978年
20　広島大学文学部考古学研究室「中央山第１号古墳」『中央山古墳群の発掘調査』 1978年
21　広島大学文学部考古学研究室「中央山第２号古墳」『中央山古墳群の発掘調査』 1978年
22　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「川東大仙山第10号古墳」『川東大仙山第10・11号古墳』 1994年
23　府中市教育委員会『山ノ神１号古墳発掘調査報告』 1983年
24　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「山の神遺跡群」『山の神遺跡群・池ノ迫遺跡群』 1998年
25　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「城山Ｂ遺跡」『城山』 1996年
26　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「城山Ａ遺跡」『城山』 1996年
27　広島県教育委員会「才谷遺跡群」『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1976年
28　広島県立埋蔵文化財センター『石鎚権現第２号古墳発掘調査報告』 1984年
29　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚権現第３号古墳」『石鎚権現遺跡群・茜ヶ峠遺跡発掘調査報告』 1985年
30　広島県教育委員会『石鎚権現古墳群発掘調査報告－第６・７・８号古墳－』 1981年
31　広島県教育委員会『石鎚権現古墳群発掘調査報告（第９・10号古墳)』 1982年
32　広島県教育委員会　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『長迫遺跡発掘調査報告』 1982年
33　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「法成寺本谷古墳」『法成寺サコ遺跡　法成寺本谷古墳』 1998年
34　掛迫古墳調査団「備後掛迫古墳」『芸備文化』第５．６合併号　1956年
35　財団法人広島県教育事業団「道上第２号古墳」『道上第２・３・５号古墳，門前２号遺跡』 2004年
36　広島県教育委員会　(財) 広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚山第１号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
37　広島県教育委員会　(財) 広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚山第２号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
38　広島県教育委員会　(財) 広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第８号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
39　八千代町教育委員会『新宮遺跡群発掘調査報告書』 2000年
40　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「宮城古墳群」『中国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅱ) 1993年
41　広島県教育委員会「塚迫遺跡群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(３) 1982年
42　広島県教育委員会「横路小谷古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(３) 1982年
43　広島市教育委員会「権地遺跡」『九郎杖遺跡　権地遺跡発掘調査報告』 1984年
44　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大明地遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅳ) 1987年
45　広島市教育委員会　広島大学文学部考古学研究室「中小田第９号古墳」『中小田古墳群』 1980年
46　虹山古墳発掘調査団『虹山古墳発掘調査報告』 1989年
47　広島県教育委員会「諸木古墳」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
48　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大久保古墳」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(Ⅳ) 1987年
49　立石古墳発掘調査団『立石古墳発掘調査報告』 1978年
50　広島県教育委員会　株式会社アコード「可部寺山第５号古墳」『可部寺山第５号古墳・可部寺山２号遺跡発掘調査報告書』 2004年
51　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「須賀谷古墳群」『須賀谷古墳群・畳谷東遺跡発掘調査報告書』 1985年
52　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「月見城遺跡」『月見城遺跡』 1987年
53　財団法人広島市歴史科学教育事業団「城ノ下古墳群」『城ノ下Ａ地点遺跡発掘調査報告』 1991年
54　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『上安井古墳発掘調査報告書』 2001年
55　峠古墳発掘調査団『峠古墳発掘調査報告書』 1979年
56　広島県教育委員会『三ツ城古墳』 1954年
57　東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳－保存整備事業第１年次発掘調査概報－』 1990年
58　東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳－保存整備事業第２年次発掘調査概報－』 1989年
59　東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳－保存整備事業第３年次発掘調査概報－』 1990年
60　東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳－保存整備事業第４年次発掘調査概報－』 1991年
61　東広島市教育委員会『史跡三ツ城古墳－保存整備事業第５年次発掘調査概報－』 1991年
62　建設省中国地方建設局広島国道工事事務所　財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大槙第３号古墳」『大

槙遺跡群』 1985年
63 広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「八幡山大池古墳」『道照遺跡』 1982年
64 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「才が迫古墳群」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(IX) 1993年
65 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『槙ヶ坪３号遺跡（Ｂ地区)』 1988年
66 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「槇ケ坪３号遺跡（Ａ地区)」『東広島ニュータウン遺跡群』(Ⅰ) 1990年
67 広島県教育委員会「鍵向山第１号古墳」『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』 1975年
68 財団法人東広島市教育文化振興事業団「蛇迫第１号古墳」『蛇迫第１～４号古墳・蛇迫遺跡発掘調査報告書』 2005年
69 財団法人東広島市教育文化振興事業団「蛇迫第３号古墳」『蛇迫第１～４号古墳・蛇迫遺跡発掘調査報告書』 2005年
70 豊栄町教育委員会『山王４・５・６号古墳』 1994年
71 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺津古墳群」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(Ⅰ) 1994年
72 三次市教育委員会「第10号古墳」『野稲南第８～11号古墳』 2004年
73 広島県教育委員会「天狗松南第６号古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(１) 1978年
74 四拾貫小原発掘調査団「第４号古墳」『四拾貫小原』 1969年
75 広島県教育委員会 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター「四拾貫小原第17号古墳」『下山遺跡群発掘調査報告』 1980年
76 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「第６号古墳」『一の谷第６・７号古墳』 1998年
77 犬塚古墳群発掘調査団「犬塚第３号古墳」『犬塚古墳群発掘調査報告書』 1980年
78 犬塚古墳群発掘調査団「犬塚第４号古墳」『犬塚古墳群発掘調査報告書』 1980年
79 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「川東大仙山第11号古墳」『川東大仙山第10・11号古墳』 1994年
80 広島県教育委員会 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第２号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
81 広島県教育委員会「向井古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(３) 1982年
82 広島県教育委員会「宮谷古墳」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(３) 1982年
83 龍岩・古保利埋蔵文化財発掘調査団「古保利第44号古墳」『龍岩・古保利・上春木埋蔵文化財発掘調査報告書』 1976年
84 財団法人広島市歴史科学教育事業団『寺山遺跡発掘調査報告』 1997年
85 広島市教育委員会『池の内遺跡発掘調査報告』 1985年
86 広島市教育委員会「第４号古墳」『弘住遺跡発掘調査報告』 1983年
87 広島県教育委員会「鍵向山第２号古墳」『賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告』 1975年
88 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第１号古墳」『金口古墳群』 1997年
89 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第２号古墳」『金口古墳群』 1997年
90 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第３号古墳」『金口古墳群』 1997年
91 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第４号古墳」『金口古墳群』 1997年
92 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第７号古墳」『金口古墳群』 1997年
93 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「上定古墳群の調査」『大判・上定・殿山』 1987年
94 本村豪章「備後三次市太郎丸古墳調査報告」『古代吉備』第４集 1961年
95 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺山第１～４号古墳」『灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』(Ⅴ) 2003年
96 広島県教育委員会『大風呂古墳発掘調査概報』 1976年
97 広島県東城町教育委員会 広島大学文学部考古学研究室『広島県比婆郡東城町 大迫山第１号古墳発掘調査概報』 1989年
98 犬塚古墳群発掘調査団「犬塚第２号古墳」『犬塚古墳群発掘調査報告書』 1980年
99 寺山遺跡発掘調査団「寺山１号古墳」『寺山遺跡発掘調査報告』 1979年
100 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「城山Ｂ遺跡」『城山』 1996年
101 広島県教育委員会 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第５号古墳」『石鎚山古墳群』 1981年
102 財団法人広島県教育事業団「道上第３号古墳」『道上第２・３・５号古墳，門前２号遺跡』 2004年
103 広島県教育委員会『亀山遺跡－第１次発掘調査概報－』 1982年
104 広島県教育委員会『亀山遺跡－第２次発掘調査概報－』 1982年
105 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚権現第５号古墳の調査」『石鎚権現遺跡群発掘調査報告』 1981年
106 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「みたち第２号古墳」『みたち第２・３号古墳』 2004年
107 広島県教育委員会「金子古墳群」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(３) 1982年
108 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「中出勝負峠墳墓群」『歳ノ神遺跡群 中出勝負峠墳墓群』 1986年
109 禅昌寺西遺跡発掘調査団『禅昌寺西遺跡発掘調査報告』 1980年
110 広島県教育委員会「地蔵堂山古墳群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
111 広島県教育委員会「山手遺跡群」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1977年
112 広島市教育委員会「第３号古墳」『弘住遺跡発掘調査報告』 1983年
113 広島市教育委員会 広島大学文学部考古学研究室「中小田第２号古墳」『中小田古墳群』 1980年
114 財団法人広島市文化財団『成岡Ａ地点遺跡』 2001年
115 広島市教育委員会「狐が城古墳」『岡谷遺跡 狐が城古墳発掘調査報告』 1985年
116 広島県教育委員会 (財) 広島県埋蔵文化財調査センター「古市古墳」『西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』(１) 1983年
117 広島県教育委員会 広島県開発局「豊ヶ崎古墳」『賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報』 1972年
118 東広島市教育委員会『森信第10号古墳発掘調査報告書』 1990年

# V まとめ

大番奥池古墳群は，三次市東部，吉舎町敷地の江の川支流馬洗川南岸の丘陵上に立地する古墳時代後期の古墳群である。南北に延びる主尾根から北西に延びる小尾根に７基の円墳が築かれているが，今回はその南西側の４基の調査を行った。第１～３号古墳の３基はほぼ４ｍの間隔で並び，北東側に位置する第３号古墳に接するように第７号古墳が築かれている。第１～３号古墳は径７～11ｍ，高さ１～２ｍの墳丘の裾に幅１～２ｍ，深さ0.2～0.7ｍ程度のごく浅い周溝が廻る。第７号古墳は径３～５ｍ，高さ0.8ｍの不整楕円形の小古墳で，周溝は存在しない。埋葬施設は，第１号古墳については不明で，第２号古墳は南北に並列する木棺墓２基，第３号古墳は３基の木棺墓と土坑墓１基がやや雑然と築かれている。第７号古墳の埋葬施設は土坑墓１基である。

ここでは，内容が比較的明確な第２号古墳と第３号古墳を中心に副葬遺物（須恵器・鉄鏃）と埋葬施設の構造及び配列について検討を加え，本古墳群の性格や年代について明らかにしたい。

（１）副葬品について

**Ａ．副葬状況**　第２号古墳と第３号古墳の埋葬施設から出土した遺物については，

①大半の遺物が棺外から出土しており，棺内に副葬されたと考えられる遺物は第２号古墳ＳＫ１の刀子だけである。棺外出土の副葬品は，棺上に置かれたものと木棺と墓坑の間に入れ込まれたものとがある。前者としては第２号古墳ＳＫ２の須恵器（杯身）と鉄鎌，第３号古墳ＳＫ１・２の須恵器（杯蓋・杯身），同ＳＫ３の刀子，後者としては第２号古墳ＳＫ１の鉄器（鉄鎌・鉄鏃），同ＳＫ２の須恵器（杯蓋・杯身）がある。

ところで，古墳時代前～後期（６世紀前半頃まで）の県内例によれば，鉄鎌は棺内出土例18点／32点（56.3%），棺外出土例14点／32点（43.8%）とやや棺内出土例が多い。刀子は棺内出土例87点／106点（82.1%），棺外出土例19点／106点（17.9%）と棺内出土例が８割強と多数を占める。これらに対して，鉄鏃は棺内出土例308点／841点（36.6%），棺外出土例452点／841点（53.7%）と棺外出土例が半数を超え，棺内出土例は３割強である。県内例をみる限りでは，鉄鎌・刀子は棺内出土例が多いが，鉄鏃は棺外出土例が優勢である[(1)]。

②須恵器を主体的に副葬する埋葬施設と鉄器を主体的に副葬する埋葬施設に明確に分かれる。第２号古墳ＳＫ２では両者が出土しているが，鉄器は鉄鎌１点で須恵器（杯蓋１点・杯身３点）が主体的である。このほかは鉄器のみの埋葬施設（第２号古墳ＳＫ１，第３号古墳ＳＫ３・４）と須恵器（杯蓋・杯身）のみを副葬する埋葬施設（第３号古墳ＳＫ１・２）である。副葬鉄器の組成は，第２号古墳ＳＫ１が鉄鏃・鉄鎌・刀子，第３号古墳ＳＫ３は刀子のみ，そして第３号古墳ＳＫ４は鉄刀・鉄鏃である。第３号古墳ＳＫ４の鉄刀を除けば，小型武器の鉄鏃を主体に農具の鉄鎌と工具の刀子である。

**B．須恵器の検討**　大番奥池第１号古墳からは杯蓋（１）･杯身（２）各１点，第２号古墳ＳＫ２から杯蓋（14）１点，杯身（15～17）３点，第３号古墳ＳＫ１から杯蓋（20）・杯身（21），ＳＫ２から杯蓋（22）・杯身（23）各１点の計10点（杯蓋４点・杯身６点）の須恵器が出土している。第１号古墳と第２号古墳ＳＫ２から出土した杯蓋・杯身（Ⅰ類）と，第３号古墳の２つの埋葬施設から出土した杯蓋・杯身（Ⅱ類）はそれぞれに形態・調整等が酷似している。先ず，Ⅰ類については，杯蓋は２点と少なく，しかも第１号古墳出土の１は破片である。天井部の丸みが強く，口縁部との境に形骸化した鈍い稜とその下位にごく浅い凹線状の凹みがみられる。天井部外面の２／３の範囲に回転ヘラケズリが施されている。その他の範囲は回転ナデであるが，14の天井部内面中央は未調整と思われる。この14は口径14.2～14.6cm，器高5.6cmと大型で，稜の部分からハの字に開く口縁部の端部内面に比較的明瞭な段がある。杯身は，口径11.4～12.4cm，器高5.8～6.1cmとほぼ同じ大きさである。若干平底気味の底部から外上方に延びてやがて短く直立する体部からやや斜め上方に延びる受部の端部を尖り気味に納める。立ち上がり部は比較的高く，若干内傾しながら反り気味に直立し，端部を丸く納める。体部外面は底部から２／３程度の範囲に回転ヘラケズリを行い，そのほかは回転ナデである。内底面中央に一定方向のナデを行う。第１号古墳の２と第２号古墳ＳＫ２の15～17は酷似するが，若干の違いがある。法量の点では，２の口径は大きいが器高はむしろ低い。立ち上がり部は15～17に較べて２の方が内傾の度合いが比較的大きく，時期的に下る可能性がある。

第３号古墳ＳＫ１・２から出土した杯蓋・杯身は全体に扁平な器形で，大きさや形態の面でよく似ている。杯蓋は口径14.3～15.0cm，器高2.7～4.1cmで，歪みはあるものの平坦な天井部から直角に近く屈曲し，やや開き気味の口縁部に連なる。天井部と口縁部の境には第２号古墳のものよりも更に形骸化の進んだごく鈍い稜とその下位にごく浅い凹線状の凹みが廻る。天井部外面の２／３以上の範囲に回転ヘラケズリが施される。そのほかは回転ナデで，天井部内面中央には一定方向のナデがみられる。口縁端部の内面にはごく緩やかな段がみられる。杯身は口径12.2～13.1cm，器高4.6～4.7cmとほぼ均一の大きさである。ただ，幾分内傾気味に延びる立ち上がり部の形状はよく似ているものの，体部はやや異なる。杯蓋同様低平な形状であるが，21が緩やかな丸みをもつごく浅い器形であるのに対し，23は平底気味のやや深い底部から外上方に緩やかな曲線を描いて延びる。体部外面の２／３の範囲に回転ヘラケズリを施し，その他は回転ナデを行う。内底面中央に21は一定方向のナデを，23は同心円叩きを施す。また，23の立ち上がり部端部の内面には段の名残りかと思われる沈線がみられる。

Ⅰ類とⅡ類の杯蓋・杯身を比較すると，口径はほぼ等しいが，Ⅱ類の方が器高は低い。杯身は口径はⅡ類の方が大きいが，器高はⅠ類の方が高い。つまり，Ⅰ類の杯蓋・杯身は器高が高く，杯身はやや口径が小さい。Ⅱ類は器高が低く，特に杯身の口径が大きい。Ⅰ類はやや分厚い，Ⅱ類は扁平な印象がある。しかし，天井部外面の回転ヘラケズリが２／３の範囲に及ぶこと，杯蓋の天井部と口縁部の境界の稜が形骸化してごく鈍いものであること，天井部内面や底部外面中央に一定方向のナデがみられること，口縁端部が丸く納められること，など共通する点も多い。ま

た，杯身の立ち上がり部はⅠ類はほぼ直立するが，Ⅱ類はやや強く内傾する。Ⅰ類は器高が高く，丸みの強い形態であるのに対して，Ⅱ類は器高が低く扁平な形状であるなど，形態的にある程度違いがみられる。このことから，これらの須恵器は若干の時期差が考えられるものの，全体的には共通する部分も多く，ほぼ陶邑編年のＴＫ10型式段階[(2)]（中村浩氏編年[(3)]のⅡ型式第２段階）に年代がおさえられる。ただ，杯蓋の口縁端部の内面におけるごく緩い段や杯身の立ち上がり部の端部内面における段の痕跡とみられる沈線の有無，杯身の立ち上がり部の内傾の度合い及び杯蓋の天井部と口縁部の境の稜の形骸化などの状況から若干の時間差が窺えることから，これらの須恵器の年代をほぼ６世紀前半を中心とした時期と捉えておきたい。

**Ｃ．須恵器の副葬について**　県内例（第５表）では，須恵器の棺内（Ａ）副葬例の明確なものはない。不明確な棺内副葬例１例（庄原市・一の谷第６号古墳）と棺外の周囲に副葬する事例（Ｂ・Ｃ）20例で，墳頂・墳丘裾など墳丘からの出土12例，周溝内出土が15例などである。墳丘（Ｅ）・周溝内（Ｆ）出土のものは供献によるもので，完形の須恵器をまとめて置くもの（Ｅａ・Ｆａ）と破砕するもの（Ｅｂ・Ｆｂ）とがある。棺外に副葬するものは，棺（槨・室を含む）の上面付近に置くもの（Ｂ）と木棺外（墓坑内）側辺・小口付近に置くもの（Ｃ；木棺と墓坑の間，木棺と槨・室の側壁・小口壁間，槨・室外で墓坑内）に大きく分けられる。ただ，木棺そのものが検出されることは皆無に近く，多くの場合，土層観察や副葬品の出土状況などにより間接的に木棺の存在が認められることから，若干の誤差は生じえる。現状では棺外出土例のうち，棺上に須恵器を置く例が14例，棺の側辺や小口側の外面に置く例が６例である。つまり，埋葬施設への副葬例の多くは棺の上面付近に須恵器を置くもので，これに較べると棺外（側辺・小口）に副葬する例は少ない。また，後者のうち，側辺に置くものよりも小口側に置く例が多い。

ところで，須恵器の副葬・供献は日本列島で須恵器の製作が行われるようになる５世紀以降，一般的には６世紀中葉～７世紀代の横穴式石室墳において多くみられるが，ここでは横穴式石室導入に先行する５世紀代から６世紀中葉頃までの広島県内の竪穴系埋葬施設をもつ古墳の事例を主な対象とする。まず，県内の竪穴系埋葬施設をもつ古墳の墳丘・周溝内への須恵器の供献例としては，三次市・四拾貫小原第４号古墳（埋葬施設不明）の周溝内に杯身２点が供献された５世紀前半の例が最古で，同・上四拾貫第５号古墳（埋葬施設不明）の墳丘上（杯蓋１・杯身２），広島市・月見城ＳＴ８（土坑）の周溝内の小土坑への一括埋納（杯蓋３・杯身１・直口壺１）は５世紀後半，三次市・四拾貫小原第17号古墳（埋葬施設不明）の周溝内（杯蓋３・杯身１・碗１・甕１）出土例は５世紀末，安芸高田市・新宮第７号古墳（埋葬施設不明）の墳丘（杯蓋２）と周溝内（杯蓋１・甕１）の例は５世紀末～６世紀初頭と５世紀代の事例は少なく，主体は６世紀前半・中葉である。墳丘や周溝内へ須恵器を供献する古墳は計22基（のべ28例）で，埋葬施設別では土坑（木棺），箱式石棺各６例，竪穴式石室５例，土坑４例などが主体である。明確な破砕供献例は墳丘・周溝内ともに３例で，完形の須恵器の供献例９例（墳丘），11例（周溝内）に較べて少ない。

一方，埋葬施設への副葬例は，４世紀末～５世紀初頭とされる広島市・池の内第３号古墳のＡ主体（竪穴式石室）の例と５世紀中葉頃の同・諸木古墳（木槨墓）の例がある。いずれも埋葬施設の上面からの出土で，前者が把手付短頸壺（加耶系陶質土器[4]），後者が瑯各１点である。この２例を除けば，いずれも６世紀前半～中葉の事例で，埋葬施設別（計20基，延べ21基）では土坑（木棺）がのべ11基と大半を占め，ほかに竪穴式石室４例，土坑３例などがある。土坑（木棺）や土坑は棺（墓坑）上と棺外（墓坑内）の側辺・小口副葬例がほぼ同数だが，竪穴式石室はいずれも棺（室）の上面への副葬例である。

埋葬施設上面への副葬例（Ｂ）は計12例だが，出土状況があまり明確ではない広島市・池の内第３号古墳例と安芸高田市・向井古墳例を除いた計10例について検討する。埋葬施設は，土坑（木棺）４基，箱式石棺状の竪穴式石室２基をはじめ，箱式石棺・石蓋土坑・土坑・木槨で，墓坑に箱形木棺を納めた木棺墓が多い。ただ，棺（墓坑）や槨・室の直上に須恵器を置く例は，広島市・諸木古墳第１主体部（木槨墓）の直上中央に瑯１点を供献する例のみである。また，庄原市・川東大仙山第11号古墳では土坑上面を厚く被覆する粘土内から杯蓋・杯身各１点が割れた状態で出土した。箱式石棺や石蓋土坑では蓋石の下に差し挟むように須恵器を置く。庄原市・犬塚第３号古墳では石蓋土坑の小口側の蓋石の下に口縁を上に向けた杯蓋・杯身を入れ込み，広島市・弘住第４号古墳では箱式石棺の蓋石と南側壁中央の側石上面の間に杯蓋を伏せて置いている。安芸高田市・宮谷古墳では竪穴式石室の北小口側の蓋石の横に，伏せた状態の杯身と仰向けの状態の杯身各１点を置いていた。以上の事例以外は，小口側を主とした埋葬施設外の上面（多くの場合，墓坑肩付近）に杯蓋・杯身のセットを主体に整然と置き並べている（５例）。代表的な例としては，北広島町・古保利第44号古墳がある。箱形木棺を納めたとみられる竪穴式石室西小口側の墓坑上に杯蓋・杯身のセット８組をはじめ，瑯・蓋付坩・高杯などを３点×４列の状態に整然と並べ置いている。杯蓋・杯身はいずれも口縁を合わせているが，１組は口縁を上に向けた状態で並べられていた。墳頂近くまで盛土したあと墓坑を掘り込んで石室を構築し，須恵器を置き並べて葬送儀礼を行い，その後最終的な盛土を行って，墳丘を完成させている。なお，この同じ盛土の面の石室外南側辺では底部を穿孔した大甕が潰れた状態でみつかっており，これも同様の儀礼に伴うと考えられている。三次市・燎東（かがりひがし）古墳の中心的な埋葬施設ＳＫ２の土坑（木棺）では，北西小口側の墓坑外上面に杯蓋・杯身４組と提瓶１点などを置き並べて葬送儀礼を行ったと考えられる。福山市・吹越第２号古墳では箱形木棺を納めた墓坑の東西両小口付近に須恵器を副葬している。東小口の北側壁際上面では杯蓋・杯身１組が口縁を合わせた状態で置かれ，その横には高杯１点が倒れていた。西小口の棺外では１組の杯蓋・杯身と杯蓋２点が各々口縁を合わせた状態で置かれ，もう１点の杯身は口縁を上に向けた状態で出土した。海田町・上安井古墳の埋葬施設３の土坑（木棺）は，西小口側の棺上に杯蓋２・杯身１が置かれていた。完形の杯蓋は伏せた状態で，セット関係のもう１組の杯蓋・杯身は割れた状態で出土した。後者の杯蓋は赤色顔料を塗布していた。三次市・寺津第１号古墳では木棺墓の墓坑北小口側の底面に杯蓋・杯身２組が副葬されていたが，これとは別に埋葬施設に付設する浅い掘り込みの上面に口縁を合わせた状態の杯蓋・杯

身１組が副葬されていた。

大番奥池第２号古墳ＳＫ２では，棺上中央に割れた状態の杯身１点が置かれていた。第３号古墳では，ＳＫ１・２の棺上中央に杯蓋・杯身１組が置かれていた。ＳＫ１では伏せた状態の，そしてＳＫ２では仰向けの状態の杯蓋の横にそれぞれ杯身を立てた状態で，似通った出土状況を示していた。このような棺上中央付近に須恵器が副葬された例は少なく，県内では類例がない。

次に，棺外（墓坑内）側辺・小口への副葬例（Ｃ）は大番奥池例以外では計５例ある（三次市・寺津第１号古墳，同・寺津第２号古墳，同・大坂（だいさか）第６号古墳第２主体部，同・植松第１号古墳Ｂ主体，庄原市・犬塚第４号古墳）。前３者は箱形木棺を納めた土坑，後２者は土坑である。寺津第１号古墳例は棺外北小口側の墓坑底面に杯蓋・杯身２組，寺津第２号古墳例は棺外２か所の墓坑底面に須恵器が副葬されていた。南側辺中央では，口縁を上に向けた有蓋高杯の蓋の横に杯蓋・杯身２組が口縁を合わせて横向きに立てられた状態で副葬され，西小口では有蓋高杯・高杯・瑞各１点が半ば倒れた状態で出土した。大坂第６号古墳例は木棺外両小口の墓坑底面に計17点のほぼ完形の須恵器が副葬されていた。大半は東小口に置かれ（杯蓋・杯身６組，蓋付坩１組，提瓶１点），西小口には杯蓋・杯身１組が置かれていた。大半の杯蓋・杯身と蓋付坩は口縁を合わせた状態で置かれていたが，重ねられた状態の杯蓋・杯身が西小口のものを含め２，３組みられた。以上の３例で特徴的なのは，杯蓋・杯身や蓋付坩といったセット関係になるものの多くが口縁を合わせて置かれていたことである。これに対して，木棺の存在が明確でない植松第１号古墳例では墓坑西小口の底面に杯蓋・杯身・瑞各１点が副葬されていたが，杯蓋・杯身は口縁を上に向けた状態である。犬塚第４号古墳例は南側壁際中央の墓坑底面に杯蓋・杯身各１点が口縁を上に向けて置かれていた。即ち，植松・犬塚例では，セット関係にある杯蓋・杯身がいずれも口縁を合わせることなく開いた状態で並べられていた。以上５例はいずれも木棺外小口側（一部側辺）の墓坑底面に杯蓋・杯身のセットを中心に完形の須恵器が副葬された例であるが，セット関係にある杯蓋・杯身の置き方に違いがみられる。

大番奥池第２号古墳ＳＫ２はＢ＋Ｃの組み合わせで，棺上中央に破砕された杯身１点が置かれ，東小口寄りの北側辺では棺外の半ば付近の深さに唯一の杯蓋が口縁を斜め上方に向けた状態で，西小口中央棺外でも半ば付近の深さのところにやはり斜め上方に口縁を向けた状態で杯身が，東小口中央では棺外上面付近に口縁を棺の方に向けて横向きに立てられた杯身がそれぞれ副葬されていた。この大番奥池第２号古墳ＳＫ２の例は須恵器が棺外の中位付近と上面に副葬されており，棺外の墓坑底面付近に副葬されている県内例と異なる。棺外側辺・小口に置かれた杯蓋１点・杯身２点はいずれも，口縁をほぼ木棺側に向けて横向きに置かれていたと思われる。棺と墓坑の間に須恵器を立て置く例は寺津第２号古墳に類例がある。

このように，５世紀～６世紀前半頃の広島県内では須恵器の明確な棺内副葬例はみられず，埋葬施設上面や埋葬施設の裏込め部分（棺と墓坑の間など）の小口や側辺に須恵器を入れ置く例が中心である。日本列島では弥生墳丘墓以降前期古墳までは墳頂部を中心とした墳丘へ土器を多量に供献する例は多くみられても，埋葬施設への土器の副葬は極めて例外的である。死霊は大空を

飛翔するものと考えていた古代の日本列島の人々にとって，死後の世界は存在しないものであるから，死者が死後の生活で必要な器類などを墓坑に入れ込むことはしていなかった[5]。

ところが，５世紀前半に朝鮮半島南部から須恵器を製作・焼成する技術が伝わり国内で須恵器が焼かれ始める。そして，５世紀中頃～６世紀初頭には奈良県榛原町の野山古墳群[6]や同大宇陀町の後出古墳群[7]などの初期群集墳[8]で埋葬施設（棺内・棺上・墓坑上）へ杯蓋・杯身のセットを中心とする須恵器の供献や副葬が行われる。これらの古墳は，いずれも割竹形木棺や箱形木棺を直葬した小規模古墳で，特別に優位な被葬者への供献や副葬ではない。従来，古墳の埋葬施設への須恵器の供献や副葬行為は横穴式石室（特に「畿内型石室」）の導入を契機に６世紀前半以降行われるようになるという理解であった[9]。しかし，畿内周辺ではのちに全国的に普及することになる「畿内型石室」と呼ばれる横穴式石室の成立は５世紀末～６世紀初頭[10]（これとは別系譜の「初期石室」は５世紀中葉～後半にすでに導入されている[11]）とされている。これらのことから，埋葬施設への須恵器副葬の前提となる死後の世界の存在を認める黄泉国思想の受容には一定の相克の時を必要とすると考えられ，横穴式石室の導入を黄泉国思想の受容の契機とするのは無理があると思われる。すでに，５世紀中葉には須恵器副葬の風が畿内周辺をはじめかなりの範囲に広まっていたことからすると，少なくとも５世紀中葉～６世紀初頭頃には，日本列島において死後の世界の存在を認めるいわゆる黄泉国思想を受容しうる状況が十分醸成されていたと考える方が自然であろう。ではこの黄泉国思想の受容はどのような経緯や背景のもとになされたのであろうか。この黄泉国思想にみられる死生観は日本固有のものではなく，他地域，具体的には朝鮮半島から移入されたと考えられる。

ところで，朝鮮半島南部で埋葬施設に土器が埋納される比較的早い例は慶州市朝陽洞遺跡の木槨墓（２世紀後半～４世紀初頭）で，陶質土器の前身である瓦質土器が納められている。次いで，金海郡の礼安里遺跡では土坑木槨墓・箱形石棺系石槨墓・小型竪穴式石槨（室）などの４世紀代の埋葬施設に赤褐色軟質土器・瓦質土器，やがて陶質土器が埋納される。そして，４世紀後半～５世紀後半の釜山市の福泉洞古墳群では土坑木槨墓，さらには竪穴式石室といった埋葬施設に陶質土器を副葬している[12]。いずれも６世紀前半頃に朝鮮半島南部に横穴式石室が導入される以前の竪穴系埋葬施設への土器副葬例であり，これらの例からも横穴式石室の導入と埋葬施設への土器副葬を必ずしも関連付ける必要はないことが分かる。ところで，朝鮮半島南部と日本列島とは，紀元前後以降伽耶地域の主に鉄素材（斧状鉄板・鉄鋌）などを求めて盛んに交易を行う[13]が，特に４世紀中葉～６世紀以降，この鉄素材を安定的に確保するために畿内中央政権が本格的に乗り出すことで急速に拡大する[14]。そして，高句麗の伽耶諸国への侵攻を機に，５世紀初頭から中葉にかけて釜山・金海地域をはじめとする地域の工人集団の数次に亘る渡来によって，日本列島に須恵器製作技術が伝えられ，本格的な須恵器の焼成が開始される[15]。そして，５世紀後半になると，高句麗の百済侵攻を契機とする百済系の集団を主体とする第２次渡来人の波があり，以後６世紀後半にかけて百済系文物や技術の本格的な移入がみられるようになる[16]。

このように，紀元前後～５世紀代の伽耶地域，さらには４世紀末～６世紀後半の百済との密接

な交流や技術者集団を核とする朝鮮半島の人々の数多の渡来は，日本列島全体に朝鮮半島の技術や文物のみならず精神文化をももたらすことになり，それらは列島の人々の社会生活，ひいては死生観にも多大な影響を与え，大きな変容を迫ったであろうことは想像に難くない。ただ，先進地域である畿内における死生観の転換の現れ方と安芸・備後国という遠隔の地域における現れ方には大きな差異がみられ，そのことが両者の間に，須恵器副葬の開始時期や副葬状況に一定のずれを生じさせたものと考えられる。つまり，畿内では須恵器副葬の風が５世紀中葉には行われるようになり，しかも棺内の遺骸のすぐ傍に器を入れ込むという積極的な受容であるのに対して，広島県域ではそれから半世紀も遅れた６世紀になってようやく須恵器副葬が広く行われるようになり，しかも遺骸の近くに器を入れ込むことを躊躇い，棺外の上面や裏側に辛うじて副葬するという消極的な受容に留まった。すなわち，旧来の列島的な死生観を克服して死後の世界の存在を容認するという半島的な新しい死生観を受け入れるのに必要以上に時間を要したのである。ただ，いずれにしろ，従来横穴式石室の導入が日本列島の人々に黄泉国思想の受容を促したといったような意見がみられた[17]が，むしろ数世紀に及ぶ朝鮮半島との濃密な交流が日本列島の人々に半島的な新しい死生観への転換を促し，このことがやがて列島全域にほぼ同時的で円滑な横穴式石室の導入と普及を実現させたということができよう。

**Ｄ．鉄鏃の検討**　今回の調査では計15本（鏃身部を含むもの10，頸茎部片５）の鉄鏃が出土している。第２号古墳ＳＫ１から計３本（９～11），第３号古墳ＳＫ４から計４本（27～30），同周溝から１本（31），第７号古墳ＳＫ１から鏃身部片２本・頸茎部片５本（32～36）である。９・10は幅広で長く，27・28はやや短く細身と形態的にはやや異なるもののいずれも腸抉三角形鏃で，そのふくらや逆刺の外反の状況などが類似している。これらは杉山秀宏分類[18]のＡ形式第１型式Ｂ類（９・10）とＡ類（27・28）で，時期的にはⅧ～Ⅸ期（５世紀後半～６世紀中頃）と考えられる。11は短い逆刺をもつ三角形鏃で，Ｃ形式第Ⅰ形式や第Ⅱ形式の類五角形状のものに系譜的な繋がりが考えられる。31は方頭斧箭鏃の系譜上にあるもので，両角関をもつＢ形式第３型式Ｂ類である。時期的にはⅩ～Ⅺ期（６世紀後半～７世紀初頭）とされている。第３号古墳ＳＫ４の29・30，第７号古墳ＳＫ１の32・33はいずれも長頸鏃で，前２者は鏃身部（長さ1.9～2.0cm，幅1.1～1.2cm）が三角形（角関）で，後２者は鏃身部（長さ3.6～4.0cm，幅1.1～1.3cm）がふくらのある柳葉状の長三角形である。29・30は頸部の長さがいずれも７cmを越す長頸化のやや進んだ段階のＡ形式第Ⅴ形式第１型式のもので，Ⅶ～Ⅻ期（５世紀中頃～７世紀後半）と時期的にかなり幅がある。32・33は比較的弱く外反する逆刺をもつＢ形式第Ⅴ形式第２型式のもので，Ⅵ～Ⅹ期（５世紀前半～６世紀後半）とやはり時期的に幅がある。

埋葬施設毎の鉄鏃の組成については，第２号古墳ＳＫ１が腸抉三角形鏃２＋三角形鏃（類五角形）１，第３号古墳ＳＫ４が細身の腸抉三角形鏃２＋長頸鏃（三角形）２，第７号古墳ＳＫ１は長頸鏃（腸抉三角形）２＋αで，これらは腸抉三角形鏃・三角形鏃と長頸鏃（三角形・腸抉三角形）を主体としたⅦ期～Ⅹ期に一般的にみられる組成である。これらのうち，第２号古墳ＳＫ１

（木棺墓）の鉄鏃群は頭位の北側辺東小口寄りの棺外裏込め部分の中・下位に副葬されていた。いずれも，木棺の主軸に鉄鏃の軸を沿わせ，切先は頭位の東小口側に向けていた。

次に，県内例と比較しながら，鉄鏃の副葬位置と組成などを検討する。鉄鏃を副葬する竪穴系埋葬施設をもつ広島県内の古墳は計56基（埋葬施設計58基）で，複数の位置（棺内と棺外，同じ棺外でも棺上と棺側～小口などのように副葬位置が大きく異なる場合）に副葬される埋葬施設が３基あるので，鉄鏃が副葬された位置は計61例存在することになる。ひとつの埋葬施設で複数の位置に鉄鏃が副葬されていた事例は，福山市・石鎚権現第５号古墳（礫槨；Ａ＋Ｃ），広島市・成岡第３号古墳第１主体（木槨＝割竹形木棺；Ｂ＋Ｃ），東広島市・三ツ城第１号古墳３号棺（箱式石棺；Ａ＋Ｃ）で，棺内と棺外（棺側辺～小口），棺外の棺上と棺側辺あるいは小口側の裏込め部分の組合せである。副葬位置別では，棺内（Ａ）副葬例15例，棺外（Ｂ・Ｃ）副葬例37例（棺上15例・棺側辺～小口22例），埋葬施設周辺（Ｄ）副葬例１例で，棺外副葬例が多い。ただ，棺内副葬例がほぼ皆無である須恵器副葬の事例と比較すると，棺内副葬例が全体の１／４程度存在している点が異なる。なお，棺外副葬例では棺上より棺側辺～小口の裏込め部分への副葬例（特に側辺）が多くみられる。これは棺内副葬例を含めて，鉄鏃は切先を頭部側（９例）あるいは足部側（８例）に向け，軸を被葬者に沿うように副葬する例が多い（32例／61例＝52.5%）ことと関わりがあろう。

埋葬施設別では，竪穴式石室（竪穴式石槨・礫槨を含む）19施設20例，土坑（箱形木棺）19施設・例，箱式石棺９施設・10例が多い。この他，土坑（割竹形木棺），土坑，粘土槨（割竹形木棺）がある。埋葬施設毎の副葬位置は，竪穴式石室では棺外の側辺～小口のＣ（12施設・例）が半数以上を占め，棺内Ａ（３施設・４例）・棺上Ｂ（２施設・例）などに比べて多い。土坑（箱形木棺）もＣが８施設・例と多く，棺上Ｂ（６施設・例）や棺内Ａ（４施設・例）がこれに次ぐ。しかし，箱式石棺は棺内Ａ（３施設・４例），棺上Ｂ（４施設・例）の副葬例が棺側辺～小口Ｃ（２施設・例）を上回り，やや様相が異なる。

県内例では，鉄鏃を副葬する埋葬施設をもつ古墳の37.5%（21基／56基）が墳頂部複数埋葬である。一方，鉄鏃と須恵器をいずれも副葬する竪穴系埋葬施設をもつ古墳は３基にすぎない。庄原市・一の谷第６号古墳（土坑＝木棺），福山市・吹越第２号古墳（土坑＝木棺），安芸高田市・向井古墳（竪穴式石室）で，いずれも６世紀前半～中葉に築造されている。これらはいずれも棺外副葬例（Ｂ１例・Ｃ２例）で副葬鏃の組み合わせは長頸鏃のみ，あるいは長頸鏃＋腸抉三角形鏃・三角形鏃である。

本古墳のような鉄鏃という小型武器を主体とする副葬内容の被葬者については，国造軍の基盤をなす軍事組織の単位である共同体を構成する有力家族の長及び成員として，主に弓矢をもって仕えたと考えられている[19]。

（２）埋葬施設の配置と構造

第３号古墳のＳＫ４を除けば，第２・３号古墳の埋葬施設はいずれも墓坑に箱形木棺を納めた

木棺墓である。第２号古墳では墳頂部に東西方向に主軸をもつ２基の木棺墓が整然と並葬されている。長さ241cm・272cm，幅121cm・116cm，深さ32cm・66cm（いずれも前者がＳＫ１，後者がＳＫ２。以下，同じ。）の平面長方形の墓坑の中に，長さ200cm・224cm，幅85cm・81cmの木棺を納めている。墓坑の規模や形状・木棺規模などは似ているが，北側のＳＫ１の墓坑底面が南側のＳＫ２のそれの40cm高位にある。第３号古墳は墳丘中央の攪乱坑によって４基の埋葬施設がいずれも損壊を受けており，木棺墓ＳＫ３や土坑墓ＳＫ４などやや埋葬状況が不明確な部分がある。木棺墓ＳＫ１・２はほぼ東西方向に主軸を向け，南北に並葬されており，構造や副葬内容・状況は類似している。ただ，墓坑及び木棺の規模は異なり，長さ213cm・153cm（前者がＳＫ１，後者がＳＫ２，以下同じ。），幅91cm・65cm，深さ31cm・31cmの大きさの墓坑に長方形の箱形木棺を納めていたと考えられる。ＳＫ１の木棺は長さ156cm，幅55～69cmの大きさであるが，ＳＫ２の木棺については不明である。第２号古墳と第３号古墳では埋葬施設の配列状況に大きな違いがみられる。これらから，①第２号古墳の被葬者は集団内の選ばれたほぼ同格の人々で，その埋葬も生前から計画的に考えられており，しかもほぼ同時期に埋葬されたと考えられる[20]。ただ，墓坑底面に高低差がみられることから，被葬者間に何らかの格差あるいは木棺構造上の差異や埋葬時期差が存在する可能性も残される。②第３号古墳の埋葬施設はＳＫ１・２は構造面では似るが，墓坑の大きさに差がみられる。ＳＫ３は木棺墓ではあるが，平面形や内部構造などＳＫ１・２とは大きく異なる。ＳＫ４は現状では木棺痕跡を見つけることができず，土坑墓と捉えざるをえない。このように第３号古墳の４基の埋葬施設間には様々な相違点がみられることから，被葬者間に集団内における階層面など何らかの点で一定度の格差を窺うことができよう。また，埋葬施設の配置がやや雑然としていることから，埋葬時期に時間差が窺え，その死や埋葬が予期されていなかったものである可能性もある。ただ，少なくとも４人もの死者を古墳の墳頂部に集中的に葬っていることから，これらの被葬者が比較的強い紐帯によって結ばれていた可能性は高い，といえるだろう。

ここで，県内例93基（埋葬施設225基）の竪穴系埋葬施設を墳頂部に複数埋葬する古墳について検討する。これらの古墳の築造時期は４～６世紀代で，５世紀代を主体とするものが54基（58.1%）と過半数を占め，４世紀代が15基，６世紀代が13基である。

古墳の立地は丘陵頂部が67基（72.0%）と大半を占め，丘陵端部19基，丘陵斜面４基，丘陵傾斜変換点付近３基である。周囲の平野部からの比高は20m以上・30m未満21基を含め，10m以上60m未満が66基（71.0%）と最も多く，10m未満が１基，60m以上（最大が100m）が８基である。墳形は円・楕円・長円形が64基（68.8%）と大半で，方・長方形20基（21.5%），帆立貝・前方後円形・造出付円形４基である。墳丘規模は，10m未満28基，10m以上15m未満33基と15m未満が61基（65.6%）と大半を占める。15m以上20m未満が15基，20m以上（最大91m）が11基である。

古墳１基あたりの埋葬施設数は２～５基で，２基の古墳が62基（66.7%）と最も多く，３基のもの（24基＝25.8%），４基のもの（６基），５基のもの（１基）となる。埋葬施設の配列状況は，整然と並列するもの（A），ほぼ並列するものの，やや斜めになるもの（A′），中心的な埋葬施設は比較的整然と並列するが，従属的な埋葬施設をはじめ，一部の埋葬施設が並列しないもの

（B），埋葬施設がまったく並列しないもの（C）の４通りに分けられる。２基タイプの古墳62基の内訳は，A＝47基，A′＝７基，C＝８基，３基タイプの古墳24基の内訳は，A＝10基，A′＝１基，B＝６基，C＝７基，４基タイプの古墳６基の内訳は，A＝２基，A′＝１基，B＝２基，C＝１基，５基タイプの古墳１基はC類である。A類が59基(63.4%)と多く，A′類９基，B類８基，C類17基となる。整然と複数の埋葬施設が並葬されるものが大半を占めており，まったく並列せず整然と葬られていないC類は全体の２割弱である。

次に，埋葬施設の内容毎にみてみる。墳頂部複数埋葬を構成する古墳の埋葬施設（計225基）としては，箱式石棺79基（35.1%）が最も多い。次いで，土坑（木棺）54基（24.0%），土坑35基（15.6%），竪穴式石室24基（10.7%），石蓋土坑13基，粘土槨（割竹形木棺）９基，土坑（割竹形木棺）８基，木蓋土坑２基，粘土槨（箱形木棺）１基である。埋葬施設の組合せは１～２種類の埋葬施設であることが殆どで，３種類以上の埋葬施設からなる例は福山市・長迫第２号古墳例のみである。その組合せについて具体的にみてみると（２A＝２基タイプA類，を表す。以下，同じ），

①箱式石棺のみ；21基（２A＝８，２A′＝１，２C＝３，３A＝２，３B＝３，３C＝２，４A′＝１，５C＝１）
②箱式石棺＋土坑（木棺）；４基（２A・３A′＝各１，３C＝２）
③箱式石棺＋土坑；４基（２A＝２基，２A′・２C＝各１）
④箱式石棺＋竪穴式石室；３基（２A・３A・３B＝各１）
⑤箱式石棺＋石蓋土坑；５基（２A＝２，２C・３B・３C＝各１）
⑥箱式石棺＋粘土槨（割竹形木棺）；２基（２A・３A＝各１）
⑦土坑（木棺）のみ；13基（２A＝11，３A・３C＝各１）
⑧土坑（木棺）＋土坑；６基（２A′＝２，３A・３C・４A・４C＝各１）
⑨土坑（木棺）＋竪穴式石室；５基（２A＝３，２A′・４B＝各１）
⑩土坑（木棺）＋粘土槨（割竹形木棺）；２基（２A′・３A＝各１）
⑪土坑（木棺）＋土坑（割竹形木棺）；２基（２A・３A＝各１）
⑫土坑（木棺）＋粘土槨（箱形木棺）；１基（２C＝１）
⑬土坑のみ；９基（２A＝８，３A＝１）
⑭土坑＋竪穴式石室；１基（３A）
⑮土坑＋石蓋土坑；２基（２A・３B＝各１）
⑯竪穴式石室のみ；６基（２A＝５，２A′＝１）
⑰竪穴式石室＋土坑（割竹形木棺）；１基（２C）
⑱石蓋土坑のみ；１基（２A）
⑲石蓋土坑＋粘土槨（割竹形木棺）；１基（４B）
⑳石蓋土坑＋土坑（割竹形木棺）；１基（２C）
㉑粘土槨（割竹形木棺）のみ；１基（４A）

㉒土坑（割竹形木棺）のみ；１基（２Ａ）
㉓木蓋土坑のみ；１基（２Ａ）
の23通りの組合せがある。組合せ的には各埋葬施設を含む古墳の延べ数は，箱式石棺39基，土坑（木棺）32基，土坑22基，竪穴式石室16基，石蓋土坑10基，粘土槨（割竹形木棺）５基，土坑（割竹形木棺）５基，木蓋土坑１基，粘土槨（箱形木棺）1基で，箱式石棺・土坑（木棺）・土坑・竪穴式石室などを埋葬施設とする古墳が主体的である。同一の埋葬施設だけで構成される例が多く，箱式石棺のみを埋葬施設とする古墳21基をはじめ，土坑（木棺）13基，土坑９基，竪穴式石室６基，石蓋土坑・粘土槨（割竹形木棺）・土坑（割竹形木棺）・木蓋土坑各１基の計53基の古墳が１種類の埋葬施設（最多５基）で構成されている。異種同士の組み合わせでは，土坑（木棺）＋土坑６基，箱式石棺＋石蓋土坑・土坑（木棺）＋竪穴式石室が各５基，箱式石棺＋土坑（木棺）・箱式石棺＋土坑が各４基が比較的多い。また，埋葬施設の配列状況では，２基タイプ＝62基（66.7%），３基タイプ＝24基（25.8%），４基タイプ＝６基，５基タイプ＝１基で，整然と並列するＡ類の古墳が59基（63.4%）と多く，特に２基が整然と並ぶものが47基と目立つ。このほか，Ａ′類９基，Ｂ類８基，Ｃ類17基である。

ところで，これら墳頂部複数埋葬の埋葬施設間では，内容的には通常それほど明確な差異はみられないが，一部に埋葬施設の規模・構造や配置，あるいは副葬内容などの点で明確な優位性のあるものや逆に劣勢で従属性が高いものが存在する。ほかの埋葬施設に較べて明らかに従属性の高い埋葬施設としては，墓坑規模の小さい小児墓が考えられる（墳丘裾や斜面など明確に墳頂部の埋葬施設とかけ離れた位置に構築されているものは，今回の分析では除外する）。石蓋土坑９基／13基（従属葬の比率69.2%）が最も従属性が高い埋葬施設である。ほかに，箱式石棺23基／79基（29.1%），土坑８基／35基（22.9%）も３～４基に１基の割合で従属葬がみられ，従属性が比較的高い埋葬施設といえる。土坑（木棺），竪穴式石室にも若干の従属葬がみられるが，粘土槨（割竹形木棺）や土坑（割竹形木棺）などの埋葬施設には従属葬はみられない。従属性の高い埋葬施設（44基）が存在する古墳は計35基で，古墳１基あたり１～３基の従属葬を含む。複数（２・３基）の従属葬がみられる古墳は７基である。箱式石棺・石蓋土坑・土坑・土坑（木棺）などの従属葬が存在する古墳の中心的埋葬は箱式石棺であることが多く，ほかには土坑（木棺）・竪穴式石室・土坑などである。一般的には中心的埋葬と従属葬が同一の種類の埋葬施設である例が比較的多い（箱式石棺12基，土坑４基，土坑＝木棺１基）。また，従属葬に較べるとそれほど明確ではないが，優位性の高い埋葬施設としては箱式石棺７基，土坑（木棺）・竪穴式石室４基，粘土槨（割竹形木棺）２基などがある。優位性の高い埋葬施設が明確な古墳は16基，従属性の高い埋葬施設をもつ古墳は35基で，これらのうち10基は優位性の高い埋葬施設と従属性の高い埋葬施設が併存する。優位性の高い埋葬施設はもつが従属性の高い埋葬施設はもたない古墳６基は２基タイプＡ類５基と２基タイプＡ′類１基で，優位性の高い埋葬施設としては土坑（木棺）２基，箱式石棺・竪穴式石室・粘土槨（割竹形木棺）・土坑（割竹形木棺）各１基で，通常の埋葬施設＋優位性の高い埋葬施設の組み合わせでは特定の組合わせに偏ることはない。即ち，箱式石棺＋粘土槨

（割竹形木棺）・土坑＋箱式石棺・土坑（木棺）＋土坑（木棺）・土坑（木棺）＋土坑（割竹形木棺）・土坑（木棺）＋竪穴式石室・土坑＋土坑（木棺）各１基である（いずれも前者が通常の埋葬施設，後者が優位性の高い埋葬施設）。次に，優位性の高い埋葬施設と従属性の高い埋葬施設の両方が存在する古墳10基は，２基タイプＡ類・同Ｃ類各１基，３基タイプＢ類３基，同Ｃ類２基，４基タイプＢ類２基，５基タイプＣ類１基で，整然と並葬するＡ類が殆どみられず，配列に乱れがみられるＢ・Ｃ類が多い点が特徴である。この配列に乱れが生ずることと埋葬施設間に階層性が窺える点とは何らかの関連性があろう。この配列の乱れについては，優位性の高い埋葬施設はもつが，従属葬は存在しない６基の古墳がほぼ２基タイプＡ類にまとまり，埋葬施設が整然と配列されている点と好対照である。次に，従属性の高い埋葬施設を含むがそのほかの埋葬施設に特に優位性がみられない25基の古墳について検討してみる。２基タイプＡ類９基，同Ａ′類１基，同Ｃ類４基，３基タイプＡ類４基，同Ａ′類１基，同Ｂ類２基，同Ｃ類２基，４基タイプＡ類１基，同Ａ′類１基で，Ａ類14基，Ａ′類３基，Ｂ類２基，Ｃ類６基となる。整然と並列するＡ類が大半を占めるが，Ｃ類も一定数みられることから，優位性の高い埋葬施設と従属性の高い埋葬施設が併存する古墳ほどではないが，埋葬施設の配列に一定度の乱れがみられる。これらのことから，墳頂部における複数埋葬の古墳において，従属性の高い埋葬施設が存在する場合，及び優位性の高い埋葬施設と従属性の高い埋葬施設が併存する場合が特に配列に生ずる乱れが大きいといえる。すなわち，埋葬施設の配列の乱れは埋葬施設間の階層面の格差の大きさに比例することが分かる。よって，整然と並葬されるＡ類の埋葬施設間には階層差が余りないものと理解される。

（３）大番奥池古墳群の年代と性格

以上の検討から，大番奥池第１号古墳と第２号古墳はごく近接した時期に築造され，これらに若干遅れて第３号古墳，更には第７号古墳が築造されたと考えられる。第１号古墳と第２号古墳出土の須恵器（杯蓋・杯身）は丸みが強く，扁平な第３号古墳の須恵器（杯蓋・杯身）に時期的に先行する。第１号古墳と第２号古墳では，尾根頂部の最高所に立地し，杯身の立ち上がり部が直立する第２号古墳が時期的に先行し，次いで同じ尾根頂部でもやや低位の傾斜変換点付近に立地し，杯身の立ち上がり部が内傾気味の第１号古墳が築造されたとみられる。なお，第２号古墳築造段階では被葬者は共同体内の有力家族の家長及び近親で，被葬者間に格差はほとんどみられない。第１号古墳に続いて，出土須恵器が扁平な形態をもち，杯蓋の稜の形骸化が第２号古墳のものに比べて更に進むとともに杯身の立ち上がり部の内傾の度合いが第１号古墳のものよりも強い第３号古墳が尾根頂部からやや下がった緩斜面上端付近に築かれたと考えられる。第２号古墳から第１号古墳の築造を経て，第３号古墳を築造する時点では，被葬者が増えて家長と近親のほかに成長した有力成員２名が加わっている。ただ，それら４基の埋葬施設の配列に乱れが生じていることから明らかなように，被葬者間には一定の格差がみられる。第７号古墳はその立地から分かるように，第３号古墳に続いて最後に築造された古墳である。

大番奥池第１～３・７号古墳は，以上のように６世紀前半を中心とした時期に築造された古墳

群で，埋葬施設への須恵器（杯蓋・杯身）の主体的な副葬は，６世紀後半以降盛んになる当地域への横穴式石室の採用に先立って半島から移入された死生観（黄泉国思想）に拠るものであり，また，鉄鏃という小型武器を主体的に副葬していることから，古墳の被葬者は弓矢をもって軍事組織に仕えた有力家族の長であると考えられる。また，須恵器を主体的に副葬する埋葬施設と鉄鏃などの鉄器を主体的に副葬する埋葬施設に明確に分かれ，両埋葬施設の被葬者の間に何らかの差異が窺えるが，その内容については現状では明らかでない。

なお，第７号古墳の墳丘からは類例の少ない鉄製紡錘車が出土している。一般的に，紡錘車が古墳の墳丘や周溝から出土する場合，古墳築造から期間をおいて行われる先祖供養的意味合いの強い供献祭祀的行為に伴うと考えられている[21]。鉄製紡錘車は６世紀後半から中世にかけてみられるが，特に７世紀前半の西日本に多くみられる。そして，これらは，評衙（のちの郡衙）の先駆的形態とみられる“ミヤケ（屯倉）”に関わる遺跡やのちに評衙が成立する遺跡，さらにはこれら役所的施設に納められる貢物としての瓦や須恵器，鉄器の生産に関わる遺跡などで出土する傾向がつよく，のちの郡領層となる豪族が紡織の工程に深く関与していたことを示す[22]，とされている。

以上，本古墳群は６世紀前半の横穴式石室導入前に築造された，当地域の国造軍の一翼を担う軍事組織の末端を形成するとともに，当地域の紡織全般に深く関与したのちの郡領層に繋がりをもつ共同体のなかの有力家族の長及び成員を被葬者とする古墳群と考えることができる。

**註**

（１）鉄鎌・刀子の県内例の分析については，
財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）－権現第１～３号古墳－』 2010年の「Ⅴ　まとめ」及び第５表参照。また，鉄鏃については，本書第６表参照。

（２）田辺昭三『須恵器大成』 角川書店　1981年

（３）中村浩『和泉陶邑窯の研究』 柏書房　1981年

（４）定森秀夫「陶質土器・初期須恵器からみた瀬戸内と朝鮮」松原弘宣編『瀬戸内海地域における交流の展開』 名著出版　1995年

（５）土生田純之「第三部第３章黄泉国の成立」『黄泉国の成立』 学生社　1998年

（６）奈良県立橿原考古学研究所『野山遺跡群』Ⅰ　1988年

（７）奈良県立橿原考古学研究所「後出古墳群Ⅰ」『奈良県遺跡調査概報1985年度（第二分冊）』 1986年

（８）白石太一郎「石光山古墳群の提起する問題」『葛城・石光山古墳群』 奈良県立橿原考古学研究所　1976年
関川尚功「群集墳をめぐる諸問題－大和を中心として－」『桜井市外鎌山北麓古墳群』 奈良県立橿原考古学研究所　1978年

（９）註（５）に同じ。

(10) (11) 土生田純之「畿内型石室の成立と伝播」荒木敏之編『ヤマト王権と交流の諸相』 名著出版　1994年

(12) 土生田純之「古墳出土の須恵器（一）」末永先生米寿記念会『末永先生米壽記念献呈論文集』 乾　1985年

(13) 東潮『倭と加耶の国際環境』 吉川弘文館　2006年

(14) 福永伸哉「共同研究　四，五世紀における韓日交渉の考古学的再検討－地域間相互交流の観点から　第一章　対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論集』第12号　財団法人韓国文化研究振興財団　1998年

(15) 朴天秀「同上　第四章　考古学から見た古代の韓・日交渉」同上

(16) 註（15）に同じ。

(17) 註（5）に同じ。

白石太一郎「横穴式石室誕生」『横穴式石室誕生－黄泉国の成立－』 平成19年度秋季特別展 大阪府立近つ飛鳥博物館 2007年

(18) 杉山秀宏「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』 第8 吉川弘文館 1988年

以下，鉄鏃の形式・型式や編年については，基本的にこの論文による。

(19) 新納泉「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30巻第3号 考古学研究会 1983年

(20)「墳丘内に併行する墓壙を穿つ時期の古墳の埋葬施設間には計画性が看取され，埋葬時期に一世代以上の時間的経過は認められない。」（井上義光「第4章野山支群の調査 第18節まとめ」『野山遺跡群』Ⅰ 奈良県立橿原考古学研究所 1988年 142頁）

(21) 角南聡一郎「古墳副葬・供献紡錘車の検討」大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編『井ノ内稲荷塚古墳の研究』 2005年

(22) 東村純子「律令国家形成期における鉄製紡錘車の導入と紡織体制」『洛北史学』 第7号 洛北史学会 2005年

a　古墳群遠景
（空中写真，東から）

b　古墳群全景
（空中写真，東から）

図版２

a　第１号古墳全景
（空中写真，北から）

b　第２号古墳全景
（空中写真，南から）

a　第３・７号古墳全景
（空中写真，南から）

b　第１号古墳全景
（調査前，西から）

c　第１号古墳墳丘
（北西から）

図版４

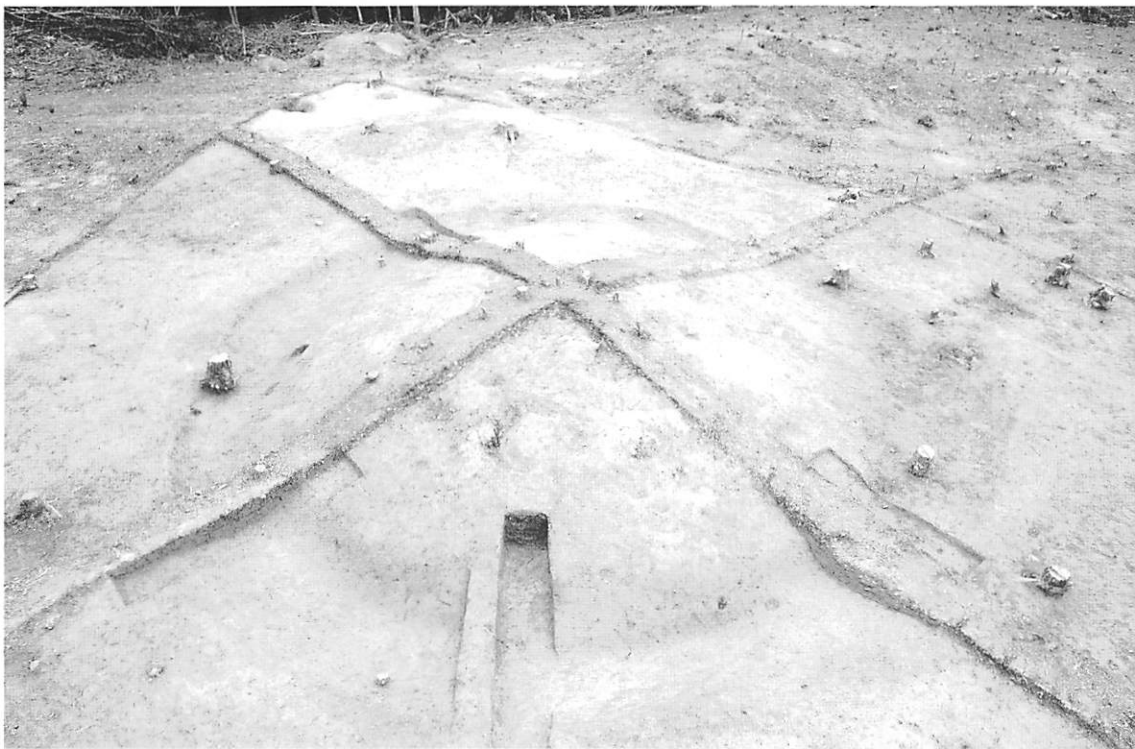
a　第１号古墳墳丘土層
（東西方向東半，
北から）

b　同　上
（東西方向西半，
北から）

c　同　上
（南北方向北半，
西から）

a　第１号古墳墳丘土層
（南北方向南半，
西から）

b　第２号古墳全景
（調査前，北から）



c　第２号古墳墳丘
（南西から）

図版６

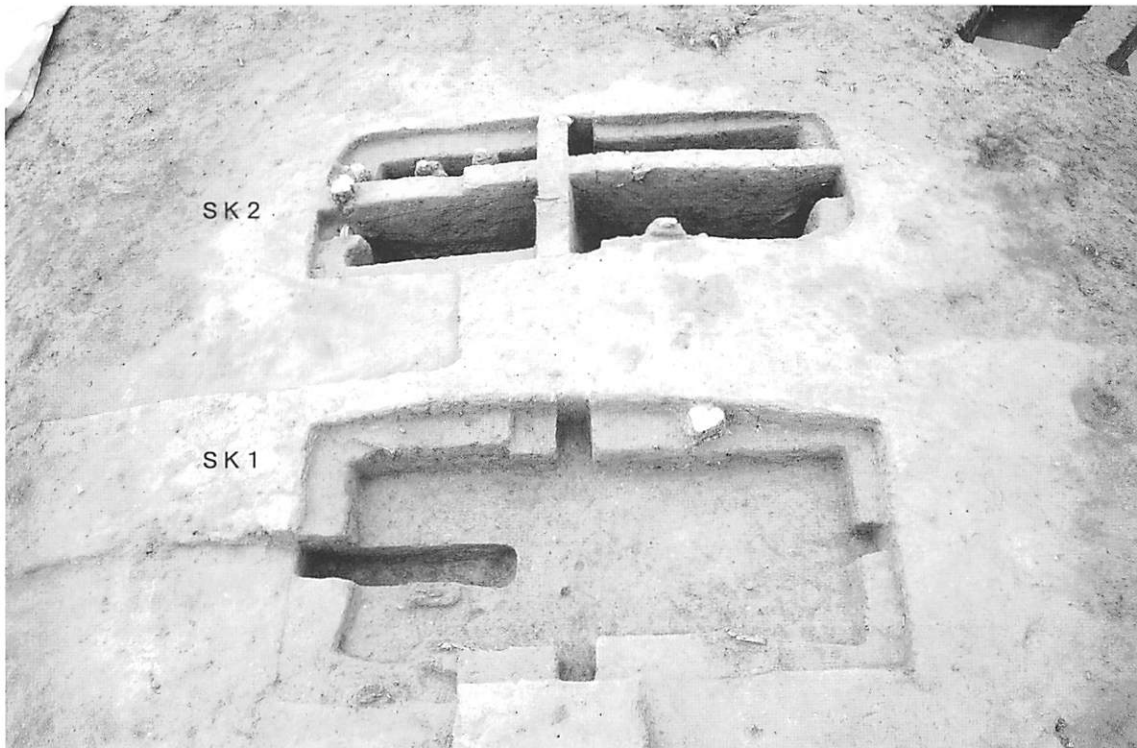
a　第２号古墳墳丘土層
（東西方向東半，
南から）

b　同　上
（東西方向西半，
南から）

c　同　上
（南北方向南半，
東から）

a　第２号古墳墳丘土層
（南北方向北半，
東から）

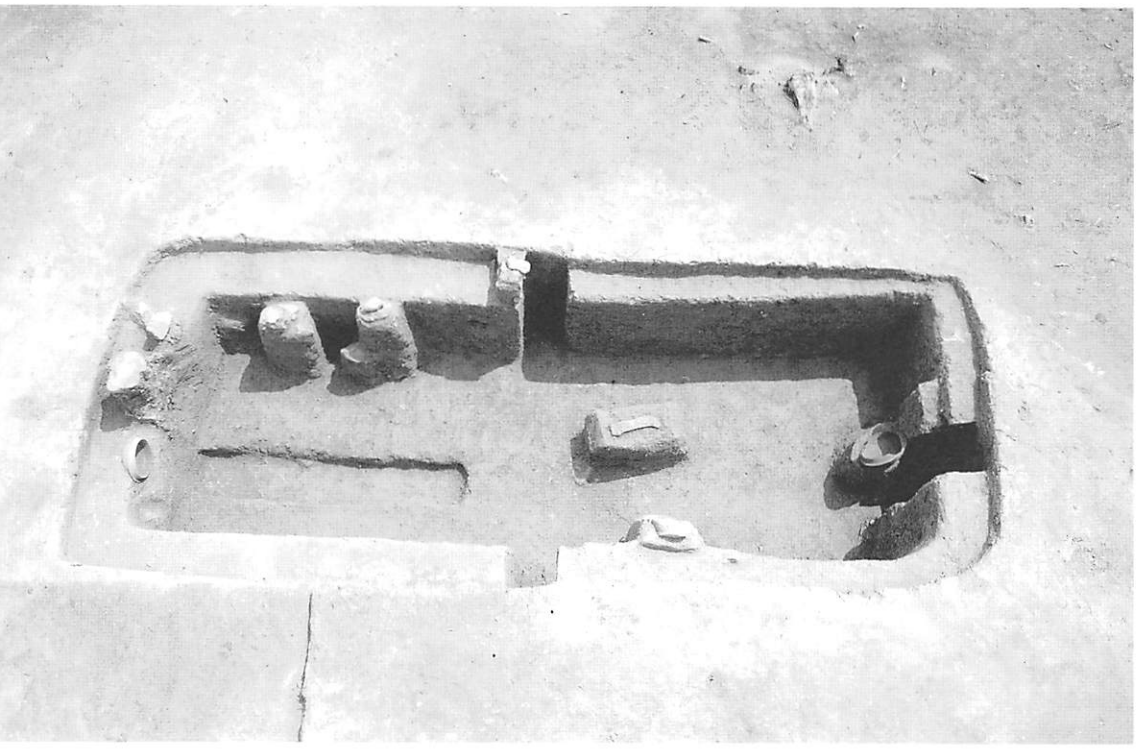
b　第２号古墳周溝土層
（ＳＷ区，南東から）




c　第２号古墳ＳＫ１・２
（北から）

図版８

a　第２号古墳ＳＫ１
（北から）



b　第２号古墳ＳＫ２
（北から）

c　第３号古墳全景
（調査前，南から）

a　第３号古墳墳丘
（南西から）

b　第３号古墳墳丘土層
（東西方向東半，
北から）

c　同　上
（東西方向西半，
北から）

a　第３号古墳墳丘土層
（南北方向北半，
西から）

b　同　上
（南北方向南半，
西から）

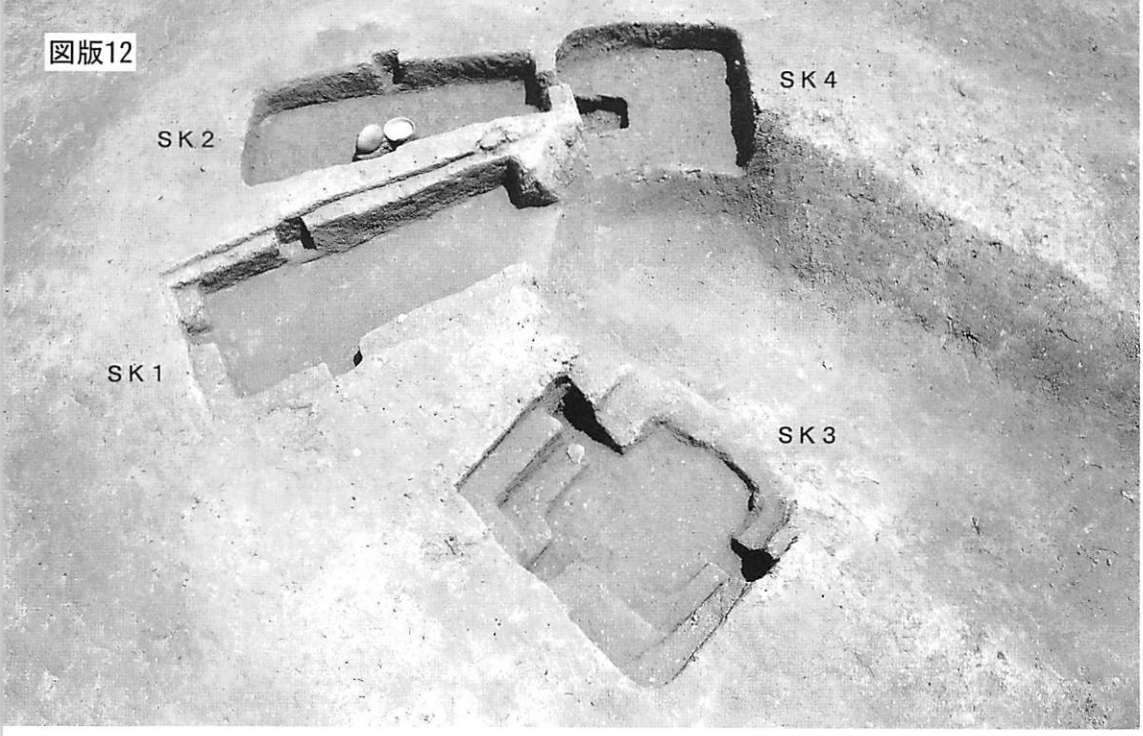
c　第３号古墳ＳＫ１
（北から）

a　第３号古墳ＳＫ２
（北から）

b　同上ＳＫ３（北から）

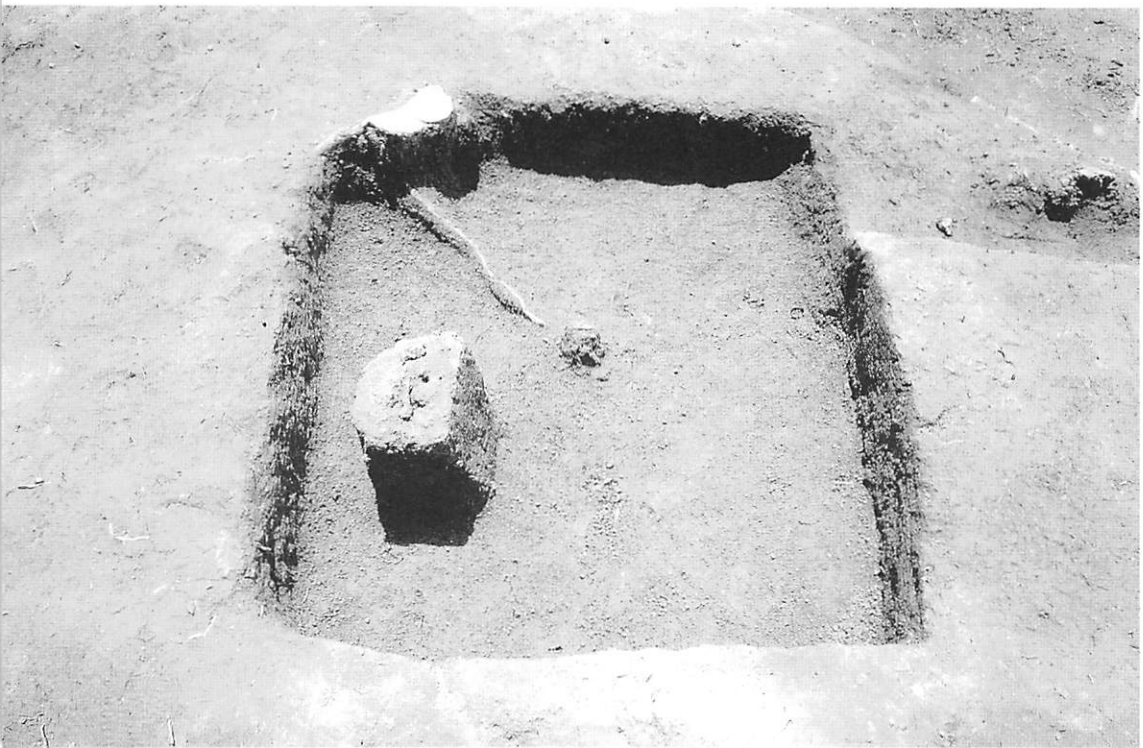
c　同上ＳＫ４（南から）

図版12

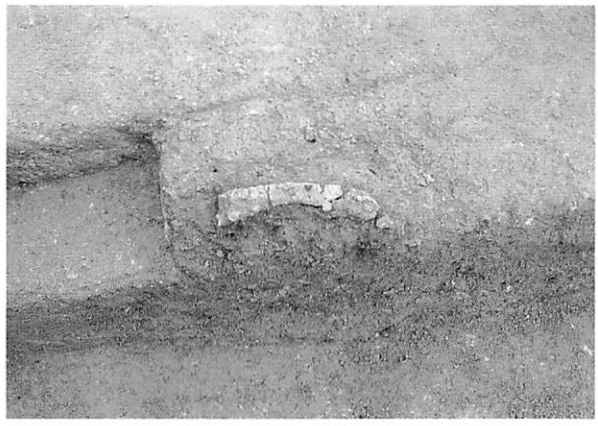



a　第３号古墳ＳＫ１～４
（南西から）

b　第７号古墳墳丘土層
（東西方向，南から）



c　同上ＳＫ１（北から）



a　第２号古墳ＳＫ１鉄鎌12出土状況（南から）

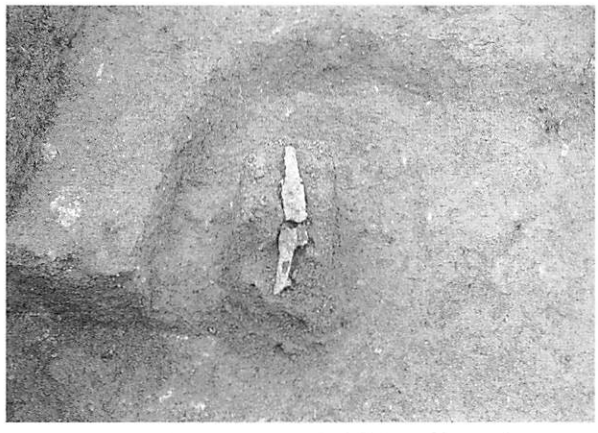
b　同上鉄鏃９～11出土状況（南から）

c　同上ＳＫ２須恵器14出土状況（南西から）

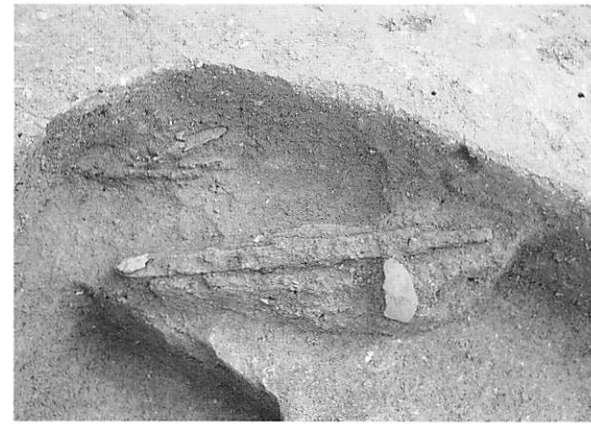
d　第２号古墳ＳＫ２作業風景（西から）

e　第３号古墳ＳＫ１須恵器出土状況（北から）

f　同上ＳＫ２須恵器出土状況（北から）



g　同上ＳＫ３刀子出土状況（東から）

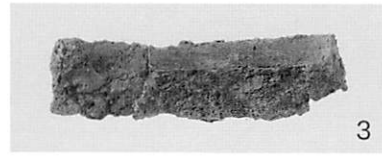


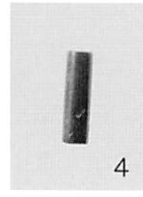
h　同上ＳＫ４鉄器出土状況（南東から）

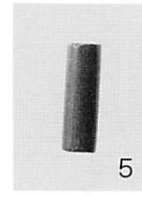
図版14

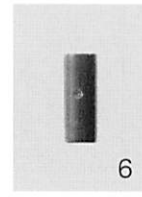
第１号古墳

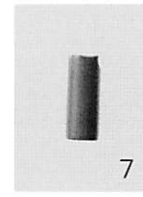
2

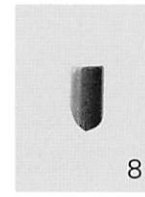

3


4


5


6


7

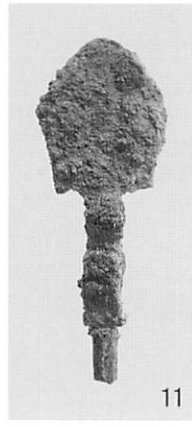

8

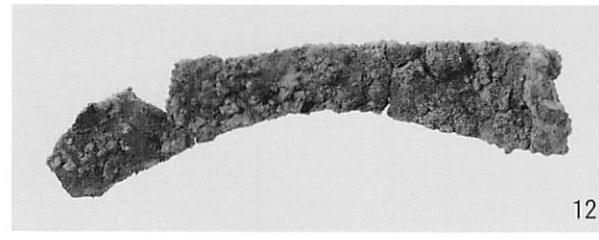
第２号古墳

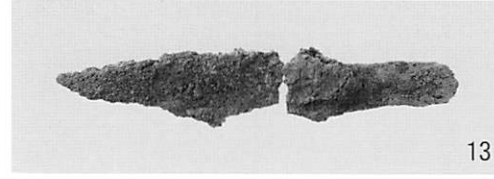
ＳＫ１

9

10


11


12


13

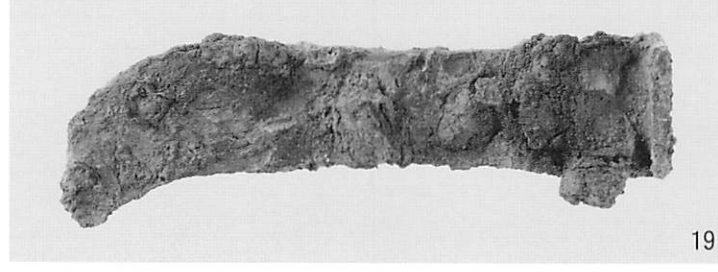
ＳＫ２

14

15

16

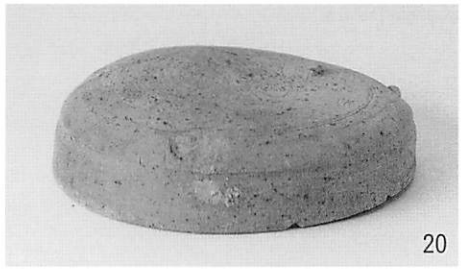
17


19

出土遺物（１）

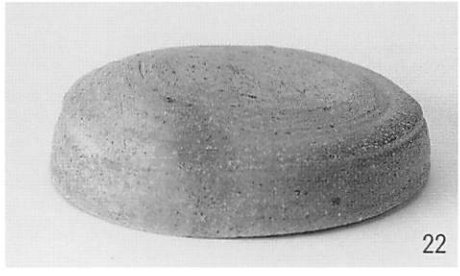
第３号古墳

ＳＫ１

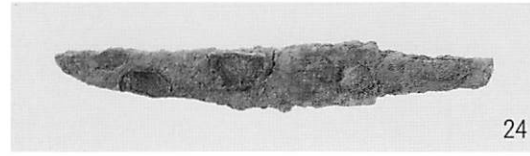

20

21

ＳＫ２


22

23

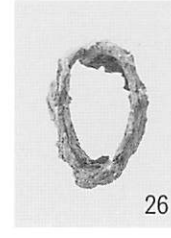

24

27

28

29

30


26

25

第７号古墳　ＳＫ１

32

33

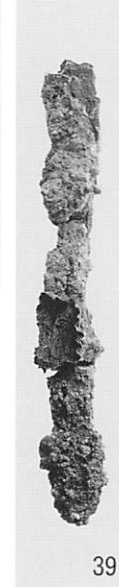
34

35

36

37

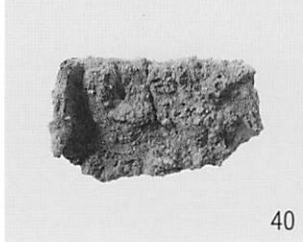
38


39

周溝

31

墳丘


40

41

出土遺物（２）

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつにともなうまいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 |
| 巻次 | 11 |
| 副書名 | 大番奥池第１～３・７号古墳 |
| シリーズ名 | 財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 |
| シリーズ番号 | 第33集 |
| 編著者名 | 梅本　健治 |
| 編集機関 | 財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室 |
| 所在地 | 〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目8-49　　ＴＥＬ082-295-5751 |
| 発行年月日 | 西暦2010年３月31日 |

| ふりがな<br>所収遺跡 | ふりがな<br>所在地 | コード<br>市町村 | コード<br>遺跡番号 | 北緯<br>°′″ | 東経<br>°′″ | 調査期間 | 調査面積<br>㎡ | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 大番奥池第１～３・７号古墳 | 広島県三次市吉舎町敷地字中山546ほか | 34209 | 34584-70～72,406 | 34°44′18″ | 132°58′20″ | 20060417～20060804 | 1,428 | 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る発掘調査 |

| 所収遺跡 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 大番奥池第１号古墳 | 古墳 | 古墳時代 | 古墳（埋葬施設不明） | 須恵器（杯蓋・杯身），管玉，摘鎌 | 攪乱坑あり |
| 大番奥池第２号古墳 | 古墳 | 古墳時代 | 古墳（木棺墓２基） | 須恵器（杯蓋・杯身），鉄鎌，鉄鏃，刀子 | 並葬 |
| 大番奥池第３号古墳 | 古墳 | 古墳時代 | 古墳（木棺墓３基・土坑墓１基） | 須恵器（杯蓋・杯身），鉄刀，鉄鏃，刀子 | 周溝内で鉄鏃出土 |
| 大番奥池第７号古墳 | 古墳 | 古墳時代 | 古墳（土坑墓１基） | 鉄鎌，鉇，鉄鏃，鉄製紡錘車 | 径4.4m×2.8mの楕円形の小円墳 |


要約

南北に長い丘陵頂部に南端から第１～３・７号古墳が並ぶ。いずれも円墳で，南端にある第１号古墳は直径11m，高さ1.4mだが，埋葬施設は不明である。墳丘から摘鎌・管玉が出土した。第２号古墳は径7.7m，高さ1.17mの円墳で，墳頂部で南北に並列する東西軸の木棺墓２基を検出した。北側のＳＫ１は木棺と墓坑の間に鉄鏃３，鉄鎌を副葬し，棺内からは刀子が出土した。南側のＳＫ２は木棺と墓坑の間に須恵器（杯蓋・杯身），棺上に杯蓋と曲刃の鉄鎌を副葬していた。第３号古墳は径10.5m，高さ1.96mの円墳で，墳頂部にやや雑然と並ぶ木棺墓３と土坑墓１を検出した。木棺墓２はいずれも棺上中央に杯蓋・杯身のセット１組を置き，もう１基の木棺墓はほぼ方形の木棺の棺上に刀子１を副葬していた。土坑墓は墓坑隅から鉄刀１，長頸鏃４が出土した。第７号古墳は楕円形の小古墳で，中央の土坑墓から長頸鏃２＋と鉇が，墳丘からは鉄製紡錘車と曲刃鎌片が出土した。第２号古墳・第３号古墳の検討から，①整然とした埋葬施設の配列とやや雑然とした配列から被葬者間の階層面の格差の存在，②須恵器のみの副葬と鉄器，特に鉄鏃を主体とした副葬という副葬内容の面で明確な差異が埋葬施設間にみられ，性差など被葬者間に何らかの格差がみられる。鉄鏃の主体的な副葬から，地域の軍事組織に弓矢で仕えた有力家族の長や成員を被葬者と考えることができる。古墳群の築造年代は６世紀前半と考えられる。

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第33集

**中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う**
**埋蔵文化財発掘調査報告（11）**

**大番奥池第１～３・７号古墳**

発行日　平成22（2010）年３月31日

編　集　財団法人　広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号

ＴＥＬ(082)295-5751　ＦＡＸ(082)291-3951

発　行　財団法人　広島県教育事業団

印刷所　鯉城印刷　株式会社